山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第91集

水口遺跡

MIZUKUCHI　　SITE

——一般県道鴬宿中道線建設に伴う発掘調査報告書——

1994.3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

水口遺跡

MIZUKUCHI　　SITE

——一般県道鴬宿中道線建設に伴う発掘調査報告書—

1994.3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

序

本書は、一般県道鴬宿中道線建設事業に伴い1992年度に発掘調査をおこなった、山梨県東八代郡境川村藤垈728番地外に所在する水口遺跡の調査報告書であります。

本遺跡が存在する境川村は、県のほぼ中央に位置し緑豊かな恵まれた自然環境を有しております。古くは養蚕が農業の中心であり、近年にはブドウ、桃、スモモなどの果樹栽培が盛んであります。村内には縄文時代から平安時代までの多くの遺跡があり、ことに古墳は約57基が確認されております。本遺跡の調査地点についてはこれまで遺跡が確認されておりませんでしたが、今回の事業に先立っておこなわれた分布調査により遺跡が発見されました。

本遺跡は縄文時代と古墳時代の二時期を中心とした遺跡であります。縄文時代は後期前葉の敷石住居を含む4軒の住居跡、配石19基、土坑1基が発見されました。県内におけるこの時期の資料は少なく、この時代の研究にとって大きな成果が得られたと思っております。また、古墳時代では後期の古墳1基が発見されました。墳丘はほとんど削平され、主体部も明かではありませんが、須恵器を中心に、土師器や鉄鏃、鉄釘などが出土しております。他に縄文中期から晩期、平安時代の土器も検出されました。これらの調査結果から本遺跡は縄文時代には集落を形成し、その後古墳時代から平安時代にかけては、周辺に人々が生活を営んでいたことが明らかとなりました。今回の調査では道路に沿って縄文時代集落の南北の拡がりを把握することができましたが、今後の調査研究により、本遺跡の全貌が解明されていくことに期待したいと思います。そして、今回の調査が研究や教育の一助となれば幸甚です。

末筆ながら、調査にあたってご指導・ご協力を賜った関係機関各位、並びに調査に従事された方々に厚くお礼申し上げます。

1994年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所長　大　塚　初　重

例　言

1．本報告書は一般県道鴬宿中道線建設工事に先立ち、山梨県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した東八代郡境川村藤垈728番地外に所在する水口遺跡の発掘調査報告である。
2．本調査は山梨県土木部から県教育委員会が委託を受け、当センターが実施したものである。
3．本報告書の編集は今福利恵、田口明子がおこなった。
4．石器の石材鑑定は帝京大学山梨文化財研究所、河西学氏による。
5．遺物の写真撮影は森和敏、尖頭器の観察・実測・トレースは宮里学、石鏃・石錐・石匙の実測･トレースは野代幸和、古墳時代以降の須恵器・土師器の観察は高橋みゆきがおこなった。(当センター職員)
6．遺物の接合、復元、実測、拓本、トレースおよび図版作成にいたる過程において下記の方々の協力を得た。
柏木まつ江・弦間千鶴・塩島冨美子・平 重蔵・平川涼子・深沢聡美・古屋茂子・古屋和喜子・望月和佳子
7．本報告に関わる出土品および記録図面、写真等は当センターに保管してある。

凡 例

1．敷石、配石、覆土中の礫の大きさは地学団体研究会編　自然を調べる地学シリーズ3「土と岩石」1982　東海大学出版会により、巨礫(人頭大以上)、大礫(拳大～人頭大)、中礫(卵～拳大)、細礫（小豆大）とする。
2．土製品、石器等の遺存状態は6段階に分類した。完(ほぼ完形を含む)、一欠(原形を推測できるもの)、2/3(残存)、1/2(残存)、1/3(残存)、1/4(残存)=(原形不明の破片を含む)。
3．石材はアプライト=Ap カクセン石デイサイト=HD カクセン石安山岩=HA カクセン石輝石安山岩=HPA カコウ岩=Gr デイサイト（石英安山岩)=DA ホルンフェルス=HO 安山岩=An 輝石安山岩=PA 凝灰岩=TU 珪質頁岩=Ss 玄武岩=BA 黒曜石=Ob 砂岩=SA 砂質ホルンフェルス=SH 砂質粘板岩=SCL 蛇紋岩=SE 閃緑岩=Di 点紋片岩=Sp 粘板岩=CL 緑色凝灰岩=Gt チャート=CHと略記する。
4．遺物の観察表中、計測値に(　)がついているものは現存部での数値である。
5．遺構のスクリントーンは焼土を表す。
6．石器のスクリントーンは磨滅した部分・赤色付着物・黒色付着物・敲打痕を表す。
7．グリッドは“A-1”のように略記する。
8．遺構の縮尺は住居跡=1/60、配石＝1/60または1/80、土坑＝1/40、古墳＝1/160である。
9．遺物の縮尺は縄文土器破片1/3、縄文土器完形1/6、須恵器大甕1/8、須恵器大甕以外1/4、土師器1/4、石器は石槍・石鏃など2/3、石斧・磨石など1/4、石皿・石棒など1/8である。

目次

序
例　言
凡　例
第Ⅰ章　遺跡概況
1.調査に至る経緯 …… 1
2.調査組織 …… 1
3.調査方法 …… 1
4.地理的環境 …… 1
5.周辺の遺跡 …… 2
6.基本層序 …… 2
第Ⅱ章　遺構と遺物
第1節　縄文時代 …… 11
1.住居跡 …… 11
2.配石 …… 25
3.土坑 …… 38
4.グリッド出土土器 …… 38
5.土製品 …… 65
6.石器 …… 66
第2節　古墳時代 …… 76
1.1号古墳 …… 76
第3節　その他の出土遺物 …… 80

表目次

第1表　周辺の遺跡一覧表 …… 4
第2表　土製品観察表 …… 65
第3表　石器観察表 …… 73・74
第4表　1号古墳出土土師器・須恵器観察表 …… 78
第5表　1号古墳出土鉄製品観察表 …… 79
第6表　その他の出土遺物観察表 …… 80

挿図目次

第１図　周辺の遺跡（Ｓ＝1/20000）…… 3
第２図　水口遺跡調査範囲（Ｓ＝1/2500）…… 5
第３図　水口遺跡全体図（Ｓ＝1/1000）…… 6
第４図　遺構配置図（１）（Ｓ＝1/160）…… 7・8
第５図　遺構配置図（２）（Ｓ＝1/160）…… 9・10
第６図　１号住居跡平面図…… 12
第７図　１号住居跡炉・石棒A・石棒Ｂ・磨石Ｃ　…… 12
第８図　１号住居跡出土土器（１）…… 13
第９図　１号住居跡出土土器（２）…… 14
第10図　２号住居跡平面図・炉…… 15
第11図　２号住居跡出土土器（１）…… 16
第12図　２号住居跡出土土器（２）…… 17
第13図　３号住居跡平面図…… 18
第14図　３号住居跡炉１（左）・炉２（右）…… 19
第15図　３号住居跡出土土器…… 20
第16図　４号住居跡平面図…… 21
第17図　４号住居跡炉・埋甕・土坑…… 21
第18図　４号住居跡出土土器（１）…… 22
第19図　４号住居跡出土土器（２）…… 23
第20図　４号住居跡出土土器（３）…… 24
第21図　２号配石…… 25
第22図　３号配石…… 26
第23図　４・５・６・８・９号配石…… 27
第24図　10号配石…… 28
第25図　14号配石…… 29・30
第26図　15号配石…… 31
第27図　12・13・16・17・18・19号配石…… 32
第28図　Ｂ区３号配石…… 33
第29図　Ｂ区４号配石…… 34
第30図　１号土坑…… 34
第31図　Ｂ区５号配石…… 34
第32図　Ｂ区５号配石出土土器（１）…… 36
第33図　Ｂ区５号配石出土土器（２）…… 37
第34図　１号土坑出土土器…… 37
第35図　縄文土器分布図（後期初頭）…… 40
第36図　縄文土器分布図（後期前葉）…… 41
第37図　グリッド出土土器（前・中期）…… 42
第38図　グリッド出土土器（後期初頭１）…… 43
第39図　グリッド出土土器（後期初頭２）…… 44
第40図　グリッド出土土器（後期初頭３）…… 45
第41図　グリッド出土土器（後期初頭４）…… 46
第42図　グリッド出土土器（後期初頭５）…… 47
第43図　グリッド出土土器（後期初頭６）…… 48
第44図　グリッド出土土器（後期初頭７）…… 49
第45図　グリッド出土土器（後期初頭８）…… 50
第46図　グリッド出土土器（後期初頭９）…… 51
第47図　グリッド出土土器（後期前葉１）…… 52
第48図　グリッド出土土器（後期前葉２）…… 53
第49図　グリッド出土土器（後期前葉３）…… 54
第50図　グリッド出土土器（後期前葉４）…… 55
第51図　グリッド出土土器（後期前葉５）…… 56
第52図　グリッド出土土器（後期前葉６）…… 57
第53図　グリッド出土土器（後期前葉７）…… 58
第54図　グリッド出土土器（後期後葉１）…… 59
第55図　グリッド出土土器（後期後葉２）…… 60
第56図　グリッド出土土器（晩期前葉）…… 61
第57図　土製品（１）…… 63
第58図　土製品（２）…… 64
第59図　土製品（３）…… 65
第60図　石器（１）…… 66
第61図　石器（２）…… 67
第62図　石器（３）…… 68
第63図　石器（４）…… 69
第64図　石器（５）…… 70
第65図　石器（６）…… 71
第66図　石器（７）…… 72
第67図　１号古墳全体図（Ｓ＝１/160）…… 75
第68図　１号古墳遺物分布図…… 76
第69図　１号古墳出土土師器・須恵器…… 77
第70図　１号古墳出土鉄製品…… 79
第71図　その他の出土遺物…… 80

写真図版目次

図版１　1.１号住居跡
　　2.１号住居跡炉
　　3.１号住居跡石棒Ａ
　　4.１号住居跡石棒Ｂ
　　5.２号住居跡
　　6.２号住居跡炉
　　7.２号住居跡土器出土状況（1）
　　8.２号住居跡土器出土状況（2）
図版２　1.３号住居跡
　　2.３号住居跡炉１
　　3.３号住居跡炉１埋設土器
　　4.３号住居跡炉２
　　5.４号住居跡
　　6.４号住居跡炉
　　7.４号住居跡埋甕
　　8.２号配石
図版３　1.３号配石
　　2.４号配石
　　3.４号配石土坑
　　4.５号配石
　　5.５号配石土坑
　　6.６号配石
　　7.６号配石土坑
　　8.８号配石
図版４　1.９号配石
　　2.10号配石
　　3.10号配石Ａ土坑
　　4.10号配石Ｂ土坑
　　5.12号配石
　　6.13号配石
　　7.14号配石
　　8.14号配石土偶出土状況
図版５　1.15号配石
　　2.16号配石
　　3.17号配石
　　4.19号配石
　　5.Ｂ区４号配石
　　6.Ｂ区４号配石下部
　　7.Ｂ区５号配石
　　8.Ｂ区５号配石下部
図版６　1.Ｂ区５号配石石棒①
　　2.Ｂ区５号配石石棒②
　　3.１号土坑
　　4.尖頭器出土状況
　　5.１号古墳
　　6.１号古墳主体部
　　7.１号古墳鉄釘出土状況
　　8.１号古墳鉄製品出土状況
図版７　住居跡出土土器
図版８　把手
図版９　1.土偶
　　2.土製円盤
図版10　1.土製耳飾り
　　2.蓋
　　3.垂飾
　　4.不明土製品
　　5.ミニチュア土器
図版11　1.尖頭器
　　2.石鏃
　　3.石錐・石匙
　　4.小形磨製石斧・不明石製品
　　5.石棒
　　6.石皿

第Ⅰ章　遺跡概況

1.調査に至る経緯

一般県道鴬宿中道線の建設予定地において、1991年度内に遺跡の分布調査を行い、縄文時代中期の土器片多数を採集した。それにより水口遺跡の存在を発見し、県土木部道路建設課および石和土木事務所との協議により、翌年、記録保存を目的とした調査を行った。

発掘調査は1992年5月11日～1993年3月15日まで行われた。また、発掘調査終了後引き続き整理作業が行われ、報告書作成に至った。

2.調査組織

調　査　主　体　山梨県教育委員会

調　査　機　関　山梨県埋蔵文化財センター

調 査 担 当 者　今福利恵・田口明子(文化財主事)

作業員･整理員　秋山吉子・芦沢津屋子・池田武子・池谷馨・岩沢白・橘田春子・窪川英樹・桑原をぎん・小林佐津恵・小林早苗・小林佐和子・斎藤妙子・三枝袈裟男・佐野政照・塩島冨美子・須田重則・武田きく江・田中数馬・田中カツ江・田中妙子・長坂清・名取静・名取八重子・七沢芳江・成島恒子・平川涼子・古屋茂子・古屋和喜子・宮川一江・宮久保あさ乃・望月和佳子

協 力 者･機 関　境川村建設課、境川村教育委員会 林部 光、県土木部道路建設課、石和土木事務所道路課、帝京大学山梨文化財研究所 河西 学、都築恵美子(敬称略･順不同)

3.調査方法

南北約230m、東西約12mの調査区は面積約2800㎡あり、村道を挟んで北側をＡ区、南側をＢ区とし、それぞれ5mグリッドを設定した。Ａ区は東から西へＺ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄのアルファベットを、南から北へ1・2・3～の算用数字を付した。Ｂ区は東から西へＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄのアルファベットを、北から南へ1・2・3～の算用数字を付した。(第４・５図)

調査区の南北端はそれぞれトレンチによる試掘を行い遺跡の範囲確認を行った。(第３図)

4.地理的環境

山梨県の中央に位置する面積約350㎢の甲府盆地。その甲府盆地の南端には、富士北麓地方との間にほぼ東西に横たわる地塁状の御坂山地(御坂山脈)がある。御坂山地と甲府盆地の間には、曽根丘陵が境川村坊ヶ峰から三珠町大塚に至る東西約15km、南北約4kmに続く。境川村は御坂山地の西部北側にあたり、甲府盆地の南部、笛吹川左岸に位置し、大きく平地･丘陵･山岳地区に区分される。

本遺跡は、境川村の丘陵地区でも標高の比較的高い約400m付近の開析扇状地の中の微高地上に位置する。鴬宿峠の谷に発する境川は、本遺跡の約140m東を北流し、北西方向で秩父山地に源を発する笛吹川に合流する。境川の東にある尾根の反対側には狐川も北流し、笛吹川に合流している。現在、遺跡の東側で東に蛇行している境川の旧河道が遺跡のすぐ近くにあり、以前は、直線的な流れであった。本遺跡は、北西に向かう緩斜面にあり、北西には標高約400mの坊ヶ峰を望む。

5.周辺の遺跡

水口遺跡がある境川村には、古来より多くの先人の足跡が残されていることが「境川村誌」にも記されている。ここでは水口遺跡で出土した縄文時代中～晩期、および古墳時代を中心に遺跡の分布を概観してみたい。

まず、境川沿いにある縄文時代の遺跡は、本遺跡から東に約200mのほぼ同標高地点に、当センターが昭和60年に調査した切附遺跡（２）がある。この遺跡からは、遺構は伴わないが中期後半の土器片が出土している。また、本遺跡の約200m南には、同年当センターで調査した智光寺遺跡（５）があり、中期の土器が発見されている。これらの遺跡より標高の高い地域には概期の遺跡は今のところ認められない。しかし、東にある狐川沿いには、本遺跡より標高が約100m高い地点に中期の立石南遺跡（80）、机遺跡（81）がある。

縄文期の遺跡は標高350m以下に多くあるが、境川左岸には、坊ヶ峯が隣接しているためか、ほとんど遺跡は認められていない。しかし、坊ヶ峯の西側には多く分布している。現地形から見て、川が坊ヶ峯の西側に流れていたことがその原因であろう。

一方、曽根丘陵上に立地する本村は、古墳の多いことで知られている。「境川村誌」によれば57基の古墳が登録されており、未登録を含めると80基を下らないと推定している。隣接する中道町の曽根丘陵上には前期の巨大な国指定史跡銚子塚古墳附丸山塚古墳、大丸山古墳、天神山古墳等があり古墳時代の中心地の一つと考えられている。村内の古墳は、その続きとして多く存在するのであろうが、特に境川、狐川流域に集中しており、そのほとんどが後期古墳である。（第１図、第１表）

6.基本層序

約250mの南北に長い調査区は北西に向かう下り斜面であり、その比高差は約12mを測る。そのため、調査地点により若干の層位の違いがみられる。本遺跡の基本層序をＡ－１～７を基準に述べると、次のようになる。なおⅡ・Ⅲ層が縄文期の遺物包含層であり、Ⅳ・Ⅴ層は地山である。

Ⅰ層　表土層(耕作土)

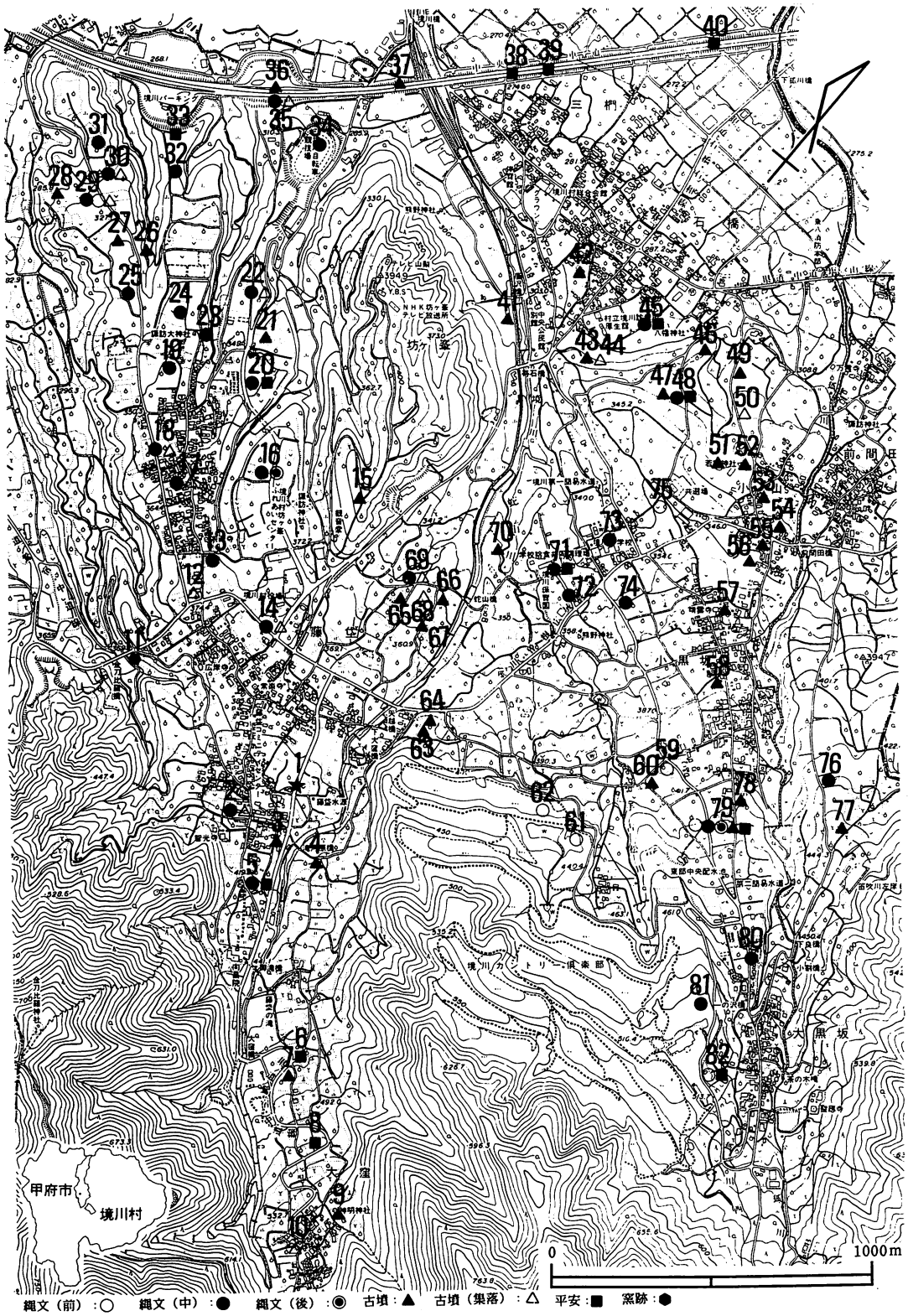
Ⅱ層　黒褐色土　　中礫を若干含む　焼土粒・炭化物粒若干含む

Ⅲ層　暗褐色土　　中～大礫多く含み、部分的に巨礫を若干含む　黄色砂粒・白色砂粒少量含む

Ⅳ層　暗褐色土　　中礫若干含む　砂粒・細礫・黄色砂粒多く含む

Ⅴ層　暗黄褐色土　　(褐色土に黄色砂ブロック混入)淡黄色砂粒多く含み、部分的にブロックまたは斑状に混入　砂粒少量含む　部分的に大礫若干含む

古墳のある地点では、表土下に盛土があり、その下層に古墳期の包含層がⅡ層上に堆積している。また、Ｂ区では5号配石上に洪水砂層が薄く堆積している。

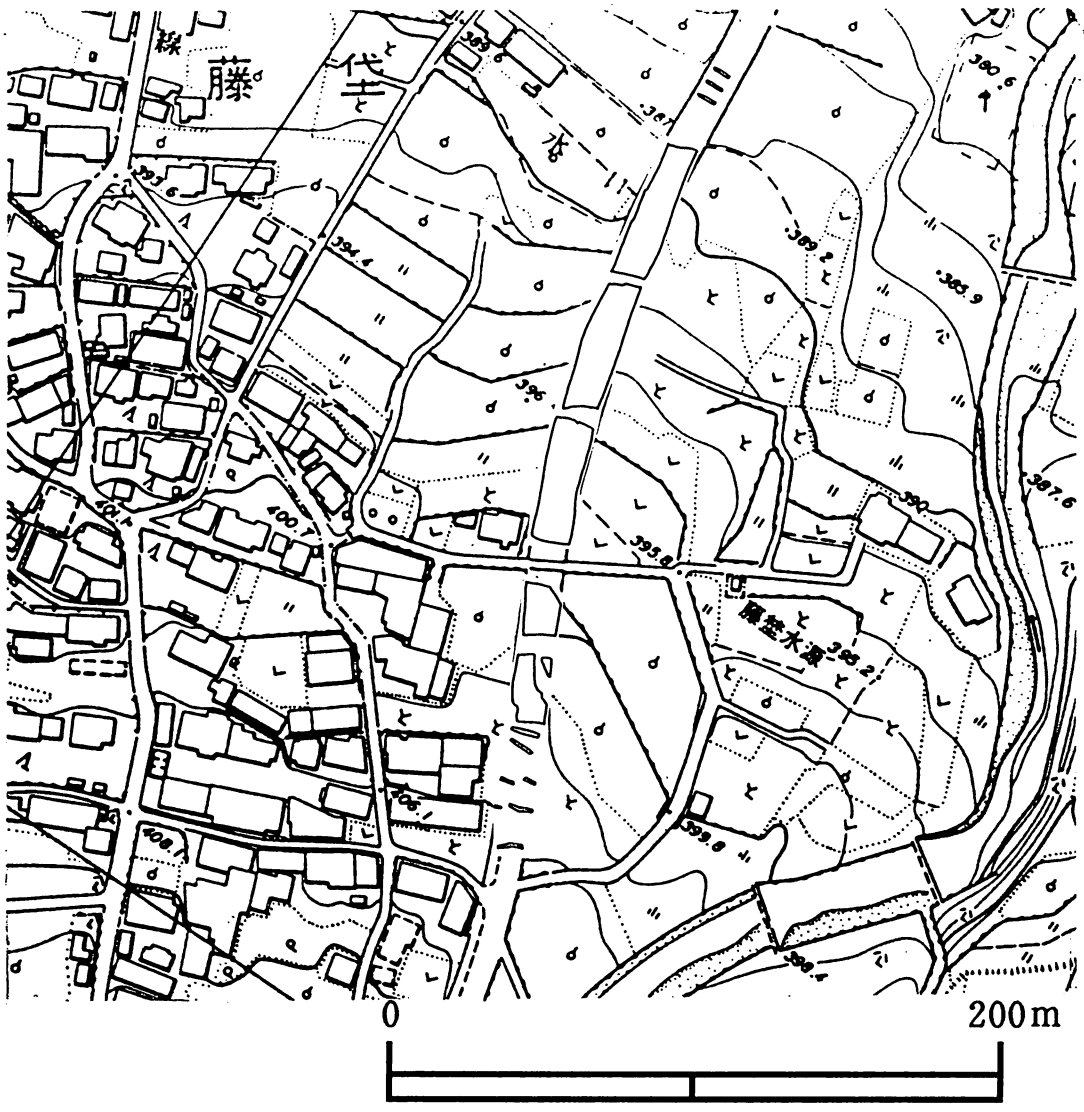


第１図　周辺の遺跡（S=1/20000）

第１表　周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	種　別	時　期
1	水口遺跡	集落跡	縄文（中～晩）
		古　墳	古墳（後）
2	切附遺跡	集落跡	縄文（中）
3	滝ヶ原古墳群	円　墳	古墳（後）
4	毘沙門塚古墳	円　墳	古墳
5	智光寺遺跡	散布地	縄文（中）
			平安
	滝河原二号墳	円　墳	古墳（後）
6	温湯北遺跡	散布地	平安
7	口明塚古墳	円　墳	古墳
8	温湯遺跡	散布地	平安
9	浅霧塚古墳	円　墳	古墳（後）
10	赤羽遺跡	散布地	古墳（前）
11	牛居沢窯跡	窯　跡	古墳～平安
12	薊在家遺跡	集落跡	古墳（後）
13	室屋遺跡	集落跡	縄文（中）
14	辻遺跡	集落跡	縄文(中)･古墳(後)
15	藤塚古墳	円　墳	古墳
16	北の宮遺跡	散布地	縄文（中～後）
17	諏訪前南遺跡	散布地	縄文（中）
			古墳（後）
18	諏訪前中遺跡	散布地	縄文（中）
			古墳（後）
19	諏訪前北遺跡	散布地	縄文（中）
20	後子の神遺跡	散布地	縄文（中）
			平安
21	塚の越３号墳	古　墳	古墳（後）
22	八乙女南遺跡	散布地	縄文（中）
			古墳（後）
23	諏訪尻東遺跡	散布地	縄文（中）
24	諏訪尻遺跡	散布地	縄文（中）
25	下原南遺跡	散布地	縄文（中）
26	飯漬塚一号墳	円　墳	古墳（後）
27	狐塚古墳	円　墳	古墳（後）
28	飯漬塚二号墳	円　墳	古墳（後）
29	下原遺跡	散布地	縄文（前･中）
			古墳（後）
30	天神下遺跡	散布地	縄文（中）
			古墳（後）
31	天神山遺跡	散布地	縄文（中）
32	御所山南遺跡	散布地	縄文（中）
33	御所山北遺跡	散布地	平安
34	八乙女中遺跡	散布地	縄文（中）
35	八乙女北遺跡	散布地	縄文（中）
			古墳（後）
36	八乙女塚古墳		古墳（中）
	＜馬乗山１号墳＞	円　墳	
	＜　〃　２号墳＞	前方後円墳	
37	口開塚古墳	円　墳	古墳（前）
38	石橋条里制遺構		
	第1地点	集落跡	平安（後）
39	石橋条里制遺構		
	第2地点	集落跡	平安（後）

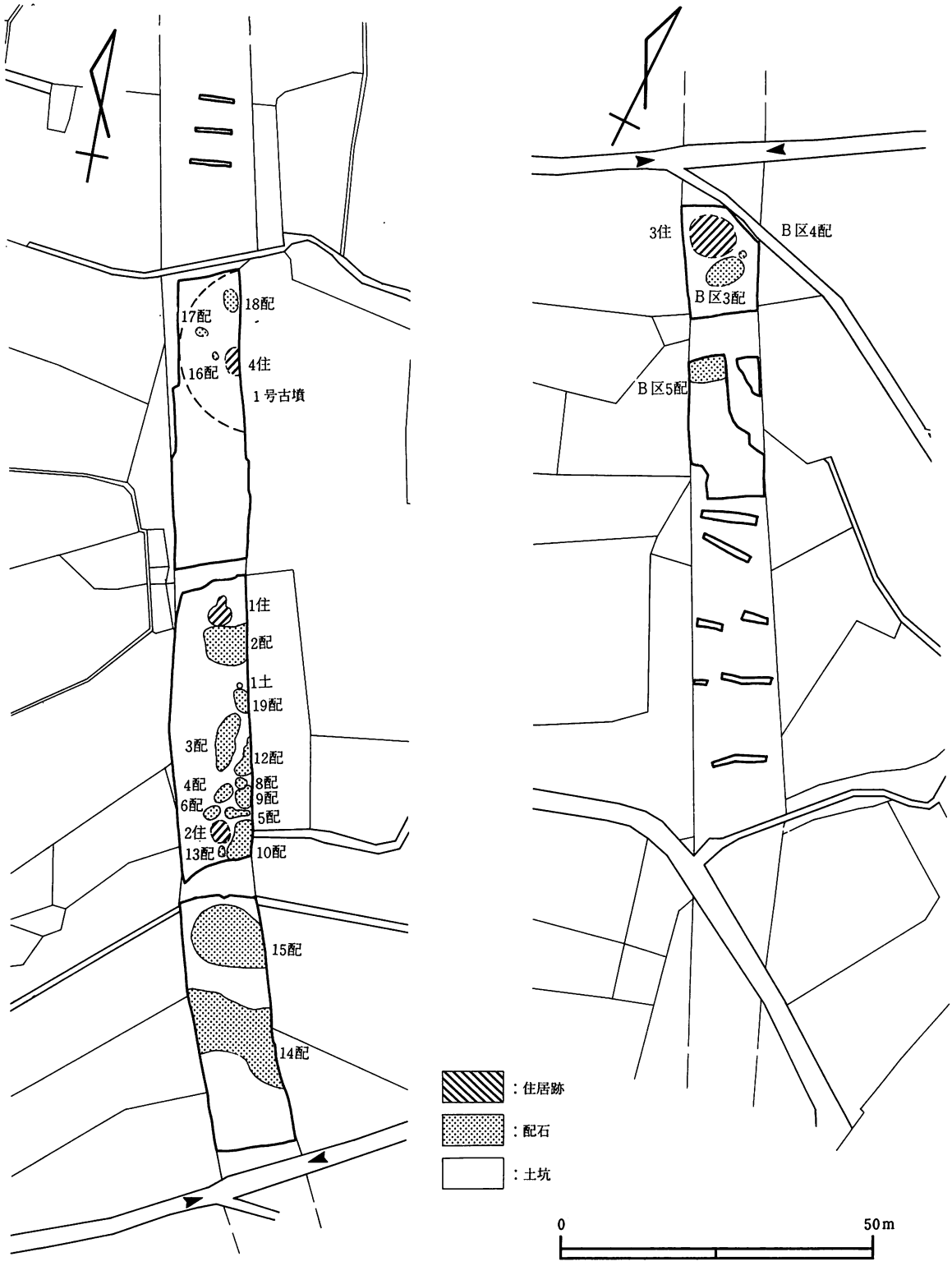
No.	遺跡名	種　別	時　期
40	石橋条里制遺構		
	第3地点	集落跡	平安（後）
41	川向塚古墳	円　墳	古墳（後）
42	先屋敷塚古墳	円　墳	古墳（後）
43	道見塚古墳	円　墳	古墳
44	堤遺跡	散布地	古墳（後）
45	毘沙門遺跡	散布地	縄文（中）
			平安
46	西窪古墳	円　墳	古墳（後）
47	西原古墳	円　墳	古墳
48	西原遺跡	散布地	縄文（中）
			平安
49	大塚古墳	円　墳	古墳
50	中丸遺跡	散布地	古墳
51	山の神塚二号墳	円　墳	古墳
52	山の神塚古墳	円　墳	古墳
53	小山中村二号墳	円　墳	古墳（後）
54	小山中村一号墳	円　墳	古墳（後）
55	東窪一号墳	円　墳	古墳
56	東窪二号墳	円　墳	古墳
57	宝塚古墳	円　墳	古墳
58	御崎塚古墳	円　墳	古墳（後）
59	立石北遺跡	散布地	縄文（前）
60	二子塚古墳	円墳	古墳
61	寺平遺跡	集落跡	縄文（前）
62	亀の子Ａ遺跡	散布地	縄文（前）
63	丸山塚古墳	円　墳	古墳
64	四石田古墳	円　墳	古墳
65	大塚一号墳	円　墳	古墳（後）
66	大塚二号墳	円　墳	古墳（後）
67	大塚三号墳	円　墳	古墳（後）
68	大塚遺跡	散布地	古墳（後）
69	上帯石遺跡	散布地	縄文（中）
			古墳（後）
70	蛇山古墳群	円　墳	古墳（後）
71	間の田遺跡	散布地	縄文（中）
			平安
72	四石田遺跡	集落跡	縄文（中）
73	柳原遺跡	集落跡	縄文（中）
74	金山遺跡	集落跡	縄文（中）
75	京原遺跡	集落跡	縄文（前）
76	中原遺跡	散布地	縄文（中）
77	立塚古墳	円　墳	古墳（後）
78	浅間塚古墳	円　墳	古墳（後）
79	一の沢遺跡	集落跡	縄文（前・中）
	一の沢北遺跡	集落跡	縄文（前～中）
			平安
	一の沢古墳群（４基）	円墳	古墳（後）
	一の沢西遺跡	集落跡	縄文（中～後）
80	立石南遺跡	集落跡	縄文（中）
81	机遺跡	集落跡	縄文（中）
82	砂原山遺跡	集落跡	縄文（前）
			平安



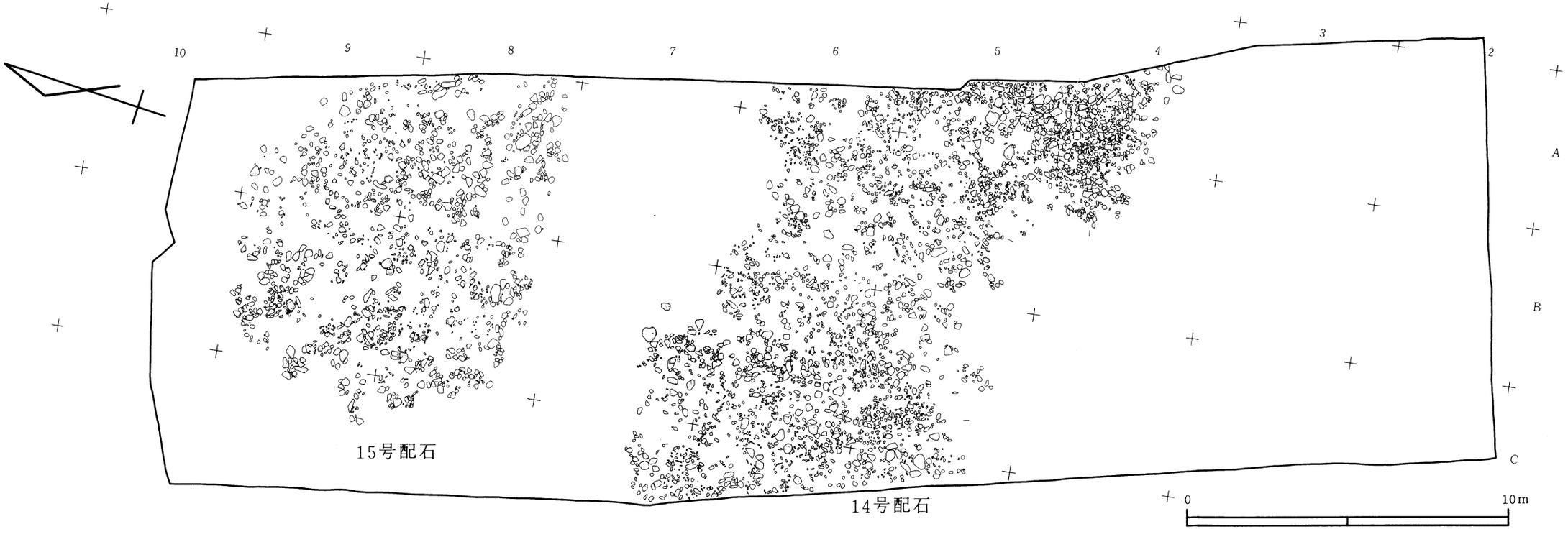
第２図　水口遺跡調査範囲（S=1/2500）

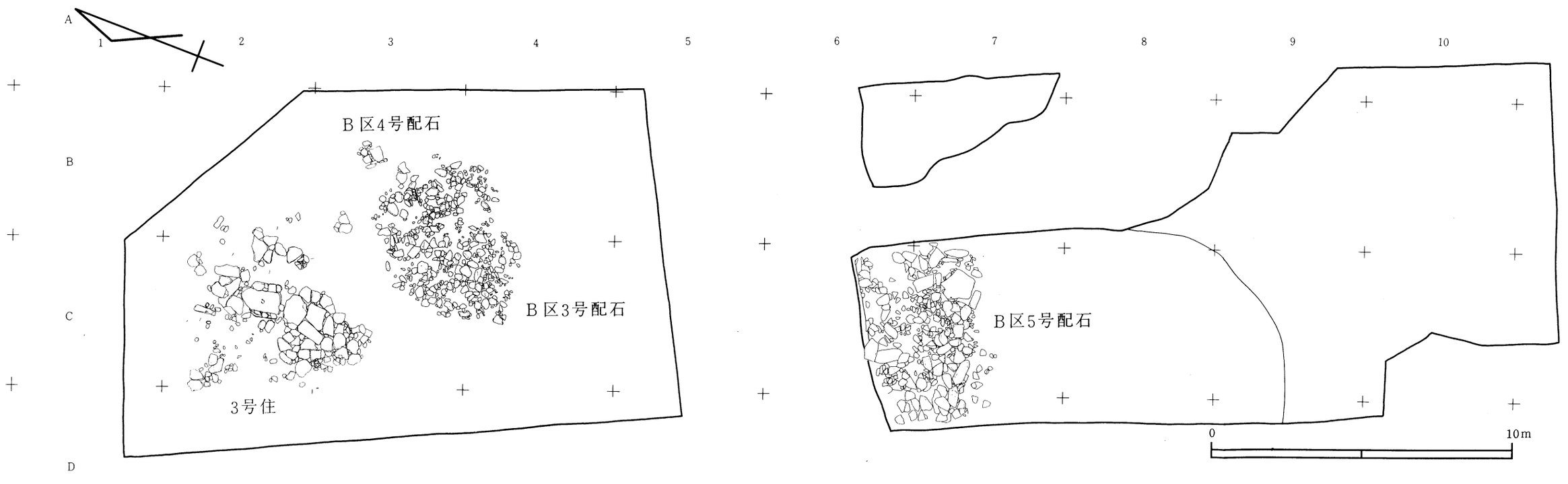
【参考文献】

『辻遺跡と薊在家遺跡』山梨県教育委員会他　1974　　『京原遺跡』山梨県教育委員会他　1974
『全国遺跡地図・山梨県』文化庁　1981
『柳原遺跡』境川村教育委員会埋蔵文化財調査報告第１輯　境川村教育委員会　1983
『石橋条里制遺構・蔵福遺跡・侭の下遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第３集　山梨県教育委員会他　1984
『八乙女塚古墳（馬乗山１号・２号墳）・口開遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第5集 山梨県教育委員会他　1985
『小黒坂南遺跡群』境川村教育委員会埋蔵文化財調査報告第３輯　境川村教育委員会他　1986
『一の沢西遺跡・村上遺跡・後呂遺跡・浜伊場遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第16集 山梨県教育委員会他　1986
『上野原遺跡・智光寺遺跡・切附遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第19集 山梨県教育委員会他　1987
『一の沢北遺跡他発掘調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第33集　山梨県教育委員会他　1988
『一の沢・金山遺跡』境川村教育委員会埋蔵文化財調査報告第４輯　境川村教育委員会　1989
『一の沢遺跡調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第42集　山梨県教育委員会　1989
『京原遺跡』境川村教育委員会埋蔵文化財調査報告第５輯　境川村教育委員会他　1989
『境川村誌　資料編』境川村　1990
『山梨県生産遺跡分布調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第51集　山梨県教育委員会　1990
『四石田遺跡』境川村教育委員会埋蔵文化財調査報告第６輯　境川村教育委員会　1991
『年報９』山梨県埋蔵文化財センター　1993

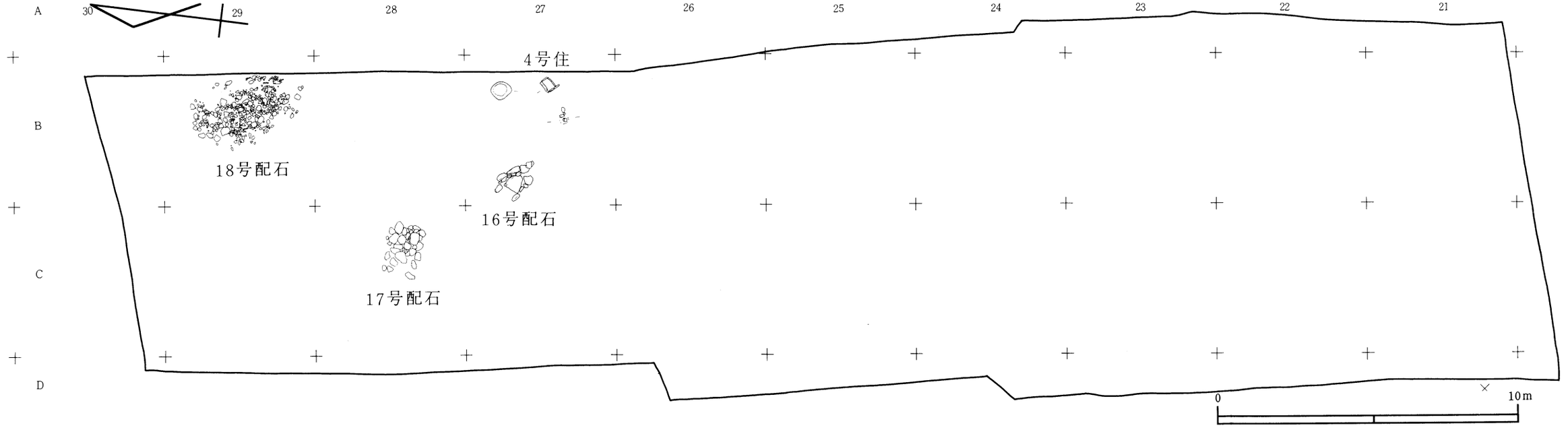


第３図　水口遺跡全体図（S=1/1000）





第4図　遺構配置図（1）（S=1/160）



第５図　遺構配置図（2）（S=1/160）

第Ⅱ章　遺構と遺物

第１節　縄文時代

１.住居跡

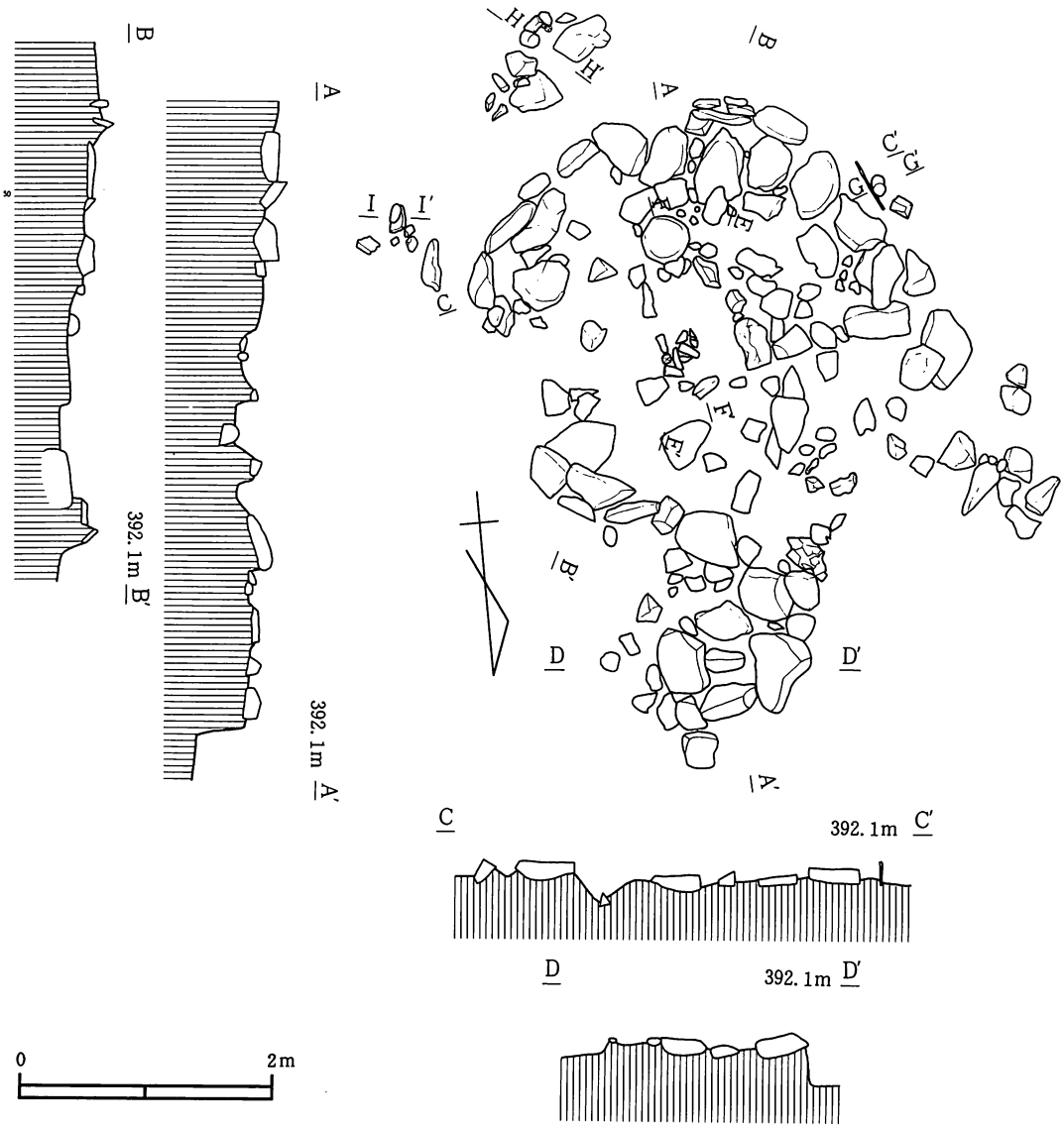
今回の調査では、縄文時代前期末から晩期初頭までの遺物が発見されているが、中心となるのは後期前半で、称名寺１式期と堀之内１式期を中心とする配石を伴う集落遺跡である。検出された遺構は、称名寺１期の住居跡２軒、堀之内１期の敷石住居跡２軒、土坑１基、配石19基である。

１号住居跡（第６・７図）

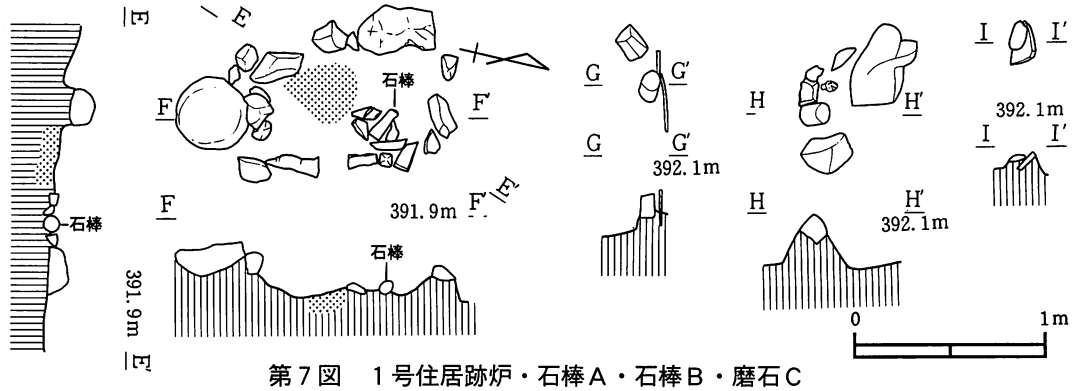
Ａ区Ｃ－19に位置する。柄鏡形敷石住居跡で遺存状況はあまりよくない。径３.６ｍの円形のプランに長方形の張り出しをもち、全長５.３ｍとなる。住居のプランの外周にはやや扁平で細長い石を立たせるようにめぐらせている。このうち住居跡西側は厚さ２cmほどの非常に薄い板状の石が立てられ、外側に接して石棒が立てられていた。さらに住居跡の南側と東側には、住居よりやや離れた位置に薄い板状の石と石棒が立って検出された。いずれも同じ形態で住居をとりまくように検出されたことより本住居に伴うものと考えられる。住居床面の敷石は、住居跡南側と張り出し部においてよく残されているほか、中央部を中心に大部分が抜き取られていた。敷石の石材には扁平で丸みをもつ自然礫が使われている。炉についてもほとんど石が抜き取られ、原形をとどめていない。炉内底面の一部で焼土が検出され、また石棒がよこたわって出土した。炉内覆土は磨滅した土器片とともに砂利が多く、人為的に埋められた形跡が認められる。張り出し部分は、一部石が抜き取られているが、主軸に沿って３列に並ぶ。比較的扁平な石を両側にならべ、中には細長い石が使われている。柱穴については検出できなかった。

出土土器（第８・９図）

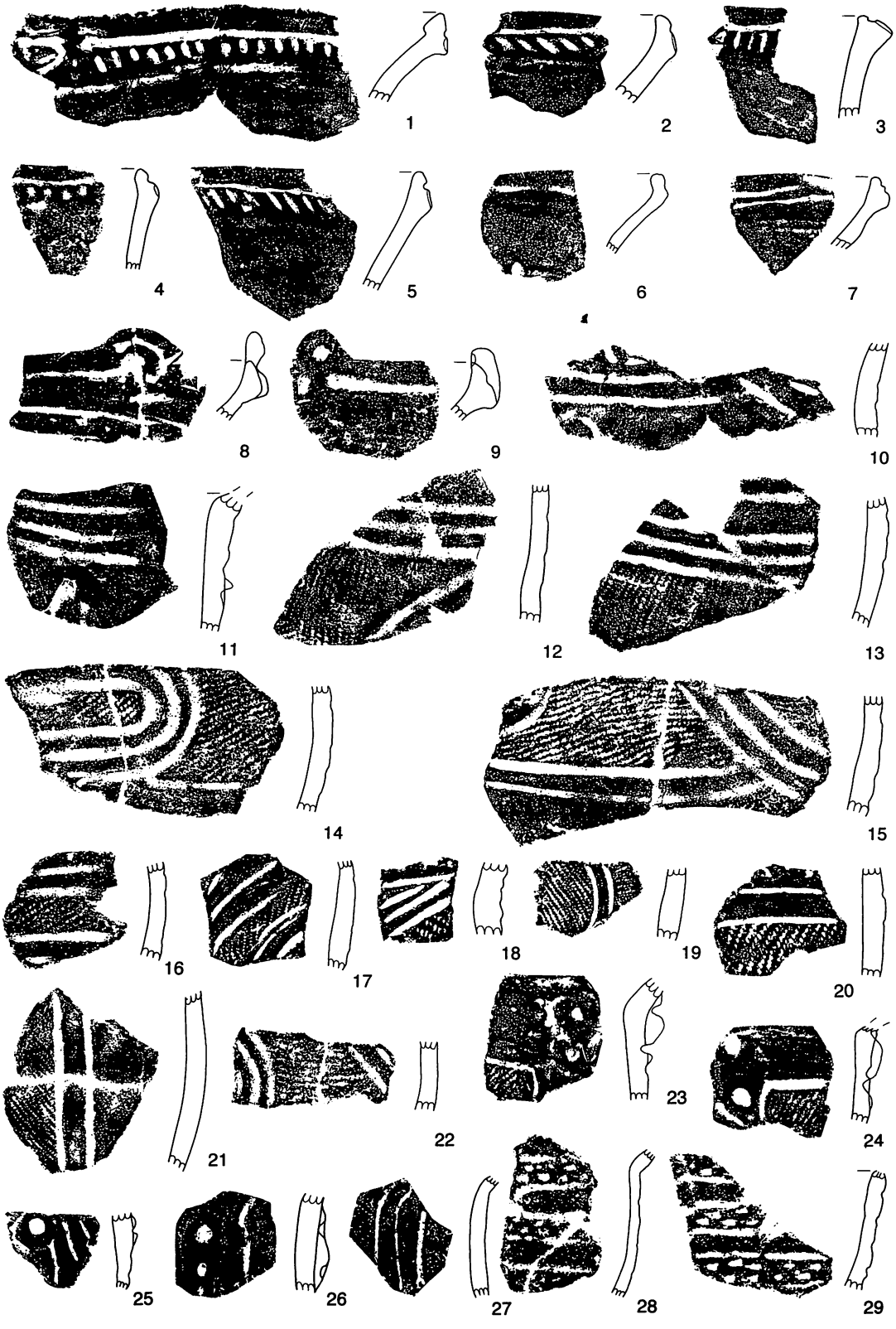
覆土中の出土がほとんどで、土器は炉内を中心に廃棄された状態で多くみつかったが、小破片が多数をしめ、磨滅が著しい。１～５は口縁部に沈線がめぐり沈線下に刻みを持つもの、６～９は刻みをもたないもの、８は円孔をもつ突起がつくものでさらに口唇部下にも沈線がめぐるものである。９は口唇部に突起が縦につき、沈線を区切っている。12～22は胴部破片で縄文を地文とし、２から３本の沈線でモチーフがかかれている。横位に展開するモチーフが主体となるものであろう。23～26は頚部に８の字状貼付文がつくもので、23・24は沈線によって区画されたなかに縄文がみられ、25・26は縦位の沈線による文様が描かれている。28・29は同一個体と思われ、横位の沈線で区画された中を交互に列点で充填するものである。第９図１・２は口縁部を肥厚させ、そこに狭い文様帯を持つ。文様は二本の沈線の間に刺突文が施されるものである。３～６は複数の縦位の沈線を単位とし、その間に斜行する沈線がかかれている。10は注口土器の胴部破片である。11～14は複数の縦位の沈線を単位とするモチーフを基本とするもので、間に横位の文様がみられるものがある。17～19は曲線を文様の基本にしている。21・23は注口土器の胴部破片と思われる。24・25は縄文のみで構成され、２段の縄の横位施文である。26～29は底部破片で、網代痕のあるものがある。



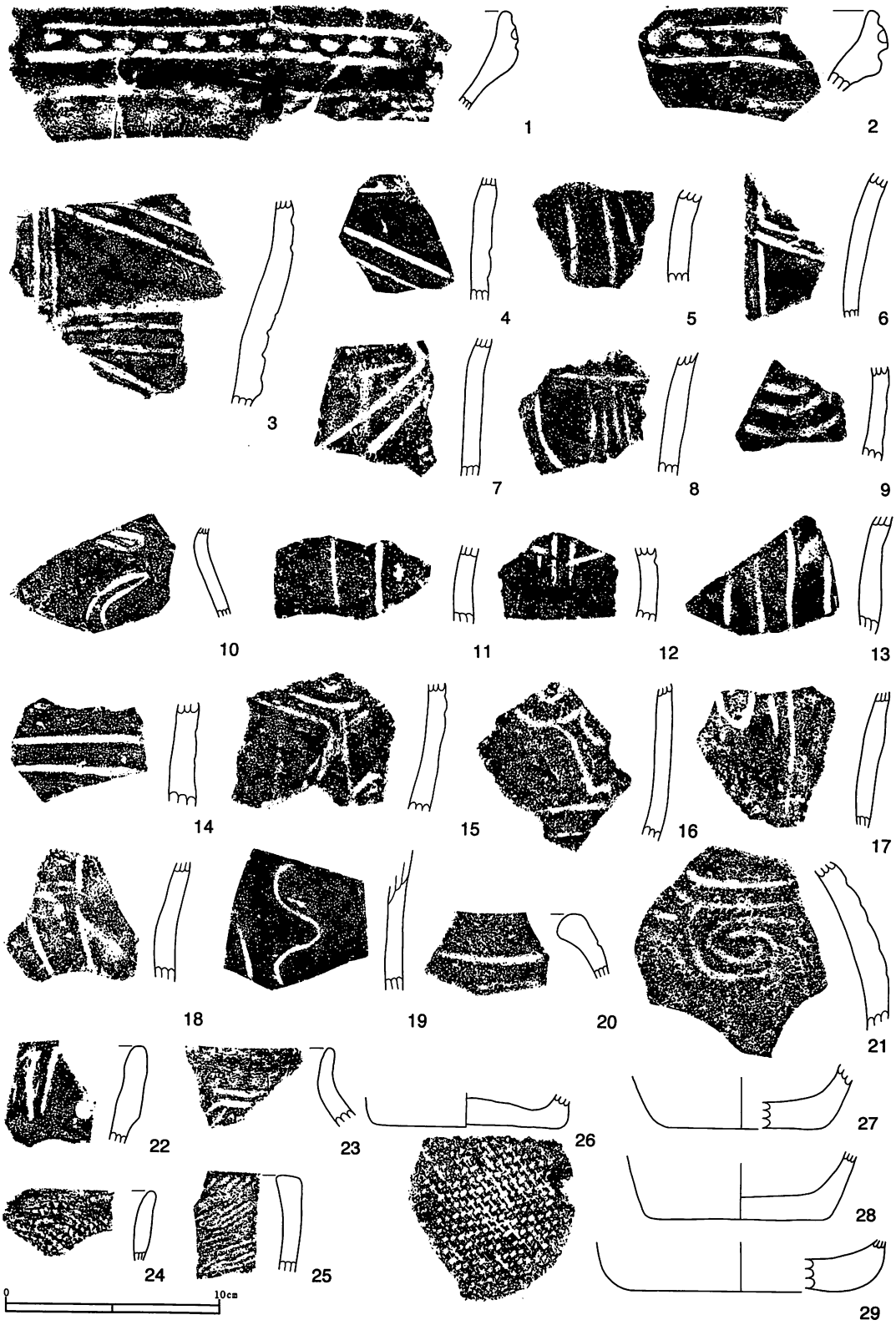
第6図　1号住居跡平面図



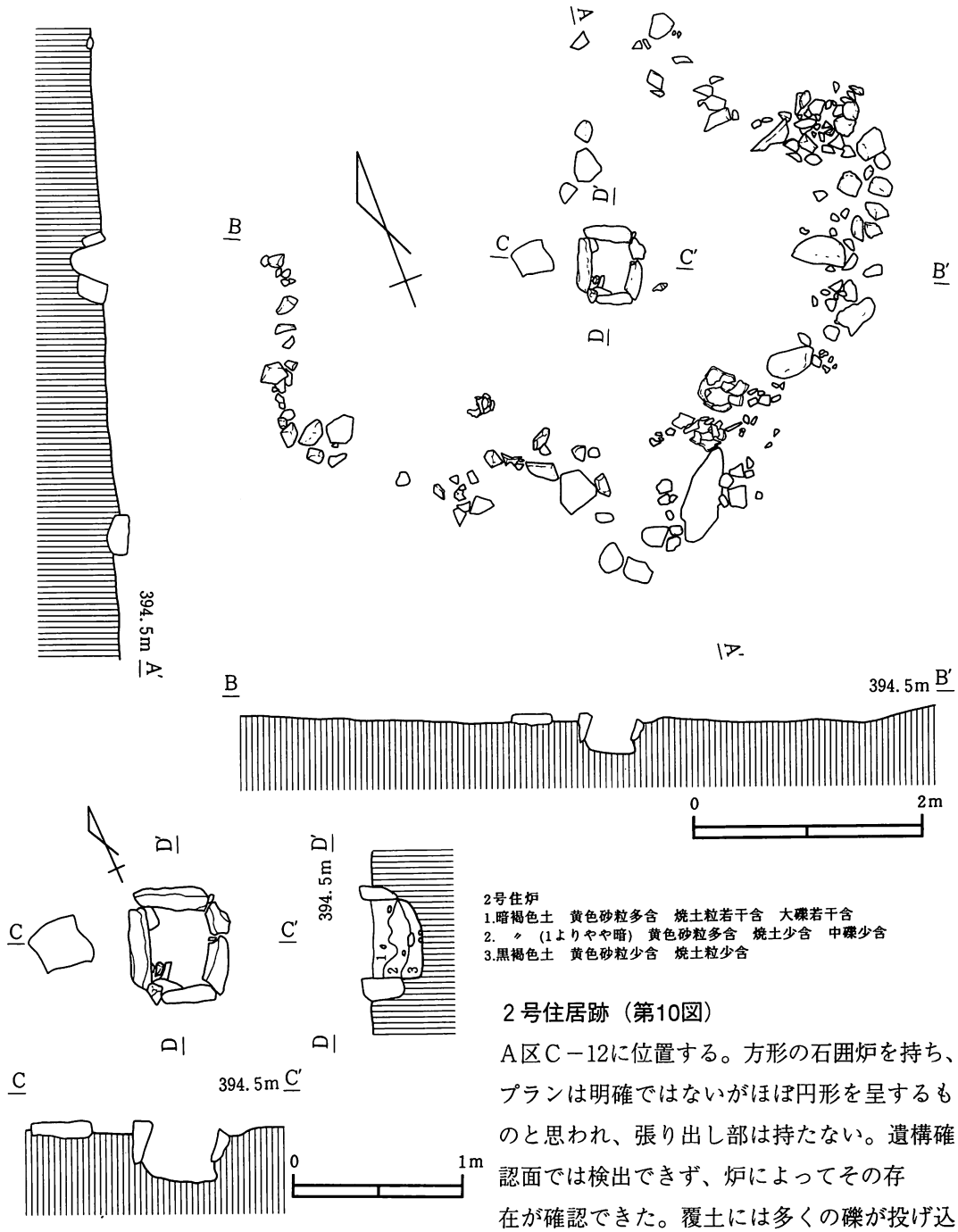
第7図　1号住居跡炉・石棒A・石棒B・磨石C



第8図　1号住居跡出土土器（1）



第９図　１号住居跡出土土器（2）



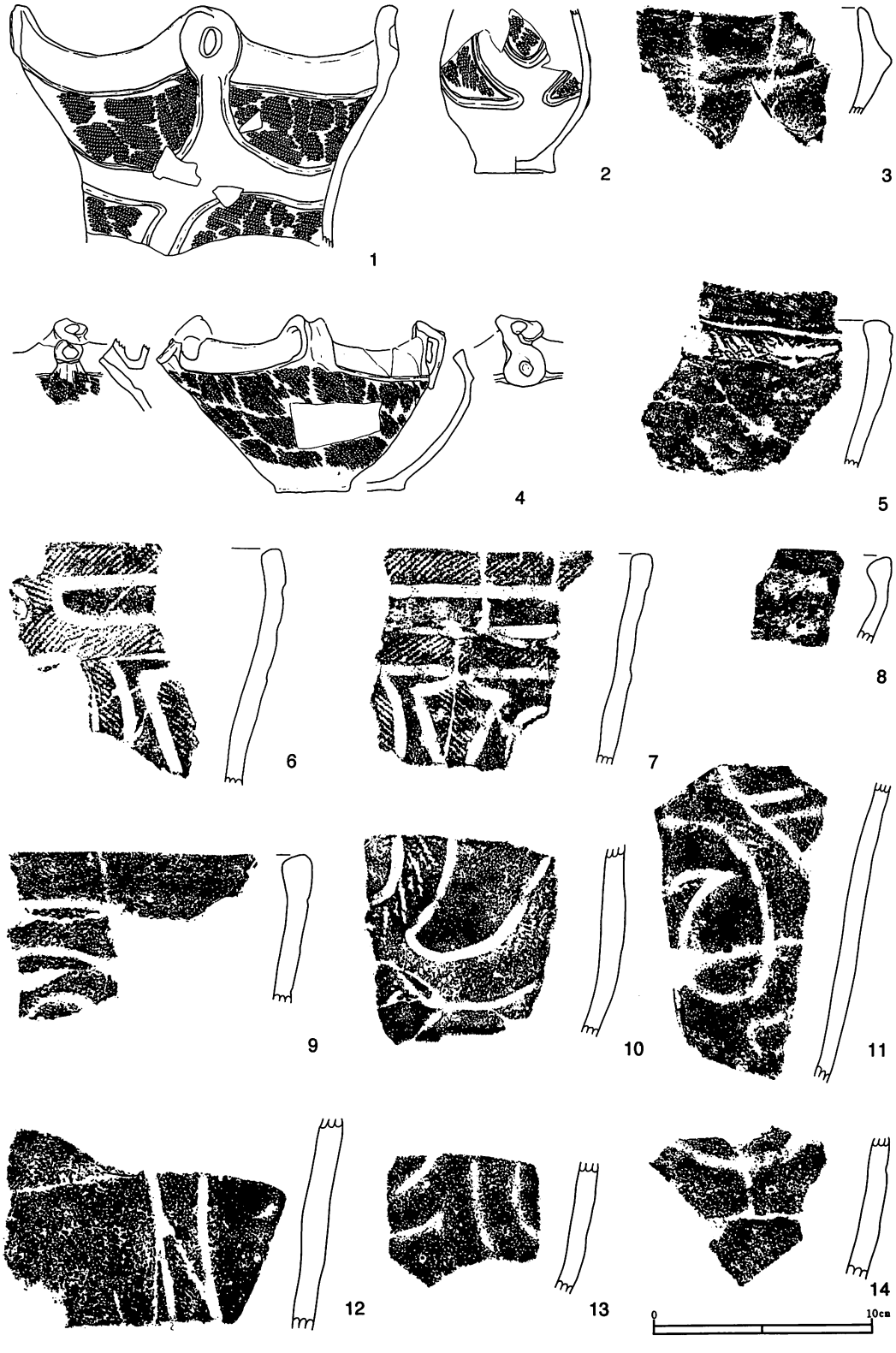
第10図　2号住居跡平面図・炉

2号住居跡（第10図）

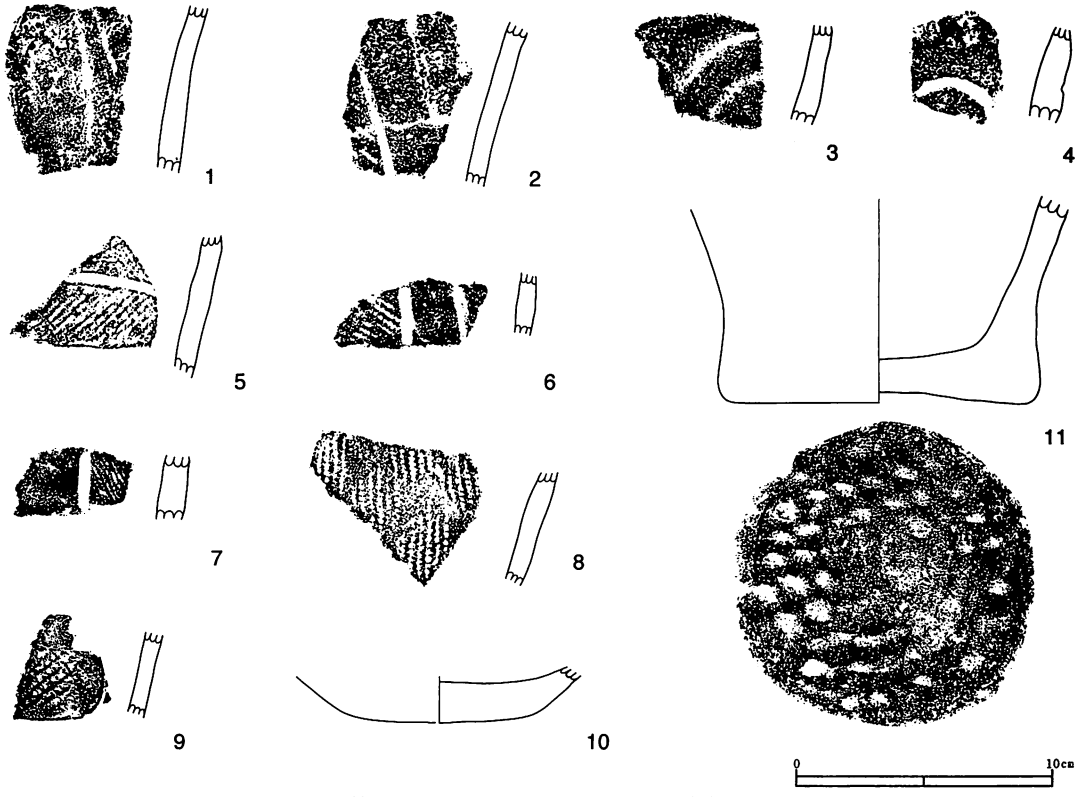
A区C－12に位置する。方形の石囲炉を持ち、プランは明確ではないがほぼ円形を呈するものと思われ、張り出し部は持たない。遺構確認面では検出できず、炉によってその存在が確認できた。覆土には多くの礫が投げ込まれており、当初配石遺構として把握していた。壁については礫の少ない土と礫が多く含まれる部分とによって覆土を区別した。柱穴は床面を精査したが検出できなかった。炉は扁平な角礫をほぼ垂直に組み合わせ、四角く箱状に作っている。底面より焼土がみられた。

出土土器（第11・12図）

遺物は住居南側の壁よりの床面直上より土器3個体が出土し、このほかは覆土中のものである。

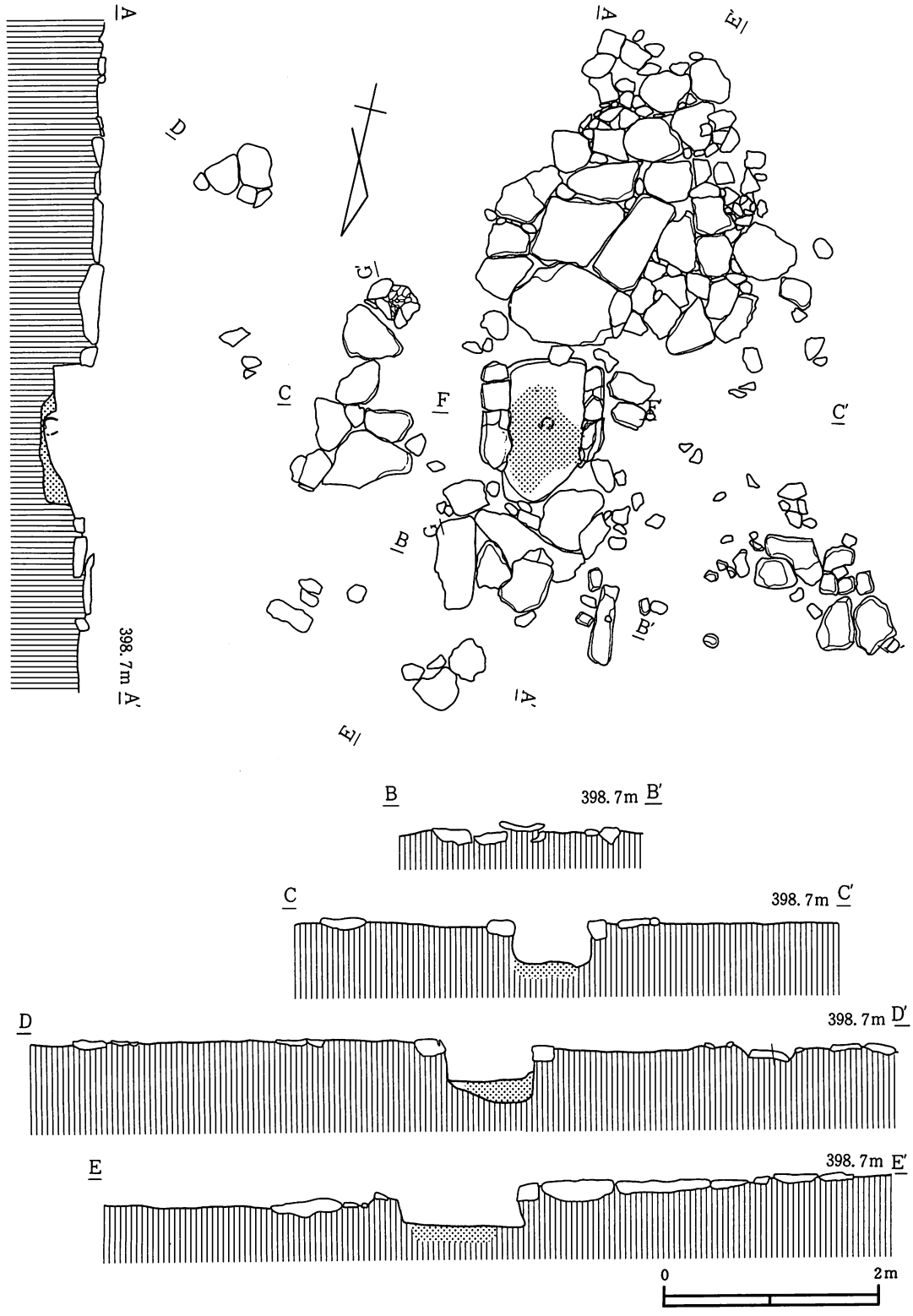


第11図　２号住居跡出土土器（1）

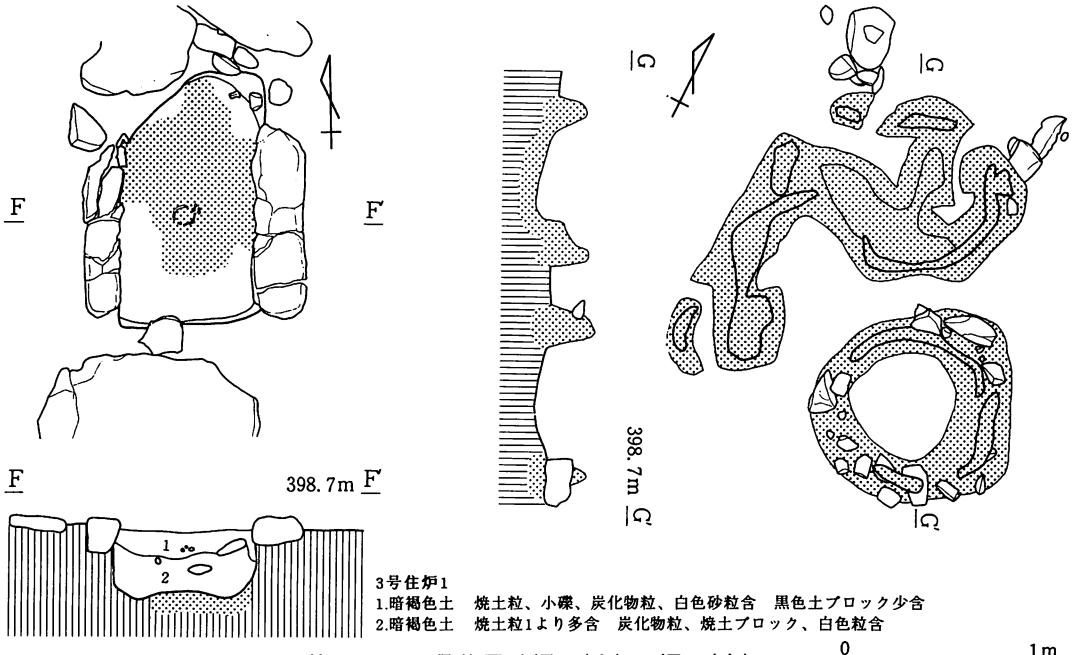


第12図　2号住居跡出土土器（2）

1・2・4は床面直上で出土した。1は深鉢形土器の胴上半部で、口縁は4単位の波状になり波頂部にはO字状の突手がつく。口辺部は無文となり胴部には2本の平行する微隆起線によりモチーフが描かれ、その間に縄文が充填される。2は深鉢形土器で口縁部を欠損しているが胴部文様は1と同様につけられている。4は浅鉢形の注口土器である。注口部とそれに対する把手は8の字形を呈しており、口縁部は無文となる。胴部は縄文が施文される。3・5～9は深鉢形土器の口縁部破片である。3は口縁部無文帯の下に1本の微隆起線がある。5～9は平行する沈線によりモチーフが描かれ、その間に縄文が充填される。10～14、第12図1～9は深鉢形土器の胴部破片である。沈線と縄文によりモチーフが描かれる。10・11は底部であり、11には網代痕がある。



第13図　3号住居跡平面図



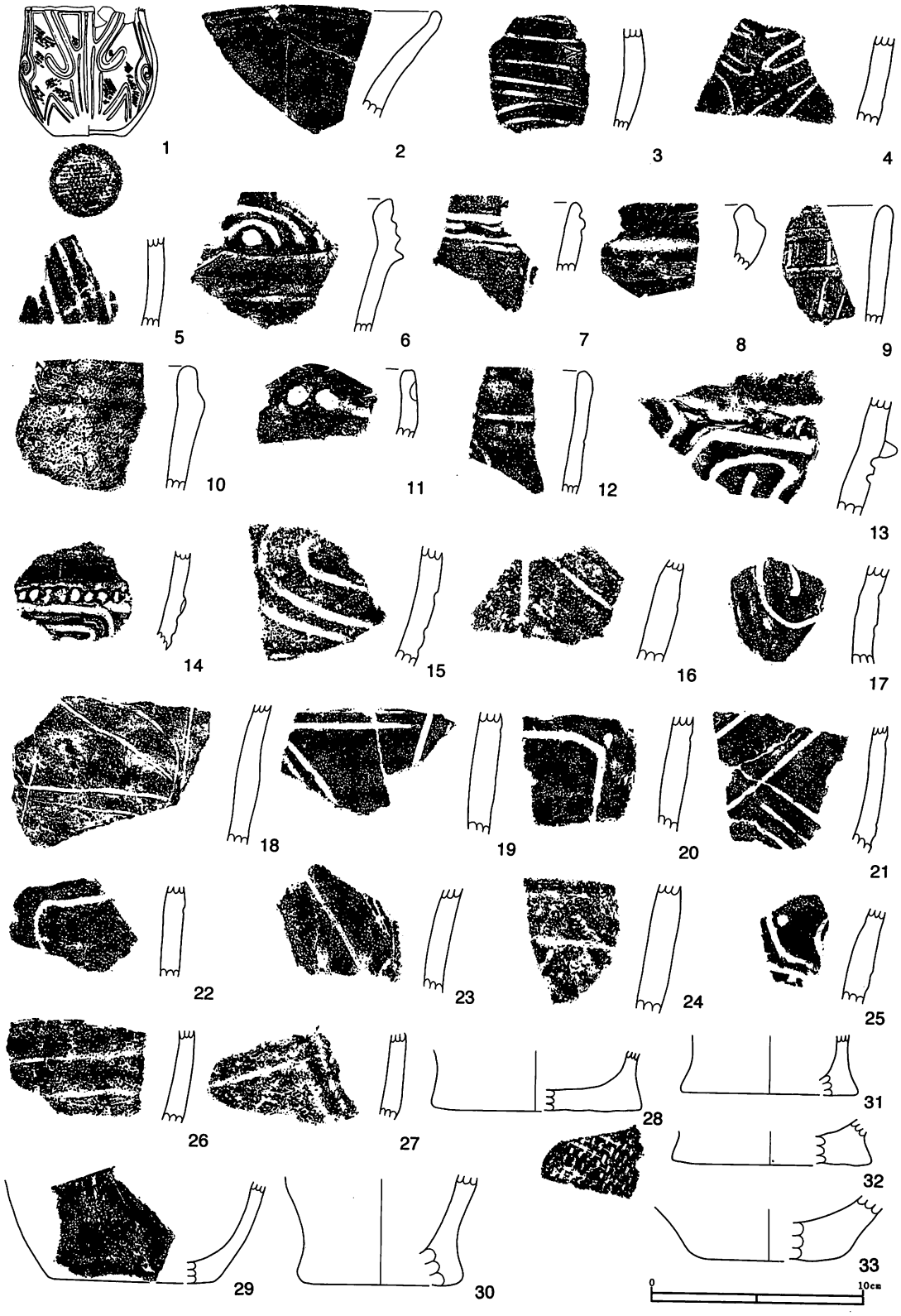
第14図　3号住居跡炉1（左）・炉2（右）

3号住居跡（第13・14図）

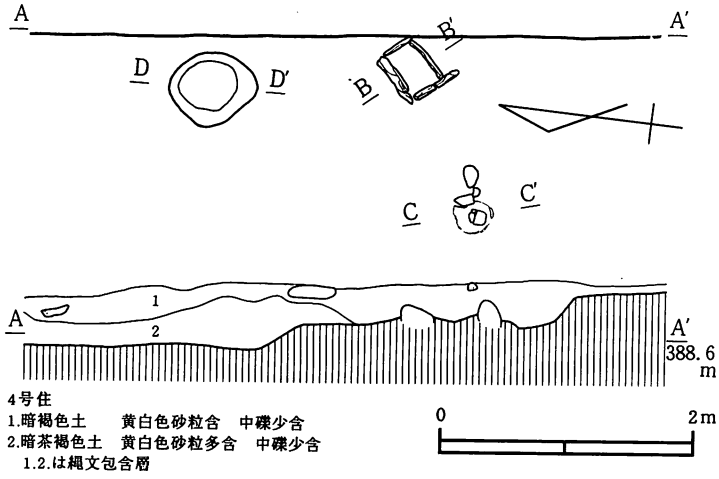
B区B・C－2・3に位置する。敷石住居で遺存状況はあまりよくないが、2つの炉が確認された。住居床面の敷石は、炉1の南側と北側の一部によく残されているほかは、大部分が抜き取られ、原形をとどめていない。敷石の石材には表面が滑らかで扁平な礫が使われている。また、その扁平な礫の間隙には、比較的角の丸い小さめの自然礫が充填されている。炉1は、ほぼ方形の石囲炉で、長径約150cm、短径約110cm、深さ約40cmを測る。東西は細長い礫が使われ、南北では床面の敷石が炉石とされている。東・西側は長さ約100cm、幅約20cm、厚さ約15～17cmの比較的細長い礫を使用している。東西の細長い礫は被熱によりひびが入っている。北側は掘り込みの際まで敷石があり、その一部が被熱していることから炉石として機能していたものとおもわれる。焼土は底一面に認められる。また、底に口縁部の欠損した深鉢形土器（第15図1）が正位に埋設されていた。炉2は炉1の東側にあり、炉石はなく2箇所の焼土の集中がみられる。どちらも中～大礫と土を盛ってつくられている。一方は径約110cm、幅約20～30cmの環状を呈している。もう一方はその北から西側にかけて幅約20～30cm、長さ200cm以上で帯状に取り囲むようにあるが、掘り込みは確認できなかった。また柱穴については検出できなかった。

出土土器（第15図）

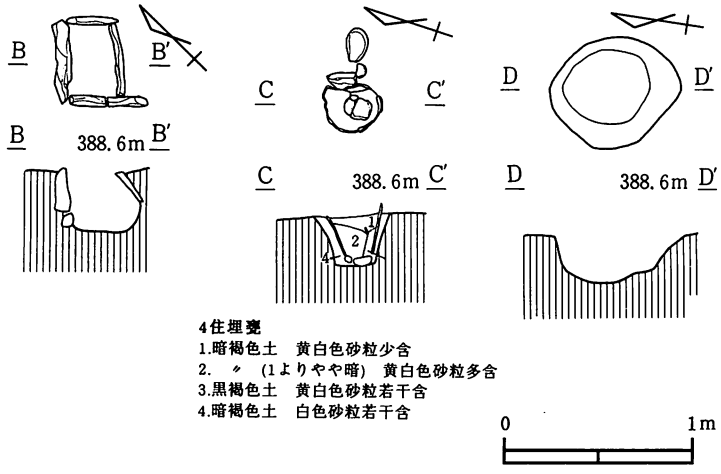
1は炉1の底に正位に埋設されていた深鉢形土器で、口縁部はない。胴部は沈線によりモチーフが描かれ、その下端を波状沈線が巡る。地文は縄文であり、底部に網代痕がある。2は深鉢形土器の口縁部破片であり、口縁はわずかに内折し、無文である。3～5・13～27は胴部破片であり、2本以上の沈線によりモチーフが描かれる。28～33は底部である。28には網代痕がある。



第15図　3号住居跡出土土器



第16図　4号住居跡平面図



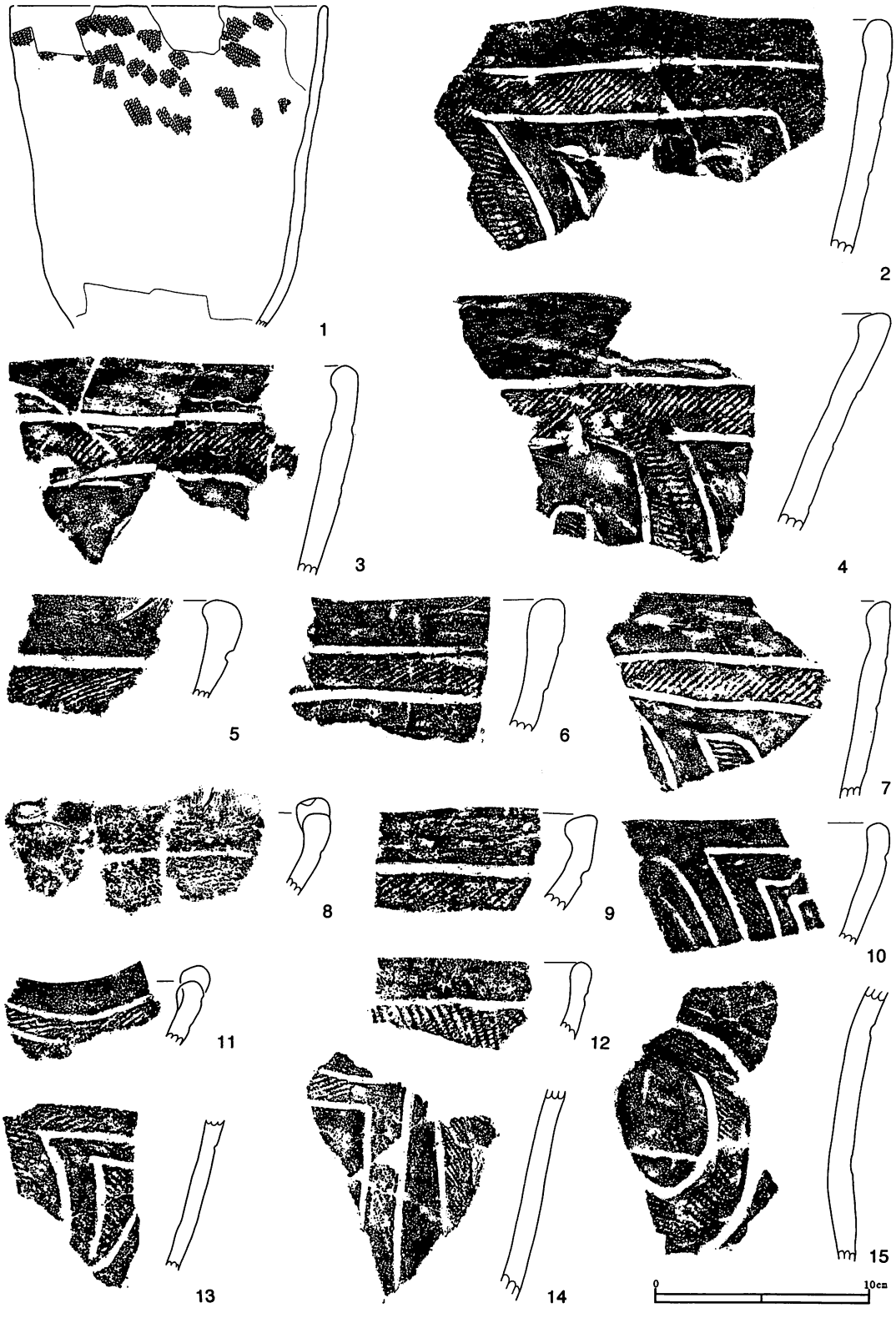
第17図　4号住居跡炉・埋甕・土坑

4号住居跡（第16・17図）

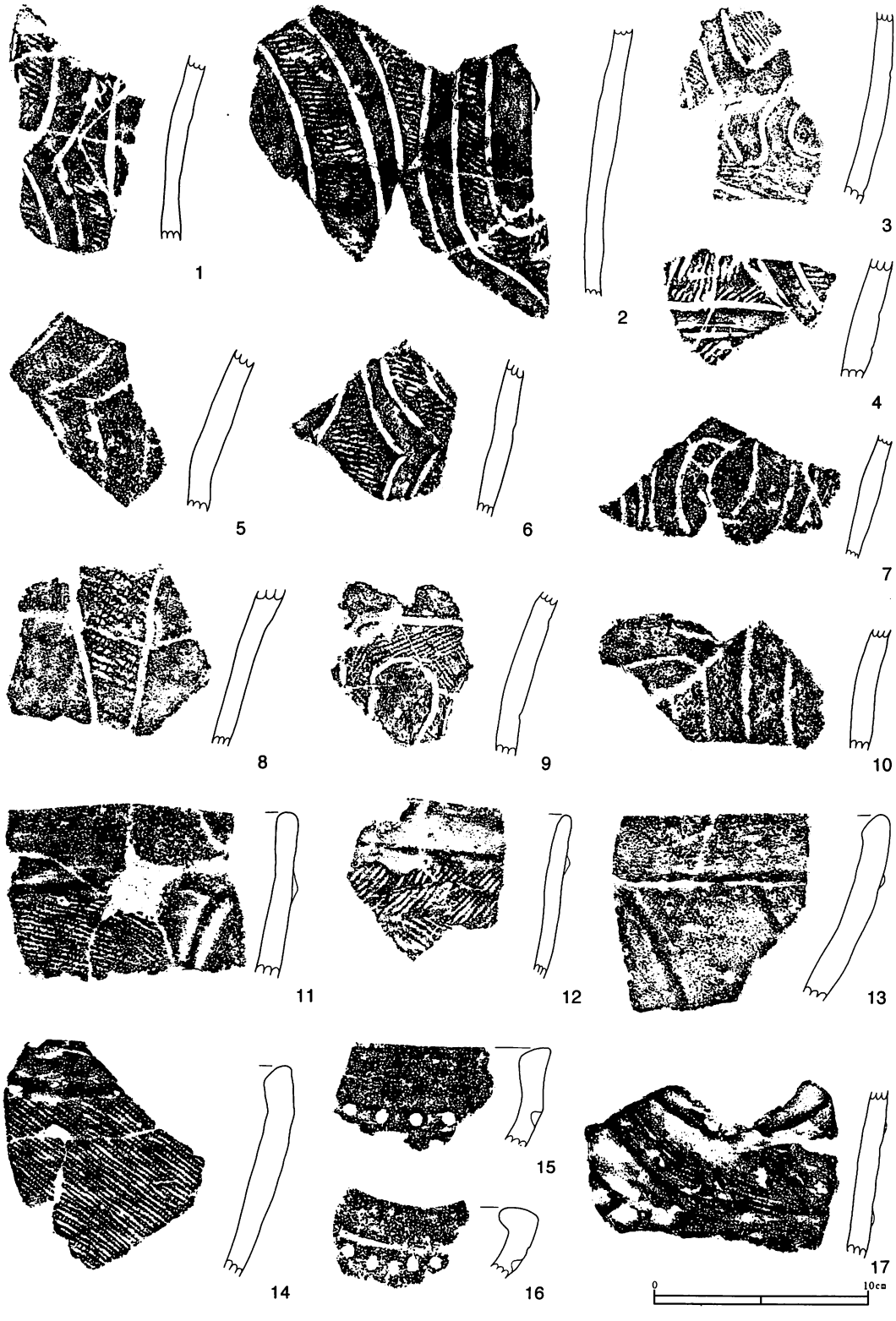
Ｂ－27に位置する。長方形の石囲炉と土坑１と埋甕１（第19図１）を有する。プランは明確ではない。１号古墳の下を掘り下げたところ、炉が出土し、存在を確認した。柱穴は周囲を精査したが確認できなかった。炉は扁平な角礫をほぼ垂直に組み合わせ、四角い箱状を呈する。長径約50cm、短径約40cm、深さ約30cm。焼土は認められない。埋甕は炉の西側約1mにある。径約40cmの円形の掘り込みに底部を欠損した深鉢形土器が正位に埋設されている。掘り込みの深さは約30cm。土器の下には丸みのある自然礫が敷かれている。土坑は炉の北側約１mに位置する。約70×60cmの長円形を呈し、深さ約30cmである。

出土遺物（第19・20図）

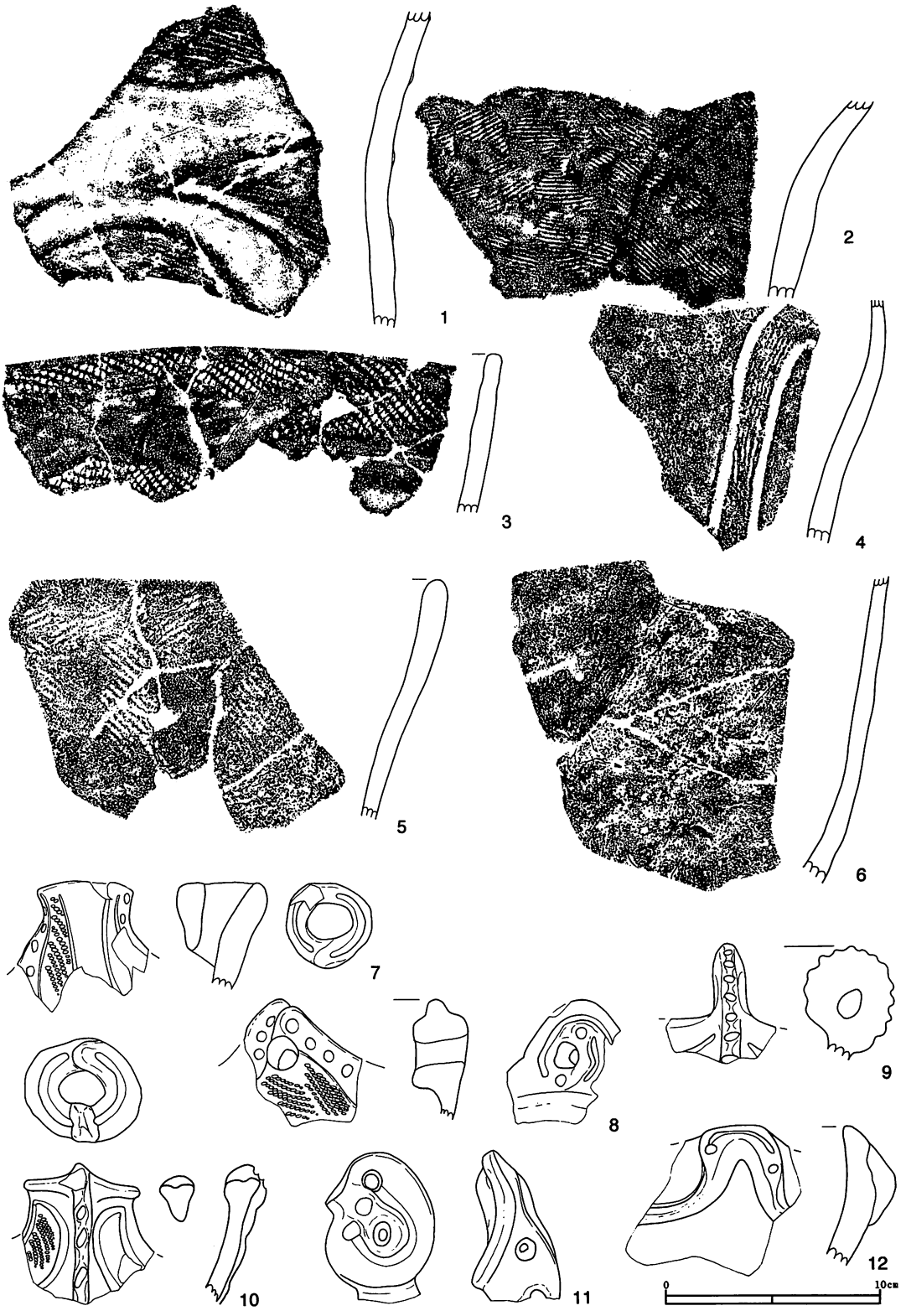
第19図１は正位に埋設された埋甕で、底部は欠損している。地文に縄文が施文されているがほとんど磨消されている。２～12は深鉢形土器の口縁部破片である。２本の平行する沈線と縄文によりモチーフが描かれている。13～15、第20図１～10は胴部破片である。11～16は口縁部破片である。11～14は口縁部無文帯をもち、微隆起線で文様が描かれている。地文に縄文をもつ11・12・14と無文の13とがある。15・16は口縁部無文帯の下に円形刺突文がある。17、第20図１・２は微隆起線をもつ深鉢形土器の胴部破片である。３は口縁部破片であり、地文に縄文をもつ。４は平行する２本の沈線の間に縄文が充填される。５は埋甕と同様に縄文が施文される深鉢形土器の口縁部破片である。６は胴部破片で、無文である。７～12は把手である。７・10は柱状を呈する。８・９は貫通孔がある。



第18図　4号住居跡出土土器（1）



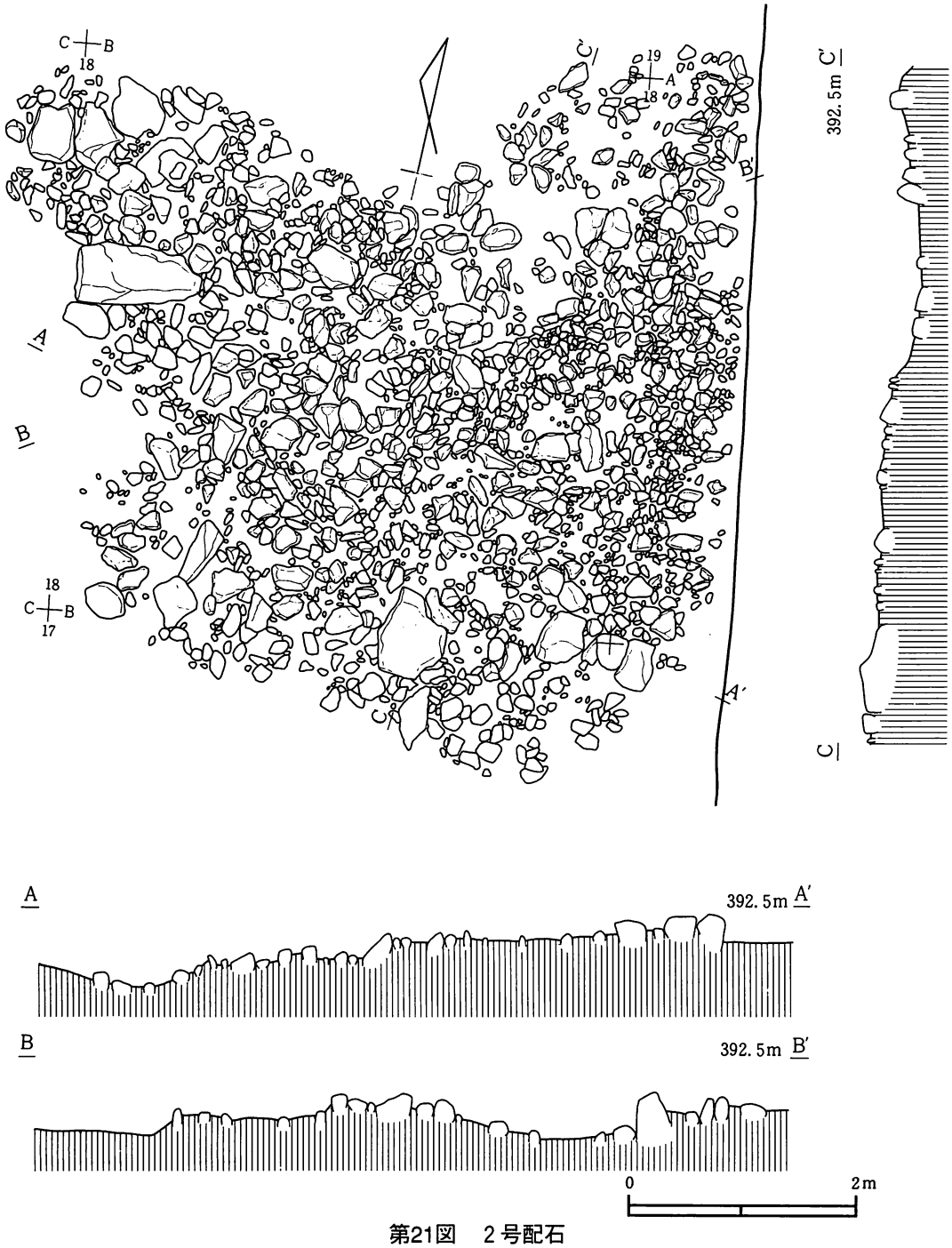
第19図　4号住居跡出土土器（2）



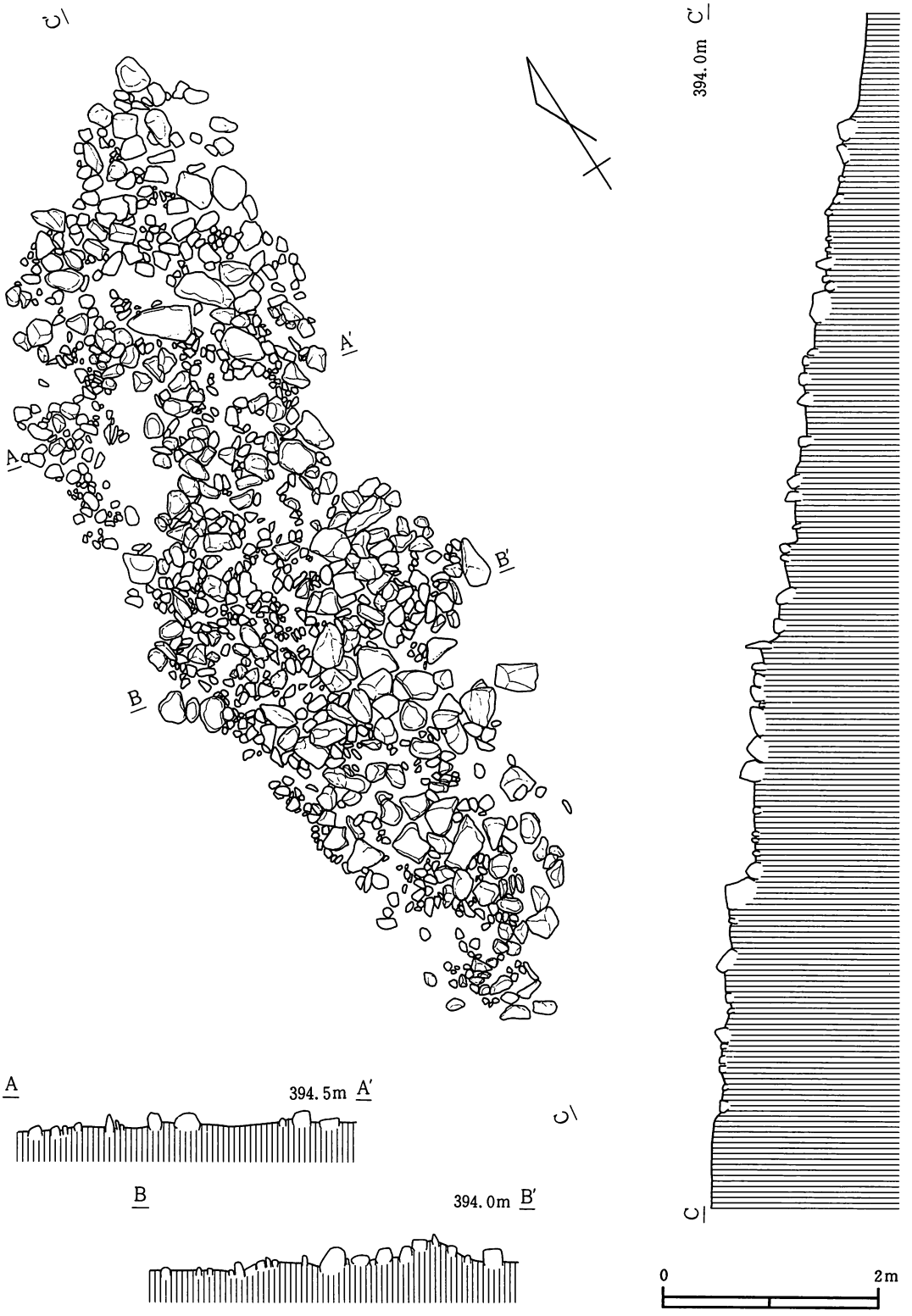
第20図　4号住居跡出土土器（3）

2.配石

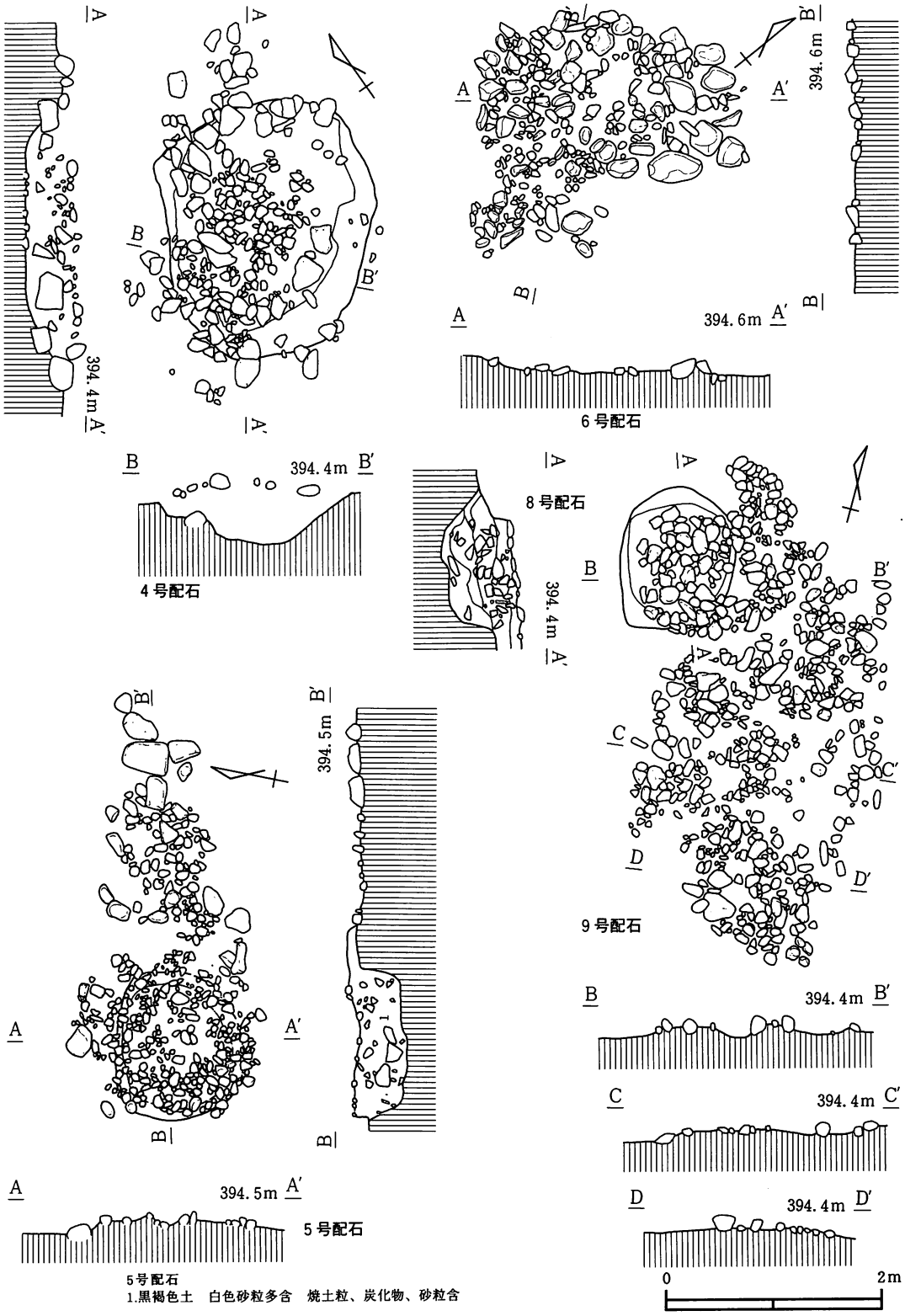
ここでは礫が配された遺構を配石とした。総数19を数える。下部に土坑を伴うものと伴わないものがある。構成する礫はほとんど河原石であるが、12配、B区4・5配は比較的平らな礫を使用している。形状の傾向は、小さくまとまるものが9と最も多く、そのつぎに自然の礫層状のものが4、他に壇状になるもの2、敷石状になるもの2、そして環状1、不明1である。



第21図　2号配石



第22図　3号配石



第23図　4・5・6・8・9号配石

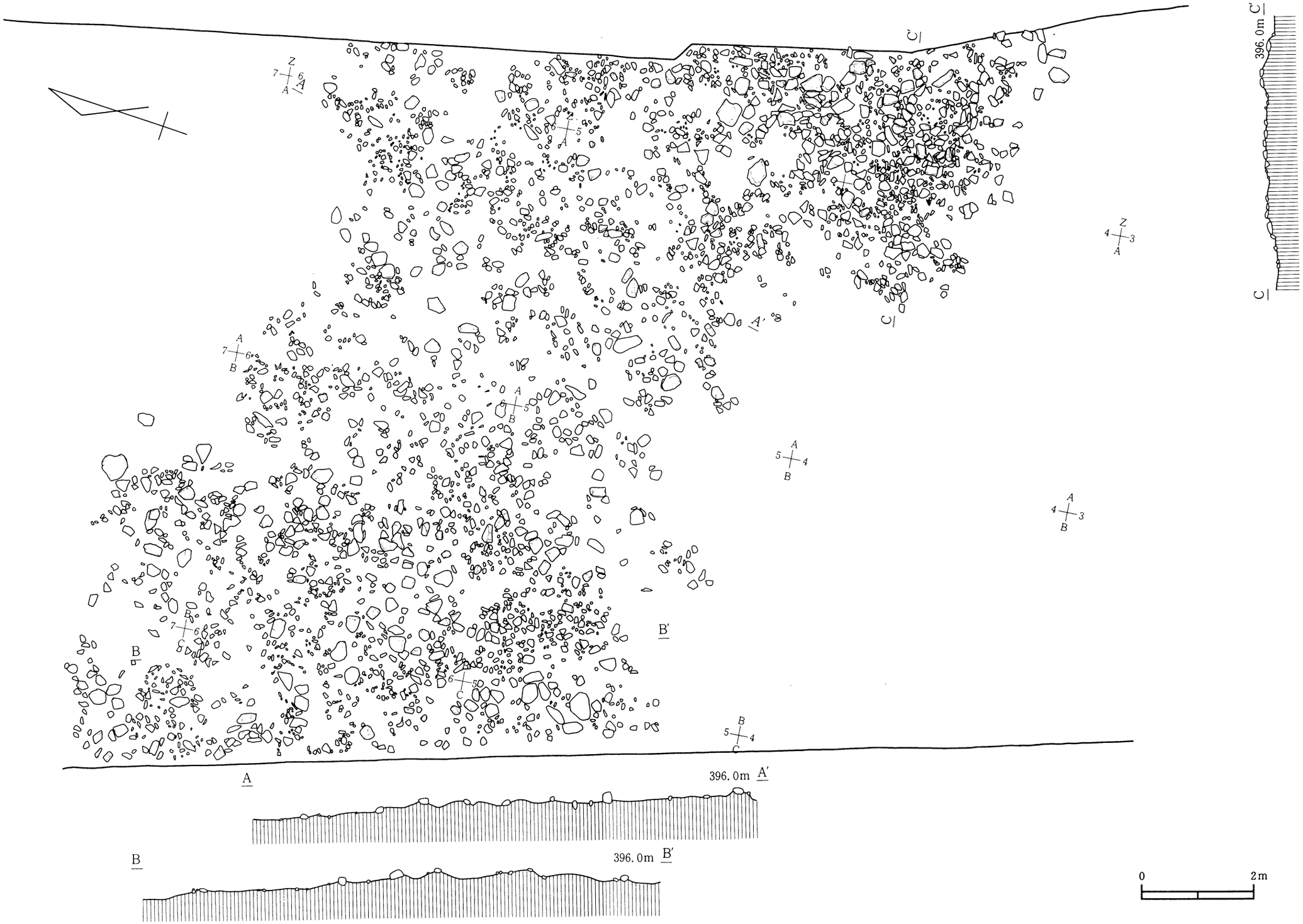
第24図　10号配石

1・7配は調査の途中で住居と確認できたために、また、11配、B区1・2配は、最終的に礫の状態や遺物出土状況から、配石ではないと判断した。

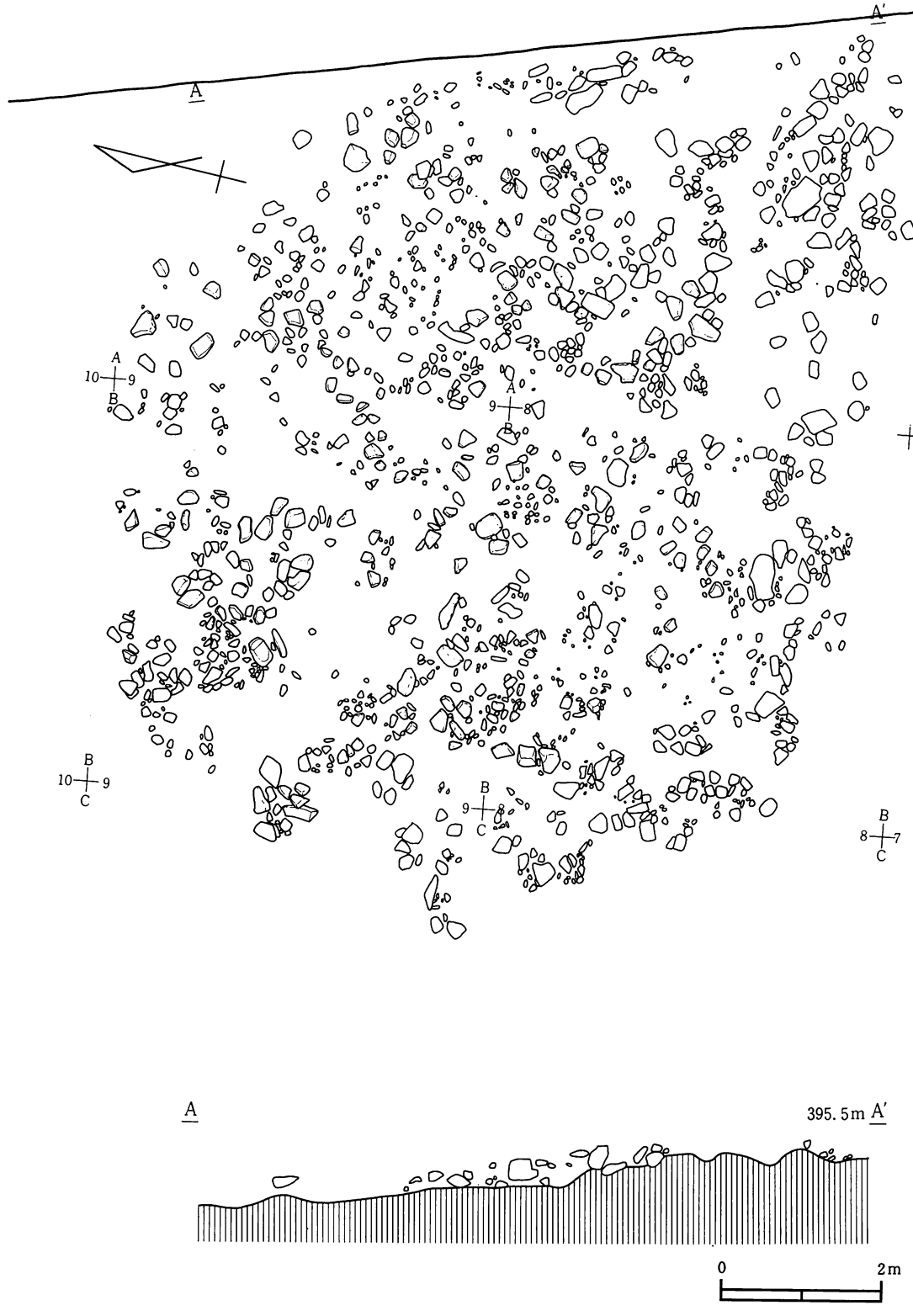
2号配石（第21図） A～C—17・18に位置し1号住居跡の南隣にある。東側が調査区外に伸びるため形態は不明である。径約500cmの範囲に中～大礫を中心に若干の巨礫を含んでほぼ同一面上に不定形にまとまる。下部に土坑は伴わない。自然の礫層状を呈している。

3号配石（第22図） B—14～16に位置する。650×230cmに中～大礫を中心に若干の巨礫を含んでほぼ同一面上で帯状にまとまる。下部に土坑は伴わない。自然の礫層状を呈している。

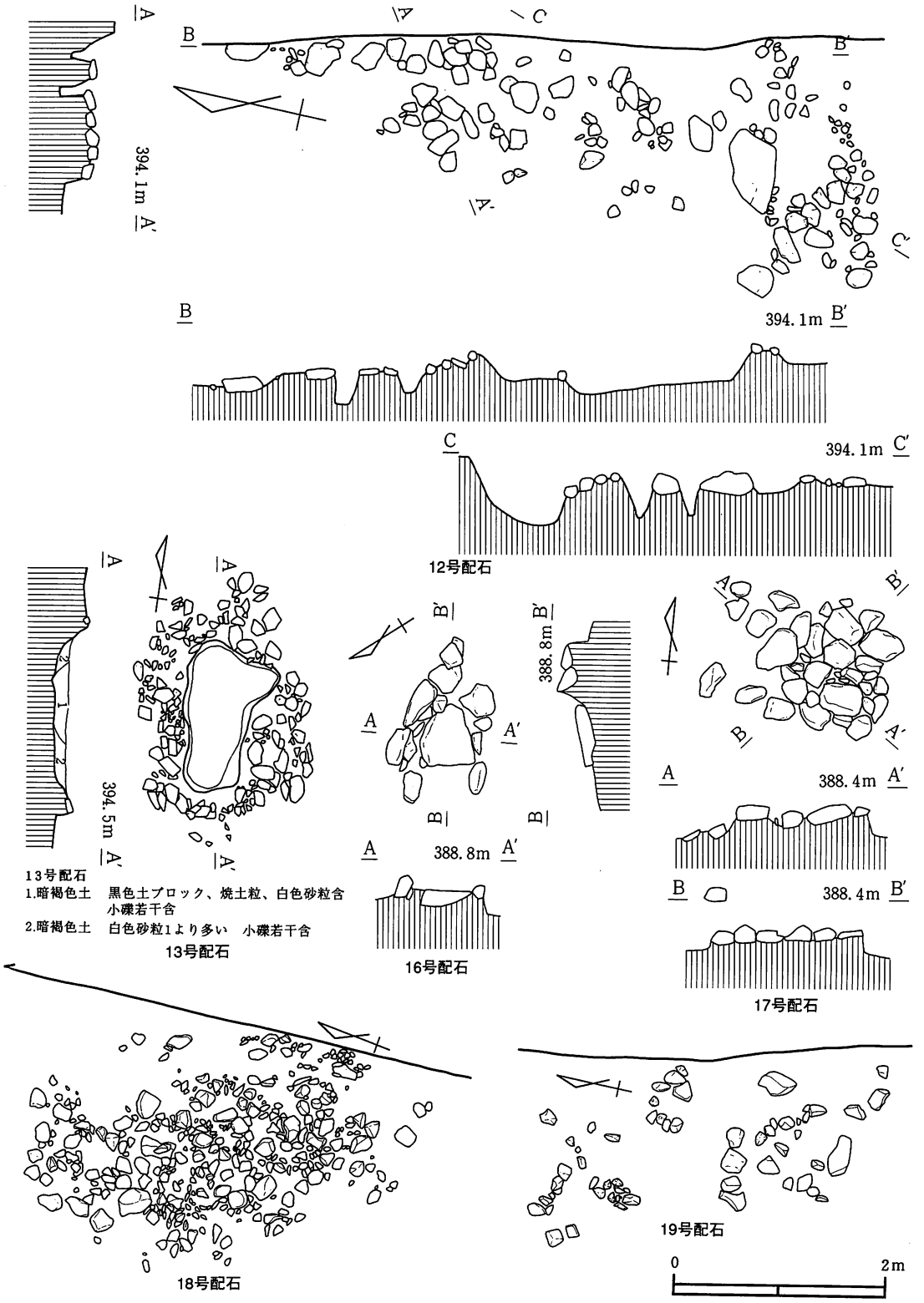
4号配石（第23図） B—13に位置する。径約100cmの範囲に中礫が不整円形に小さくまとまり、その周囲にやや大きめの礫が配される。下部に平面が160×140cmの長円形、深さ36cmの土坑を伴う。



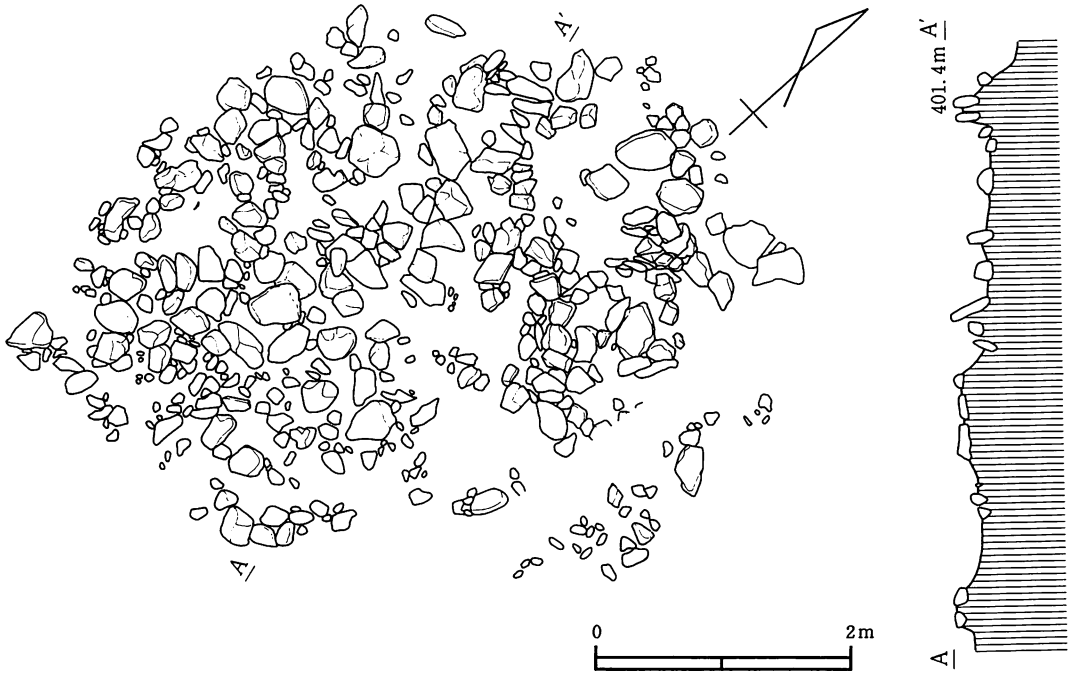
第25図　14号配石



第26図　15号配石



第27図　12・13・16・17・18・19号配石



第28図　B区3号配石

5号配石（第23図） A・B—12・13に位置する。140×120cmの円形に中礫がまとまり、その東側に中～巨礫が160×60cmの帯状に伸びる。礫が円形にまとまる部分の下に径90cm、最大深さ32cmの平面が円形の土坑を伴う。土坑の底には自然の巨礫が敷かれている。

6号配石（第23図） B—12・13に位置する。160×170cmの不定形に中～大礫を中心に若干巨礫を含んでほぼ同一面上に小さくまとまる。下部に土坑は伴わない。

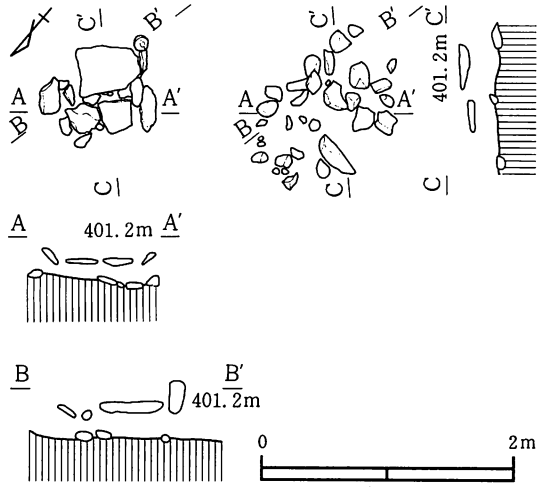
8号配石（第23図） A・B—13・14に位置する。径120cmの範囲に西側が小さく開口したC字状に中～大礫が小さくまとまる。下部には配石より若干西側にずれた位置に90×70cm、深さ30cmの長円形の土坑がある。土坑の覆土には少量の炭化材が認められた。

9号配石（第23図） A—13に位置する。8号配石の南に隣接している。レベルもほとんど同じである。東側が調査区外に伸びる可能性もある。形態は径120cmの半円形の範囲に中～大礫が小さくまとまる。下部に土坑は伴わない。

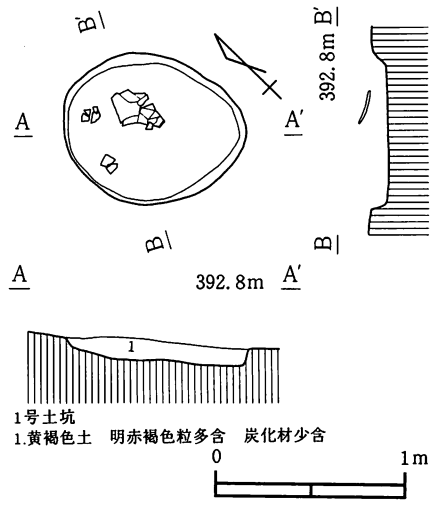
10号配石（第24図） A・B—11に位置する。小さくまとまる礫の集中が4箇所みられる。南側に一番大きい300×210cmの長円形の範囲に礫がまとまる。その北側に隣接して220×110cmの長円形のまとまりがあり、さらに北側に250×150cmの不整長円形のまとまりがある。そして、そのすぐ西側に110×60cmの長円形の礫の集中がある。いずれも中～大礫を中心に若干の巨礫を含んで粗密にまとまる。それらの礫を取り除いた下部には2基の土坑がある。それぞれ、南側の土坑をA土坑、北側の土坑をB土坑として記述する。

A土坑は一番南の礫集中とそれに隣接する礫集中の間に位置する。170×100cmの長円形を呈し、深さは、20cmである。

B土坑はA土坑の北側に位置する。南北に並ぶ北端の礫集中下にある。東側が調査区外に伸



第29図　B区4号配石



第30図　1号土坑

第31図　B区5号配石

びているため現存の規模は260×120cmの長円形で、深さは50cmである。

12号配石（第27図） A—14・15に位置する。東側が調査区外に続いている。平らな面をそろえて礫が敷かれている部分があったため、柄鏡形敷石住居の可能性が考えられたが、炉などの施設が認められないため配石とした。南北430cm、東西は160cmの不定形の範囲に大～巨礫がやや粗にまとまる。下部に土坑は伴わない。

13号配石（第27図） B—11に位置する。160×110cmの不整長円形に中～大礫が幅10～30cmの環状に配される。内側の礫がない部分は、礫上面からの深さが20cmの掘り込みがある。覆土中に遺物は認められないが、焼土粒が若干含まれていた。

14号配石（第25図） Z～B—4～7に位置する。東及び西側が調査区外に伸びるため、形態は明かではない。中～大礫によって構成され、礫は密な部分と粗の部分があり、遺物出土状況もそれに比例している。礫下の施設を調査するため、礫を取り除き精査したところ、A・B—7の南側に炭化物が散っていた。しかし、下部に土坑は伴わない。遺物は多量の土器の他、土製耳飾り5、土偶1、磨製石斧1、打製石斧1、石皿1である。自然の礫層状を呈している。

15号配石（第26図） A～C—8・9に位置する。東側が調査区外に伸びる可能性がある。現状では550×490cmの不整長円形を呈する。中～大礫を中心に比較的まばらに拡がる。下部に土坑は伴わない。遺物は土器の他、土偶2、打製石斧1、磨石1である。自然の礫層状を呈している。

16号配石（第27図） B—27、4号住居跡の北西に位置する。150×90cmの不整長円形で壇状を呈する。中心に扁平な不整形の巨礫を置き、その周囲を取り囲むように長軸30cm以上の比較的細長い礫をU字状に配す。U字の開口部はほぼ西を向き、中心の礫より張り出す。中心の礫と周囲の礫の間隙は中～大礫が充填される。下部に土坑は伴わない。

17号配石（第27図） C—28に位置する。120×80cmの範囲に中～大礫が不整形に小さくまとまる。下部に土坑は伴わない。

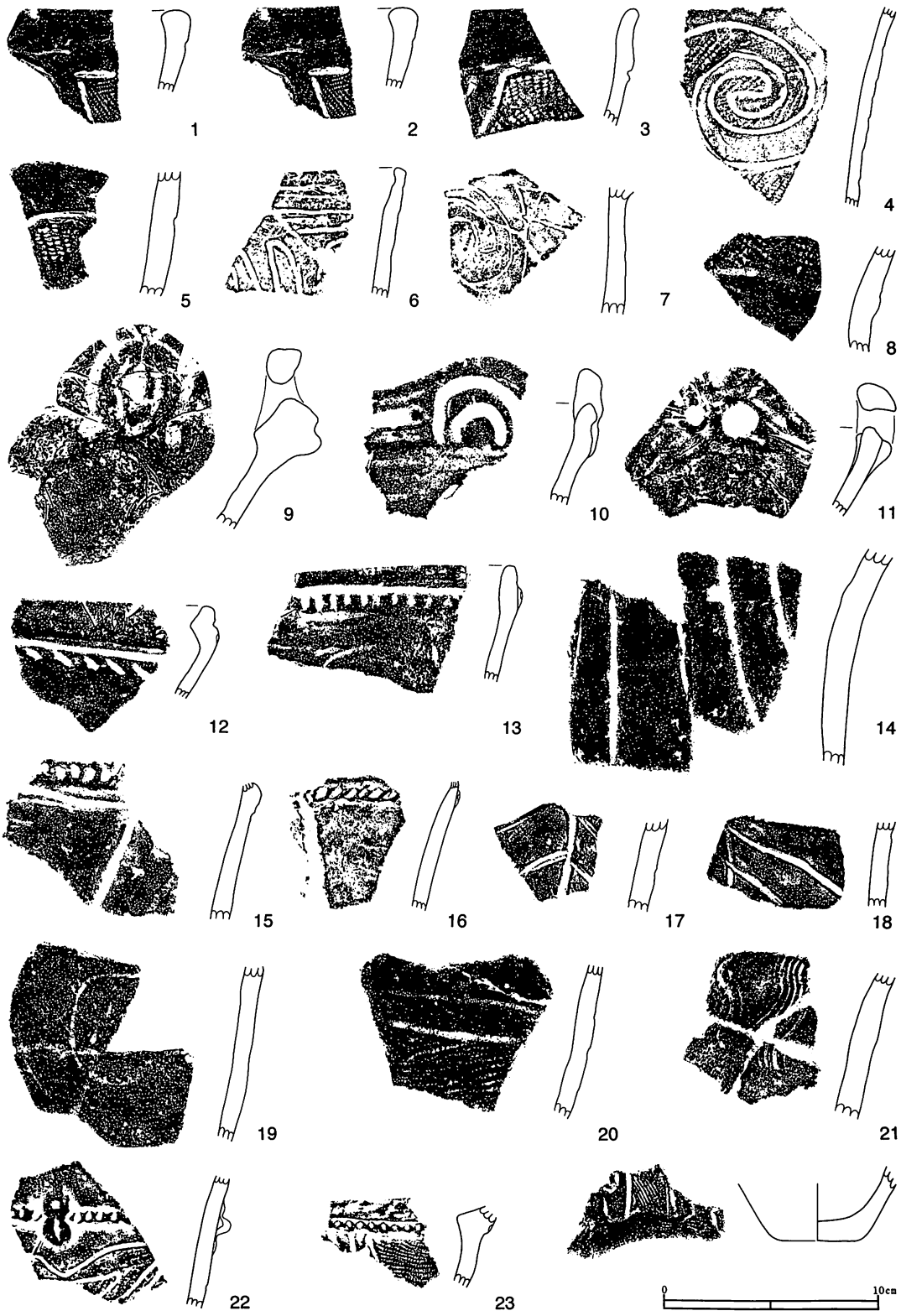
18号配石（第27図） B—29に位置する。260×100cmの範囲に中～大礫が長円形に小さくまとまる。下部に土坑は伴わない。

19号配石（第27図） 1号土坑の南、3号配石の北側、A・B—16に位置する。230×120cmの不整形の範囲に中～大礫がまばらにまとまる。これらの礫は近接する3号配石の礫より約10cm上である。下部に土坑は伴わない。

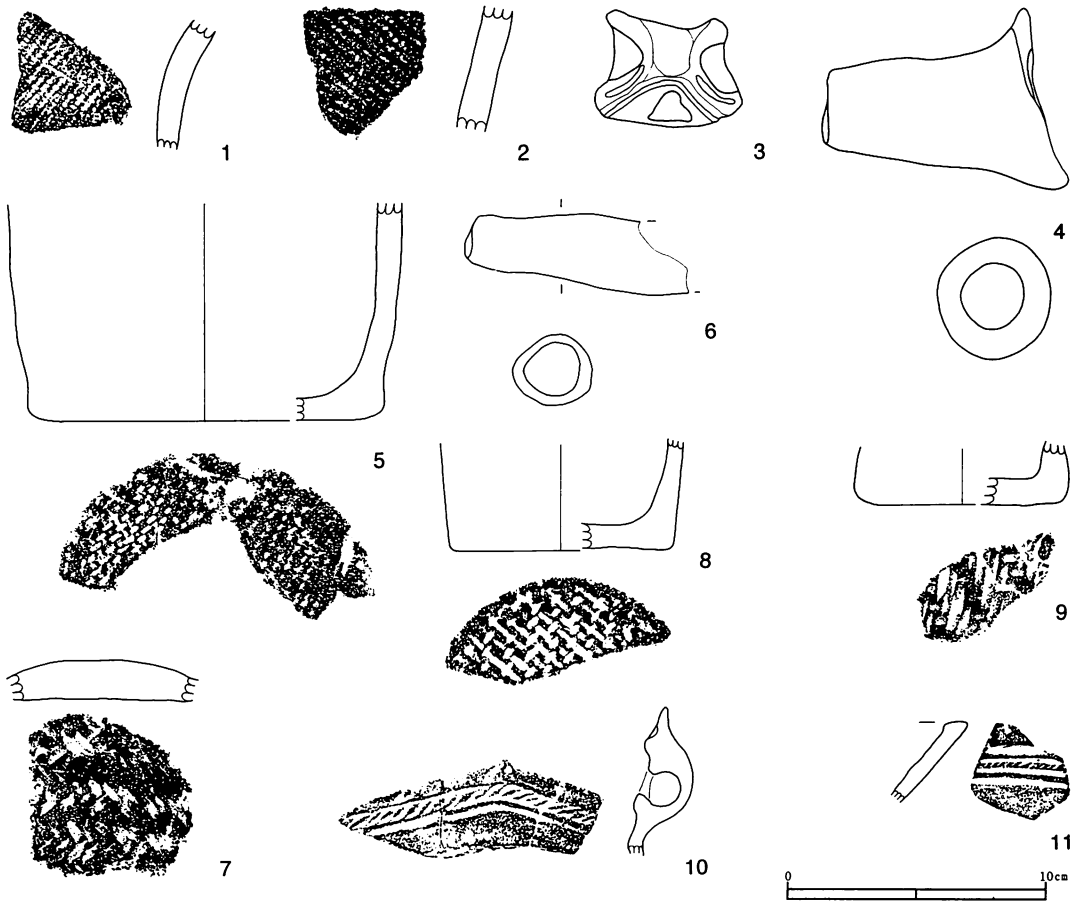
B区3号配石（第28図） B区B・C—3・4に位置する。巨～大礫を中心に430×310cmの長円形に小さくまとまる。下部に土坑は伴わない。

B区4号配石（第29図） 3号住居跡東、B区3号配石北東、B区B—3に位置する。東側の一部が後世の撹乱を受けているが、90×80cmの長方形を呈する。48×36×9cmの扁平な礫と北側に1段下がって24cm四方の扁平な礫2個を並べて壇状にする。その東西辺に長軸が30cmの扁平な礫を約45度の傾きで各2個向かい合うように配し、南西角には石棒（第66図13）が直立する。その下部約10cmには径110cmの範囲に拳大の自然礫が不規則にまとまる。下部に土坑は伴わない。石棒は頭部が若干欠けているがほぼ完形で、径11cm、長さ21cm、無頭である。

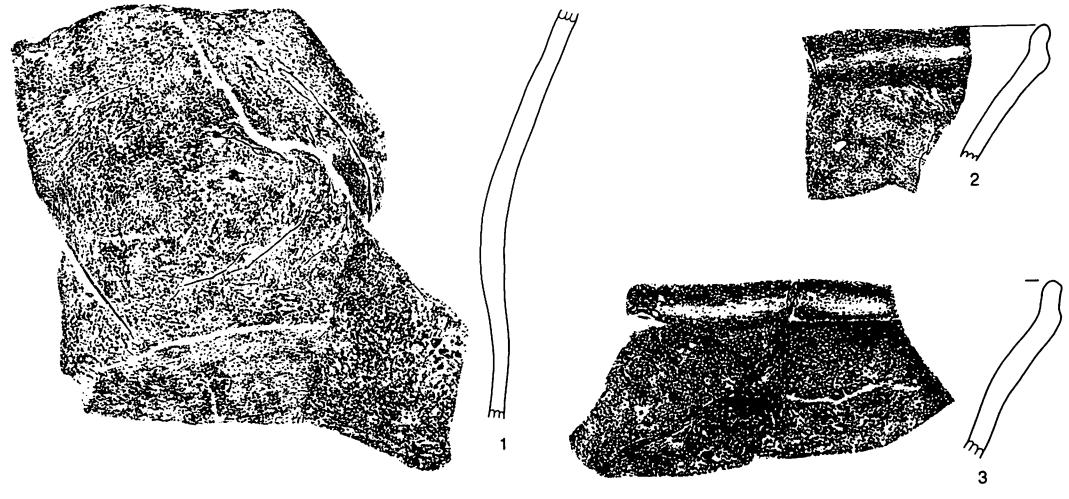
B区5号配石（第31図） B区C・D—6・7に位置する。北、東側は後世の撹乱を受けており、



第32図　B区５号配石出土土器（1）



第33図　B区5号配石出土土器（2）



第34図　1号土坑出土土器

西側が調査区外のため形態は不明である。現存で400×230cmのほぼ長方形の範囲に比較的扁平な大～巨礫を敷いたように配している。その扁平な礫を取り除き、約20cm掘り下げると中～大礫が径300cmの範囲に不整形にまとまる。下部に土坑は伴わない。石棒が2点出土（第66図12・22)。①は上部配石とほぼ同レベルにある。②は上部配石を取り除き掘り下げ中に発見された。下部配石より若干高いレベルである。

なお上述した配石からは、後期初頭から前葉にかけての土器片が多く出土する第32・33図)。

3.土坑

1号土坑（第30図） A—17、19号配石の北側に隣接する。長径60cm、短径48cm、深さ20cmの卵形を呈する。底より約10cm上で深鉢形土器の口縁・胴部破片が出土した（第34図)。

4.グリッド出土土器

本遺跡で発見された住居跡や配石にはほとんど明確な掘り込みがないため多くの土器をグリッドごとに取り上げた。総量はコンテナ（30×46×26cm）約30箱で、ほとんどが破片である。これらの時期については前期末から晩期前半に比定できるが、主体となるのは後期初頭から前葉にかけての土器である。時期別の縄文土器分布図（第35・36図）をみると遺構のあるところに土器が集中している。なお図のNo.の後の（　）は出土グリッドを表す。

前期末の土器（第37図1）

1点のみである。深鉢の口縁部で地文に縄文をもち、細隆線上に半割竹管による押引文が口唇部までおよぶ。

中期初頭の土器（第37図2・3）

2点の出土である。2・3ともに半割竹管による文様をもつ。3は地文に結節縄文がある。

中期中葉の土器（第37図4～8）

4は口縁部である。外面は無文だが内面には半割竹管による押引きで渦巻文をつけている。5・7・8は沈線による区画文の一部である。6は地文の縄文のみである。

中期後葉の土器（第37図9～22）

9・10はキャリパー形を呈する深鉢の頚部下で、隆帯を蛇行状に貼付している。曽利Ⅰ式に相当する。11は曽利Ⅱ式に相当する深鉢の口縁部であり、しゅう曲文をもつ。12～18・20は曽利Ⅲ式に相当する。19・21は胴部破片で沈線による縦の区画の間に斜行する細い条線があり、曽利Ⅳ式に相当する。22は口縁部で沈線の区画の中に綾杉文の退化した沈線が描かれ、曽利Ⅴ式に相当する。

後期初頭の土器（第38～46図）

第38図1～5は微隆起線により文様が描かれるものであり、特に1・2には円形刺突文がその際に並ぶ。第38図6～25、第39～44図は称名寺1式で、それらのほとんどが微隆起線によるものと、2本の平行する沈線により文様が描かれ、その間に縄文が充填されている。第44図21～24は深鉢の底部である。第45・46図は称名寺2式である。第45図1～16は平行沈線の間に列点を充填し、第45図17～21、第46図は平行沈線のみにより文様が描かれている。

後期前葉の土器（第47図～53図21）

第47～51図は堀之内１式である。第47図１～22、第48図18～25、第49図１～４・15、第51図１～５は深鉢の口縁部であり、口唇部に１、２条の沈線が巡るものである。沈線下に刻みのある隆線がつくものと沈線のみのものがある。第47図19・23・24は口唇直下から刻み目のある隆線が垂下する。第47図23・24は胴部であるが、垂下する刻み目の隆線を有する。第49図18は無文の深鉢で、直立する口縁をもち、口縁裏に沈線が巡る。第50図12は注口土器の口縁部である。４単位の把手の対する２つは８の字状になり、その片側が注口となる。他の１対は環状で口縁部横につく。注口下と頚部には刺突による鎖状隆帯がめぐる。第50図１～11、第51図19・20は底部であり、第50図８・第51図20以外は網代痕を有す。第52図、第53図１～21は堀之内２式である。第52図１は口唇が内屈する口縁部で、曲線的な沈線で描かれた文様内には縄文が充填される。２・３は胴部であるが、同じく沈線と縄文で文様が描かれている。４～９は口縁部に刻み目のある隆線が１、２条貼付されており、７には８の字の貼付文もみられる。10・11・13・16・17、第53図１・13は胴部に刻み目のある隆線が一巡するものである。その他の胴部破片には沈線で幾何学文が描かれその間に縄文が充填される。

後期中葉の土器（第53図22～第54図13）

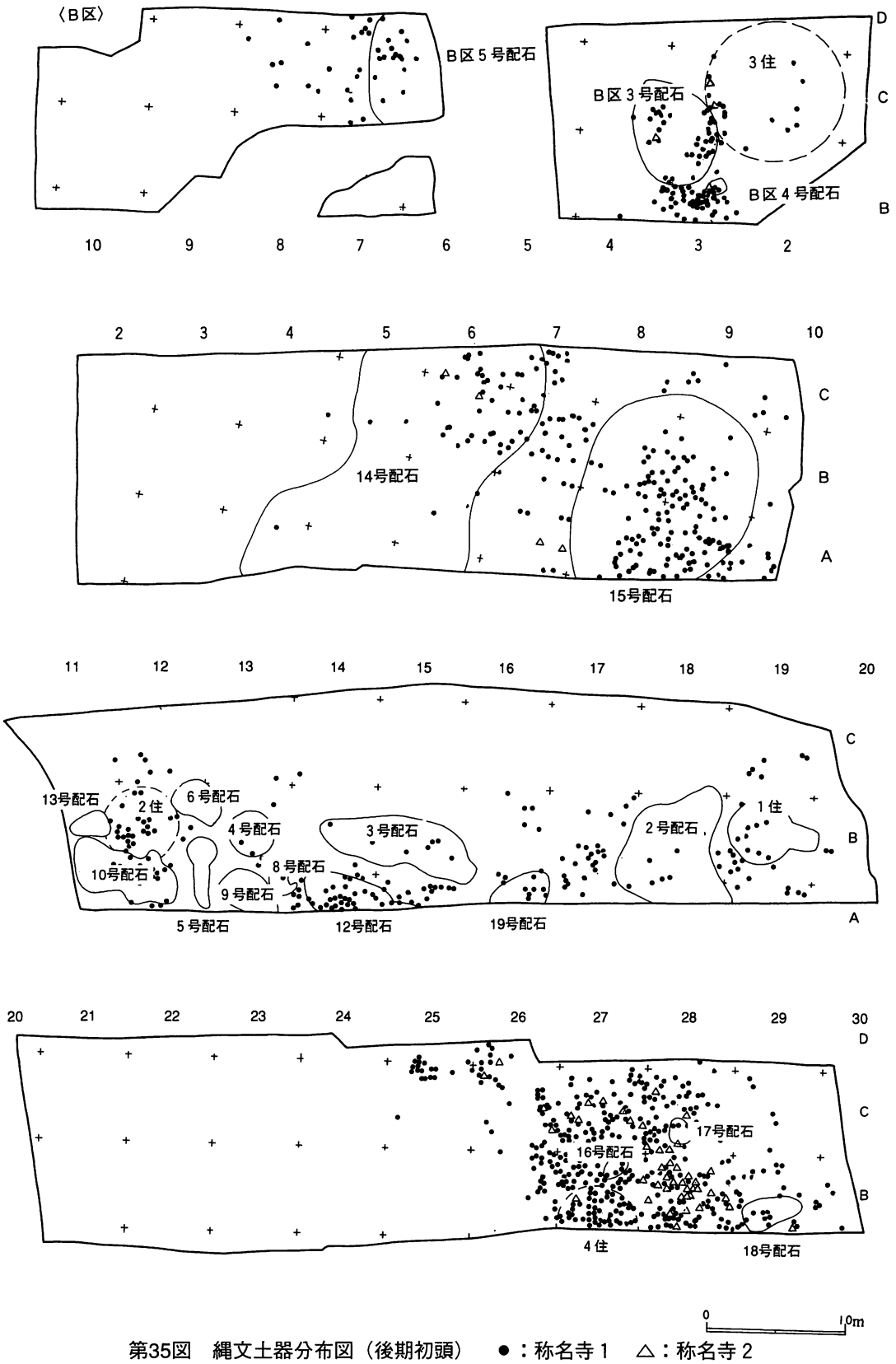
第53図22～24は加曾利Ｂ１式である。22は口唇部が内屈し、庇状に張り出す。23・24は口縁部の内面に２条の沈線があり、３点とも外面は無文となる。第54図１～13は加曾利Ｂ２・３式である。１は口縁部で、内面に浅い沈線が１条ある。外面には矢羽根状沈線がみられる。３は胴上部で、頚部に沈線があり、張り出し部に刻み目のある隆線が巡る。その間に沈線で弧が描かれ磨消縄文により半円の無文部を描出している。８・９・11は胴部で矢羽根状沈線が施される。12・13は台付鉢の底部破片である。12は括れ部に刺突が巡る。

後期後葉の土器（第54図14～第55図）

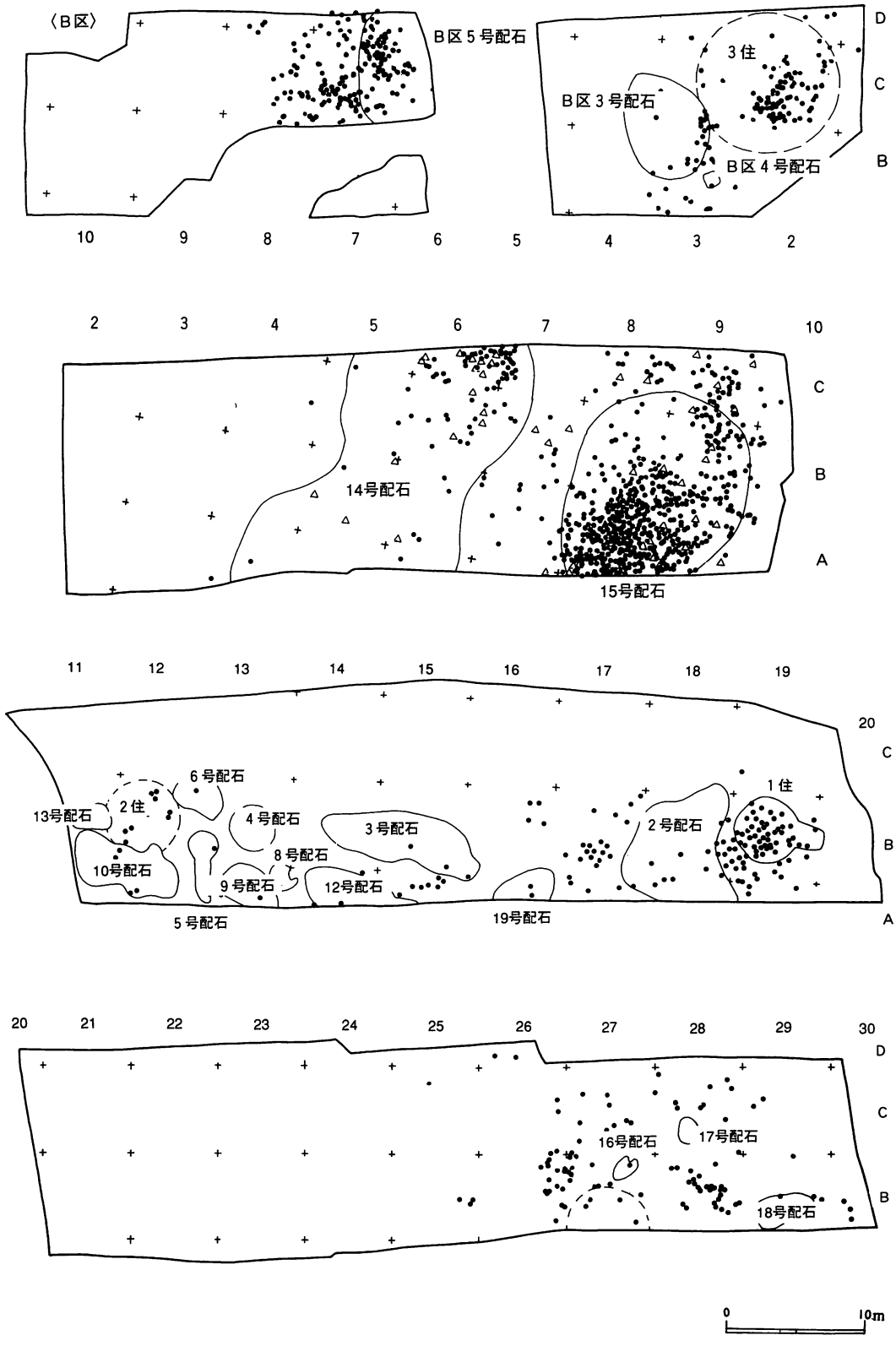
第54図14は波状口縁で矢羽根状沈線が施される。15・19・20も波状口縁である。口縁に沿って刻み目のある隆線が付され、15にはその交点に円形の貼付がなされる。16は平縁口縁で平行沈線の間に磨消縄文が施される。第55図21～25は伊川津式に相当する。櫛描の波状沈線が、直線的な櫛描沈線の間に施される。26～32は崩れた矢羽根状沈線が胴部につくものである。

晩期前葉の土器（第56図）

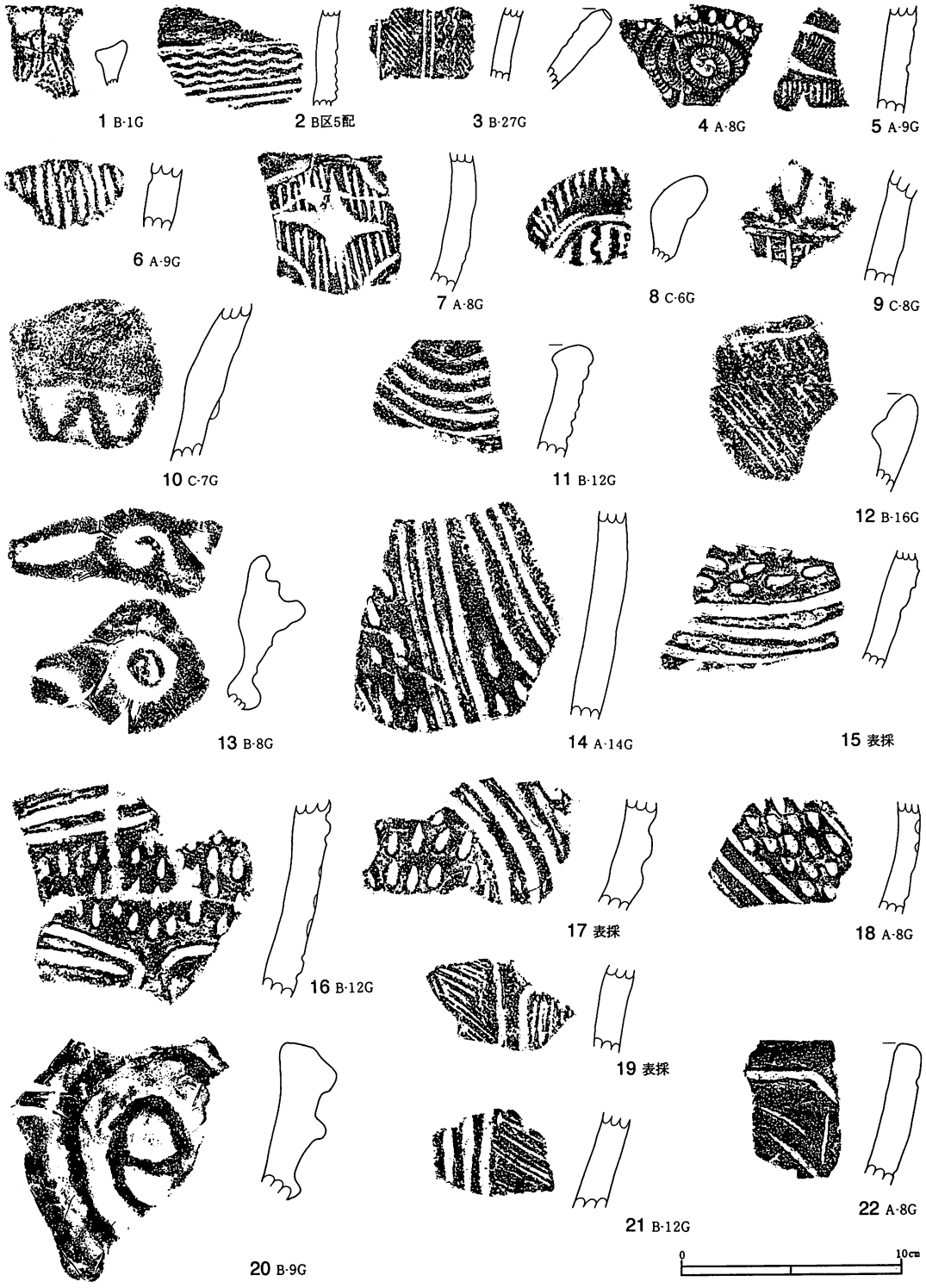
清水天王山式といわれるものである。１～15は口縁部に沈線による入り組み文、対弧文がつくものであり、16・17は入り組み文が三叉文となる。18～22は口縁部に刻み目のある隆線が施される。23～29は胴部に綾杉文をもつものである。



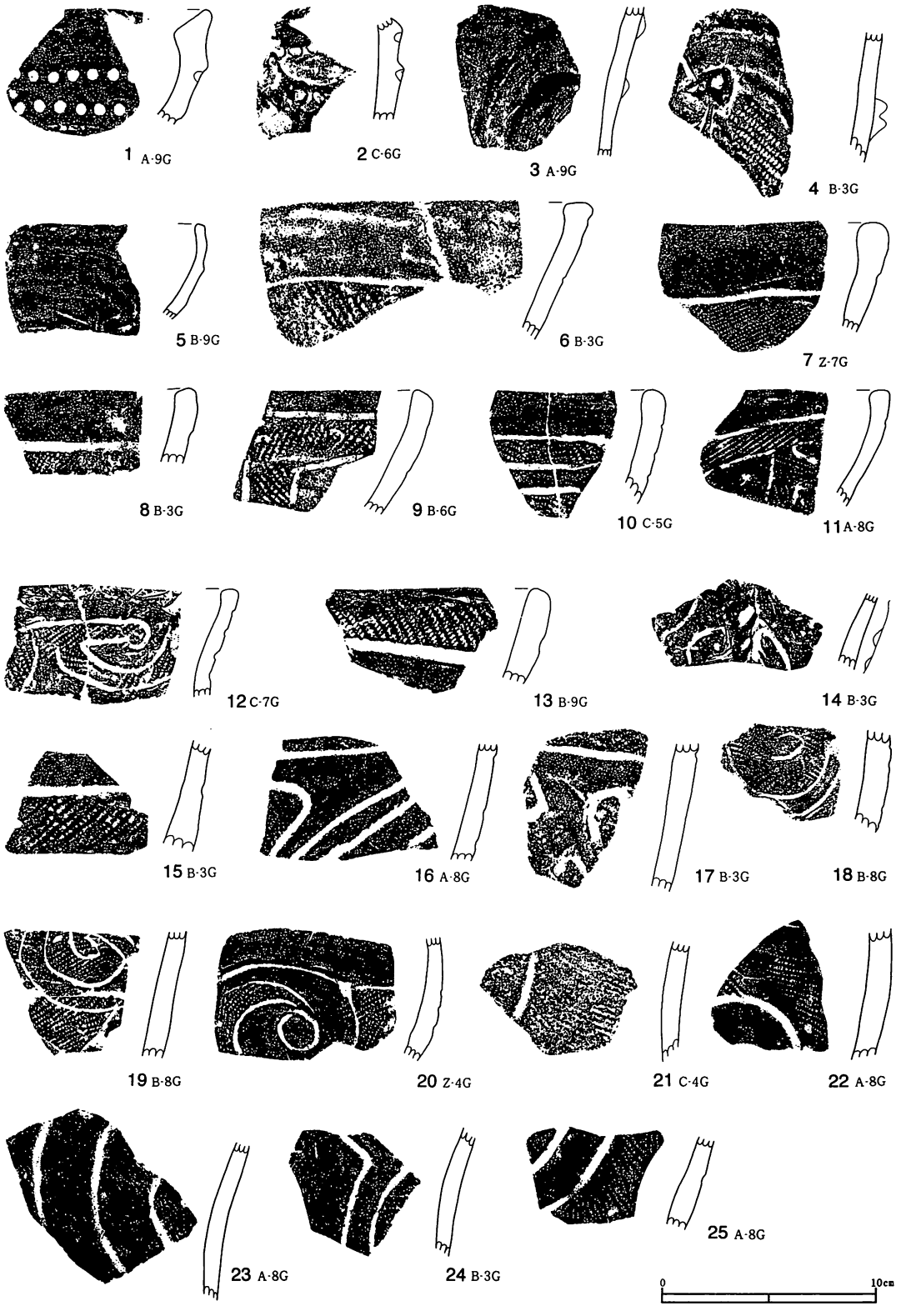
第35図　縄文土器分布図（後期初頭）　●：称名寺1　△：称名寺2



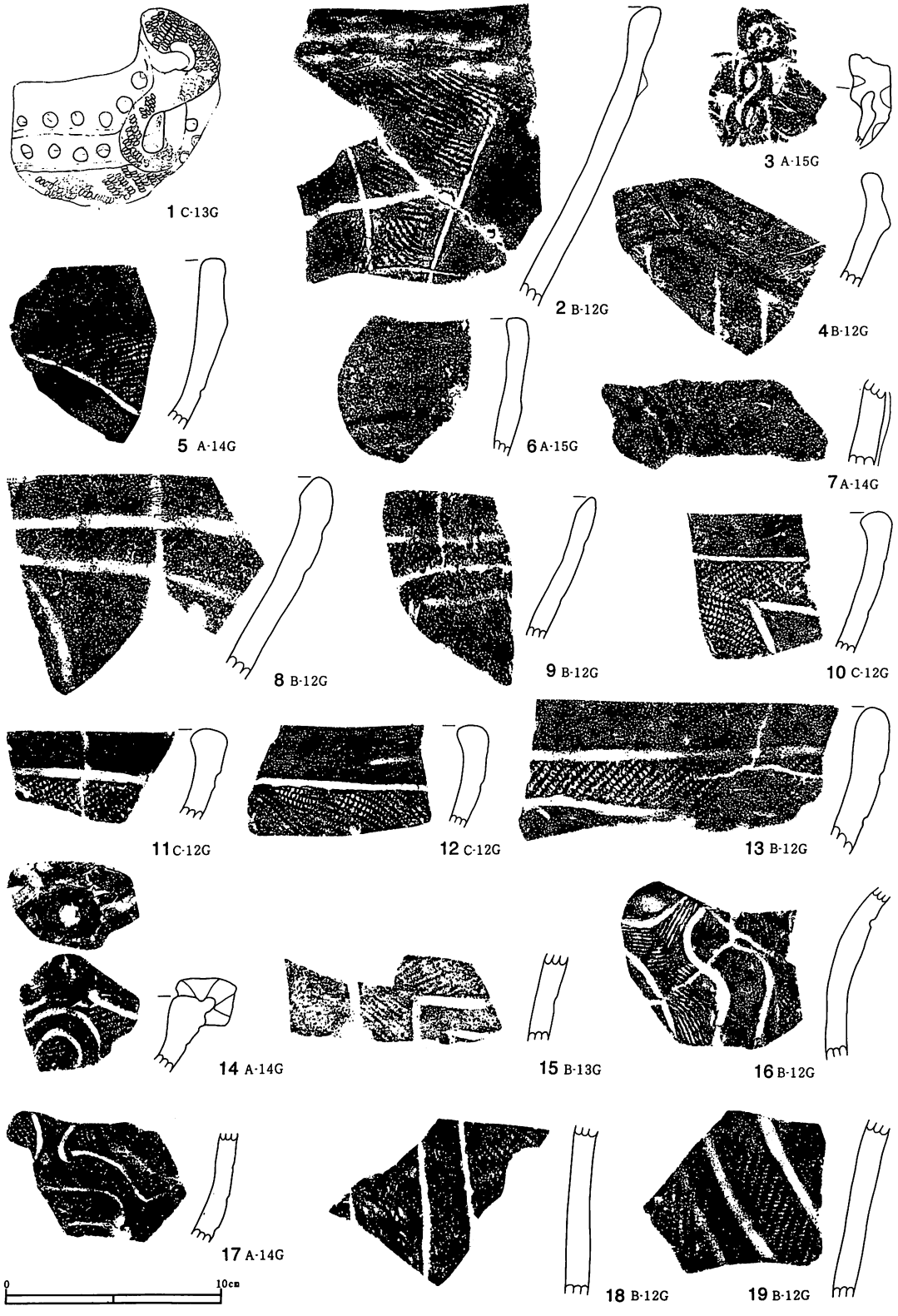
第36図　縄文土器分布図（後期前葉）　●：堀之内1　△：堀之内2



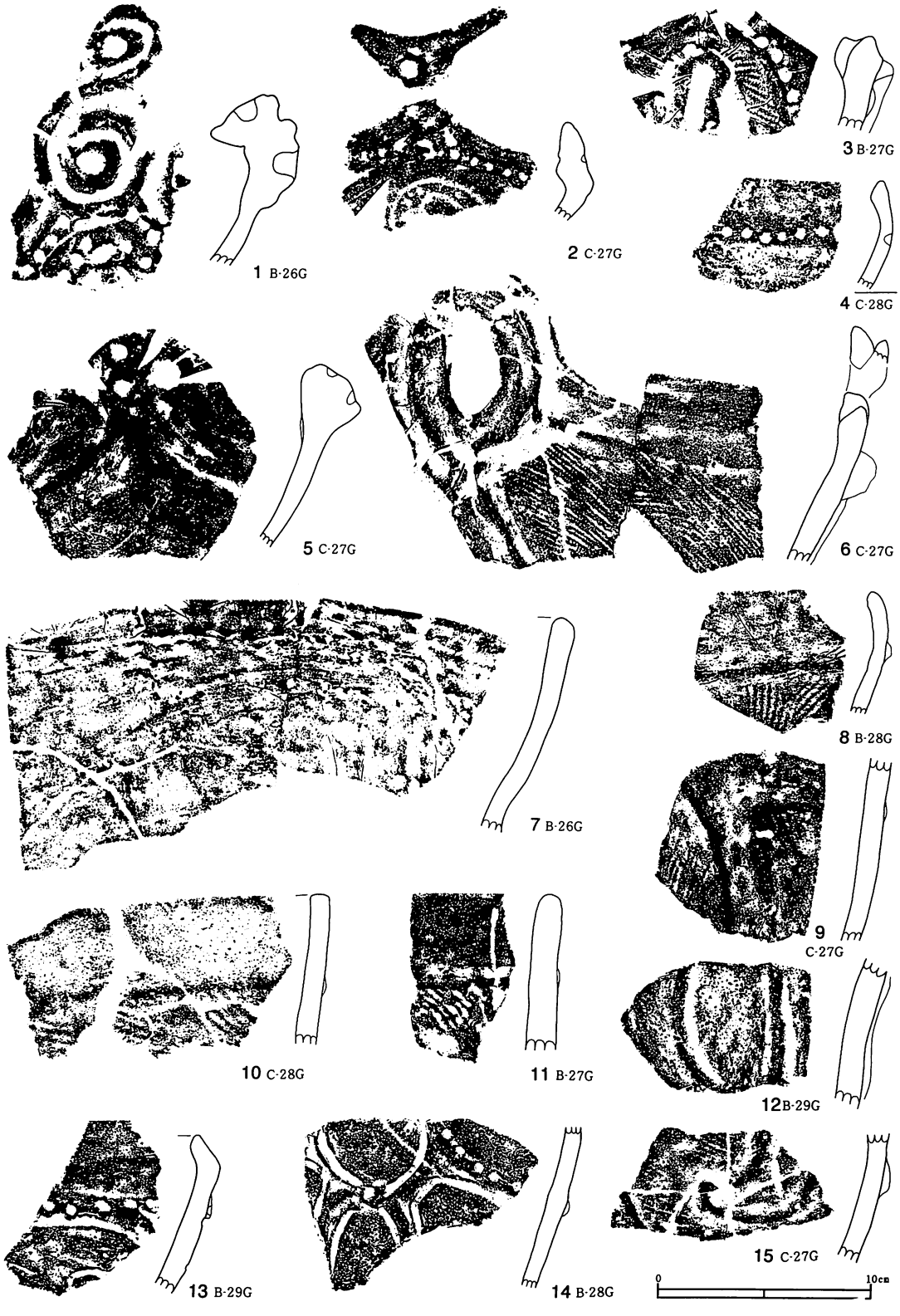
第37図　グリッド出土土器（前・中期）



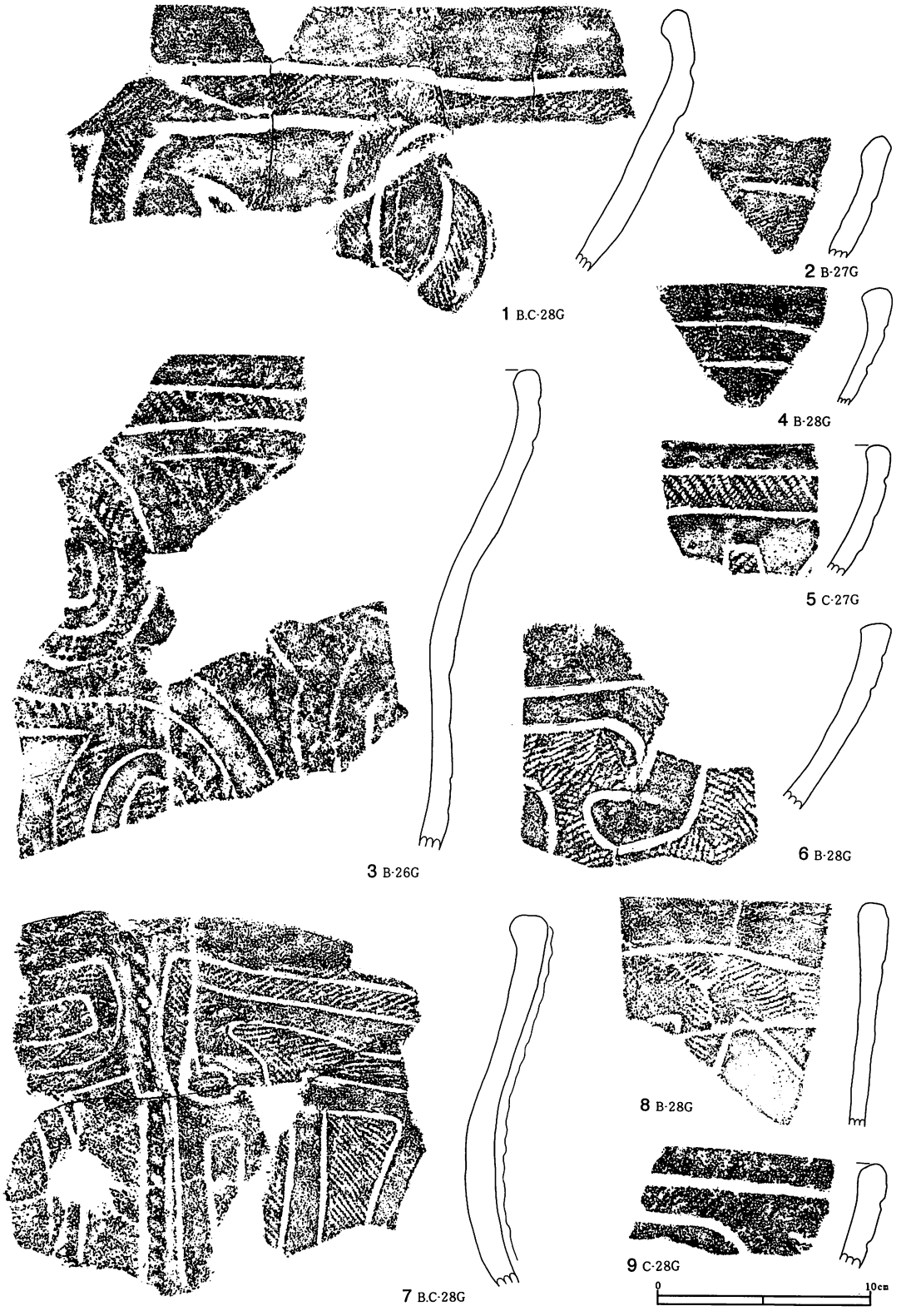
第38図　グリッド出土土器（後期初頭１）



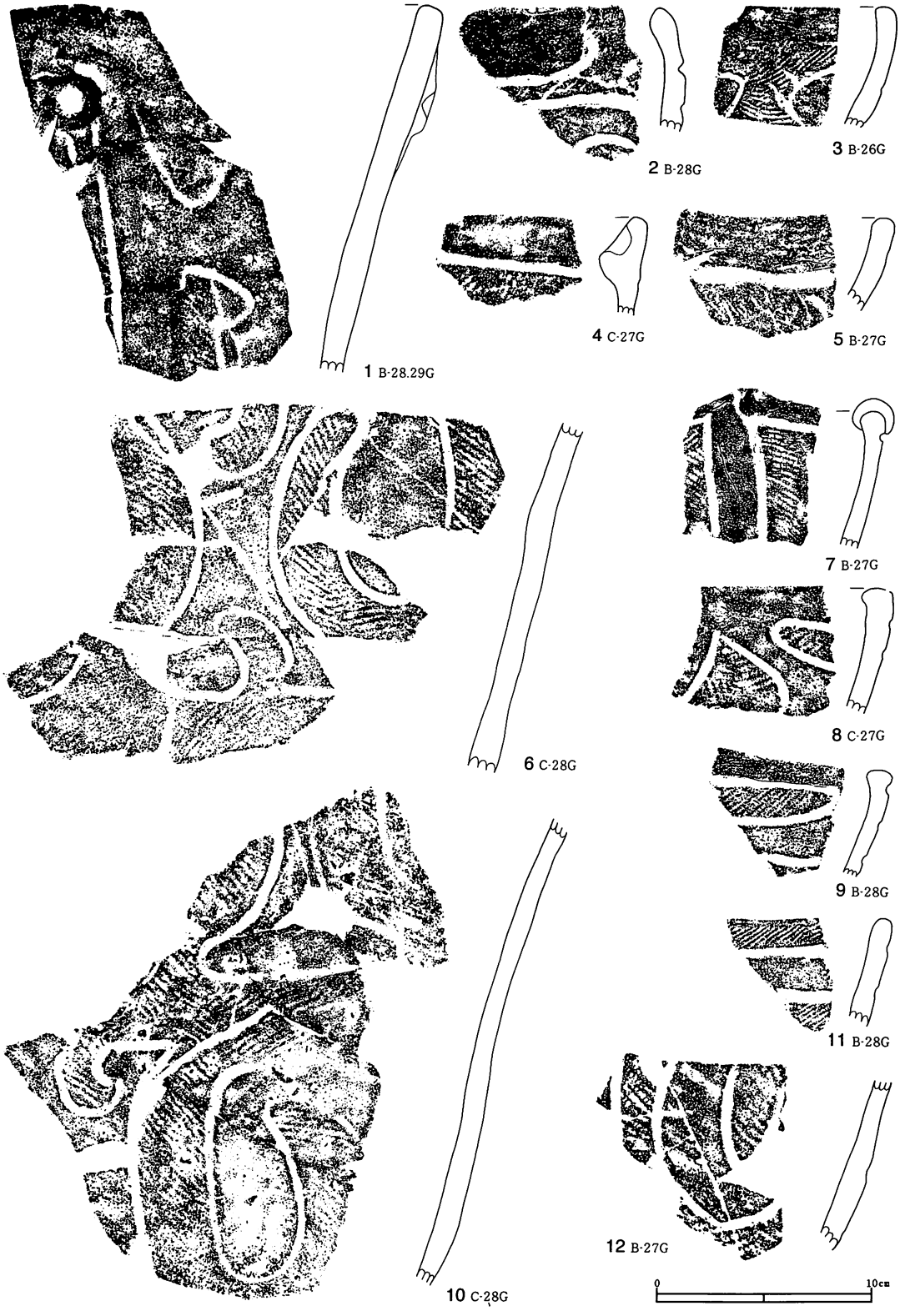
第39図　グリッド出土土器（後期初頭２）



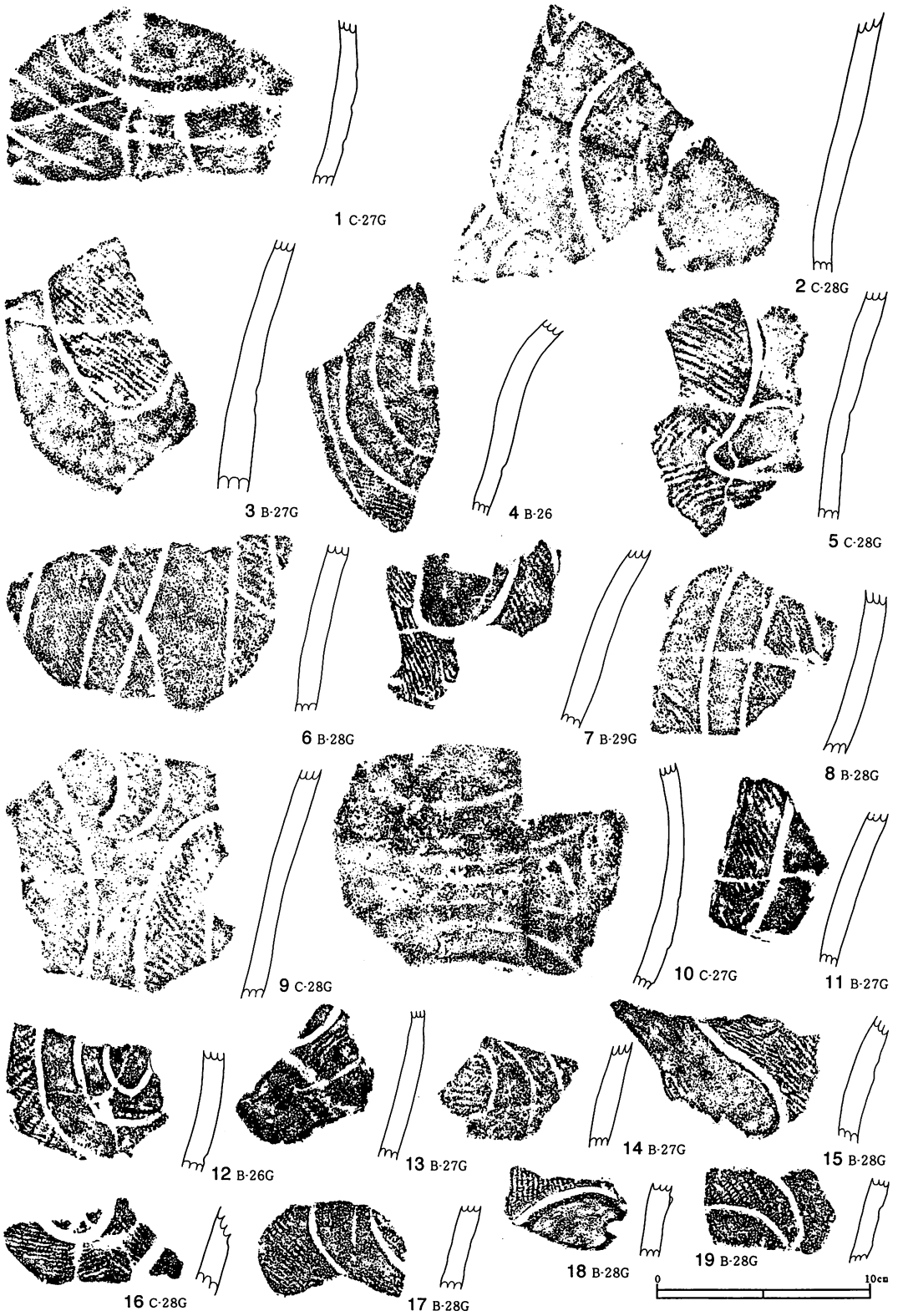
第40図　グリッド出土土器（後期初頭３）



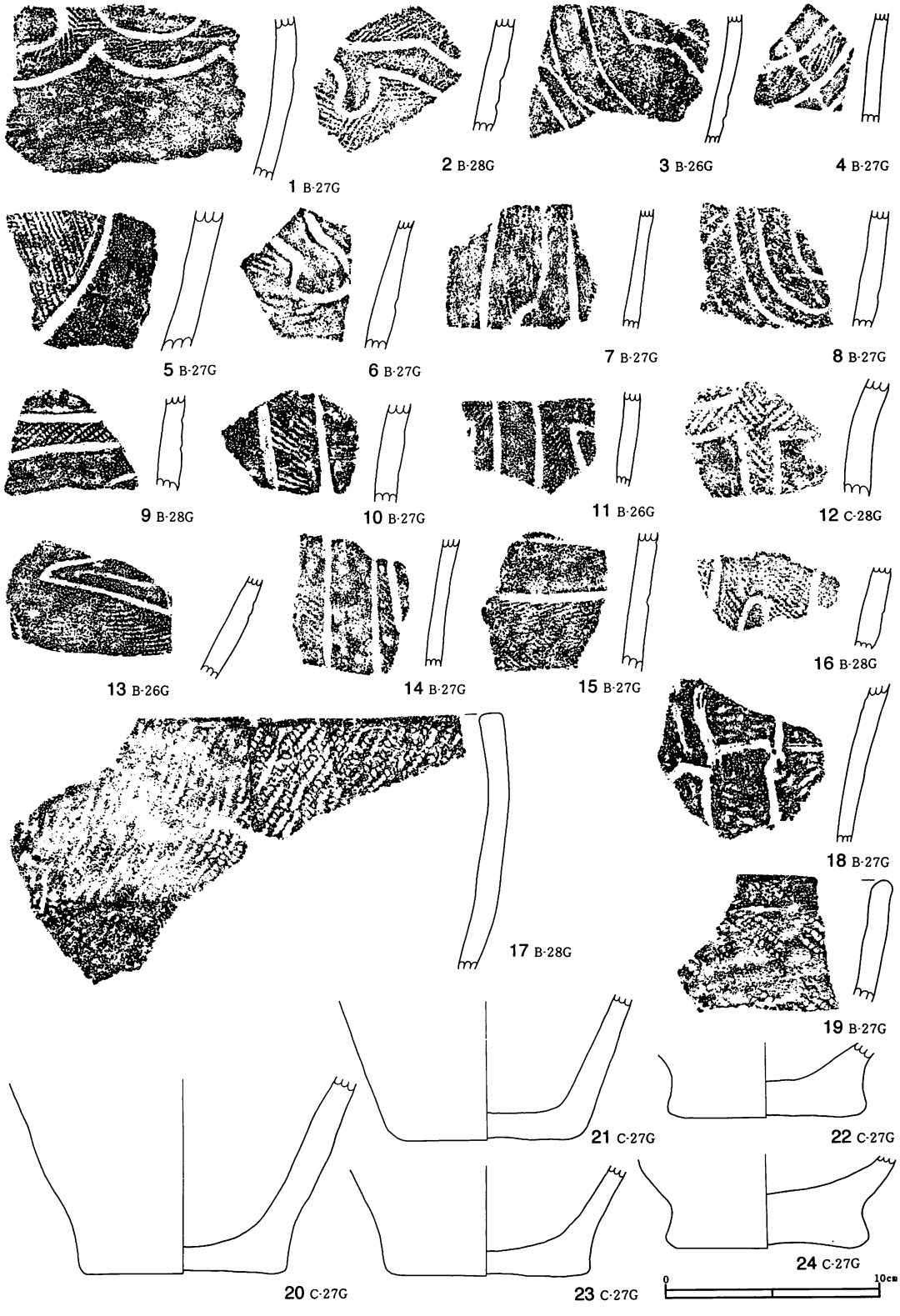
第41図　グリッド出土土器（後期初頭４）



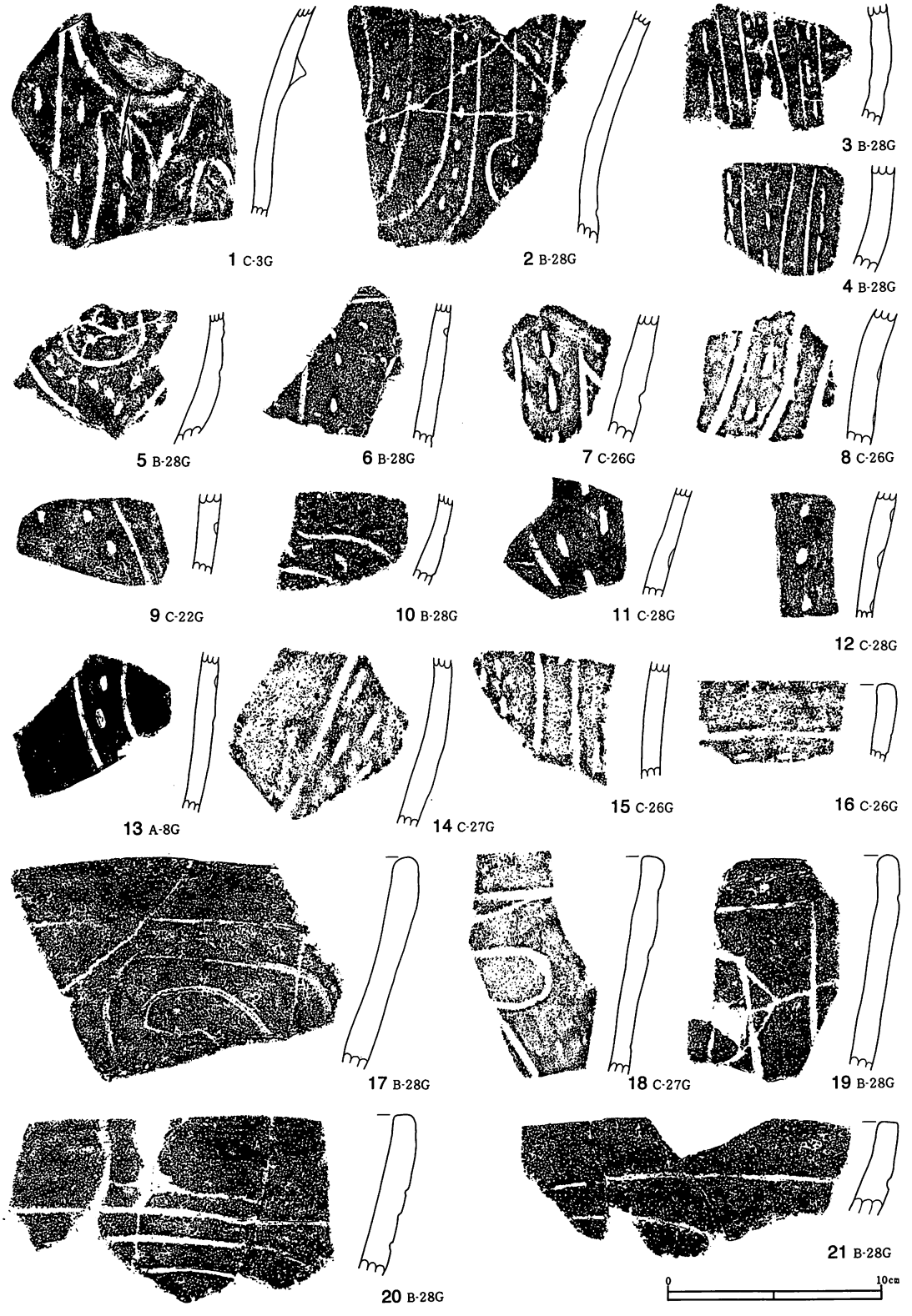
第42図　グリッド出土土器（後期初頭５）



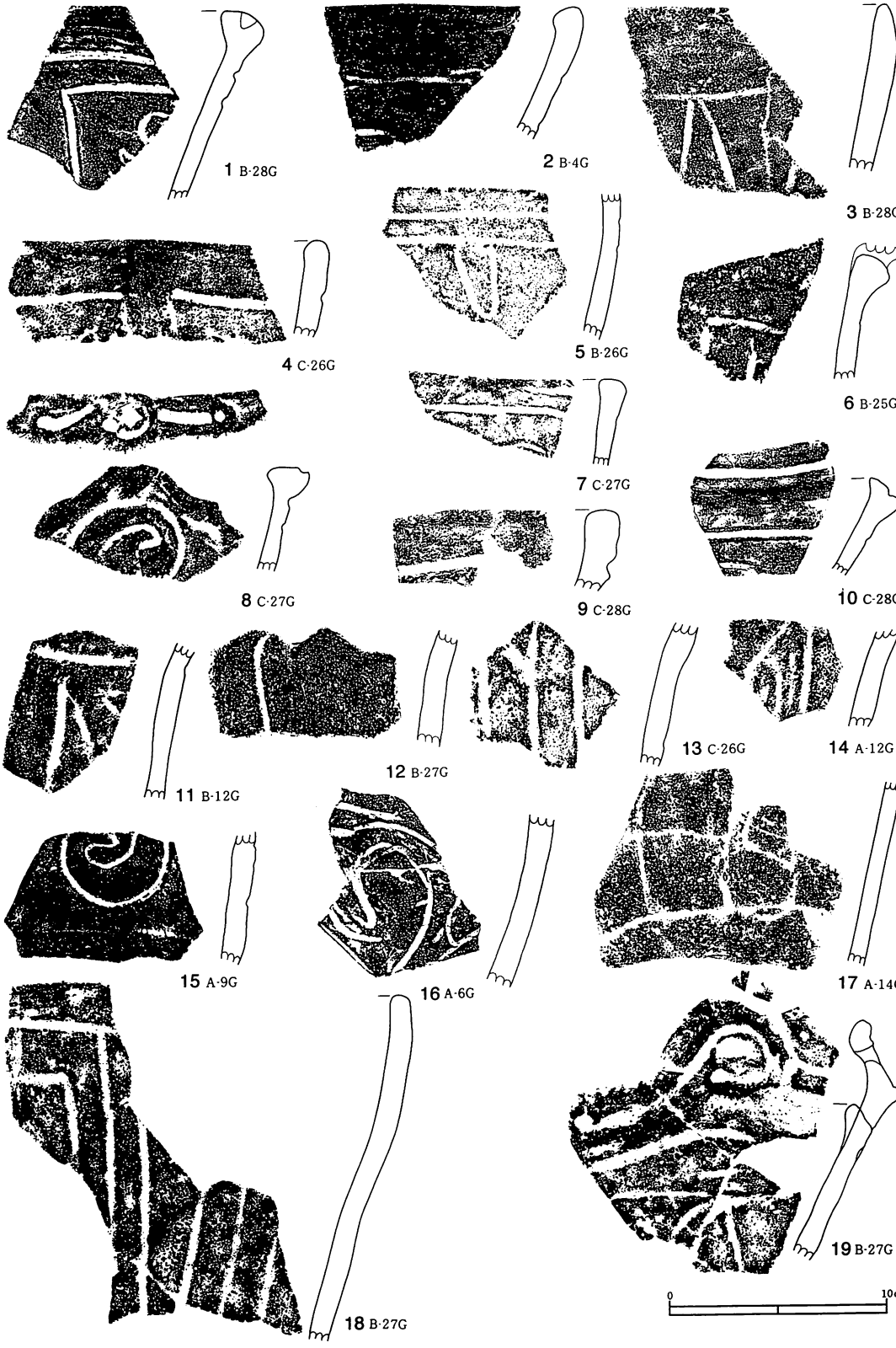
第43図　グリッド出土土器（後期初頭６）



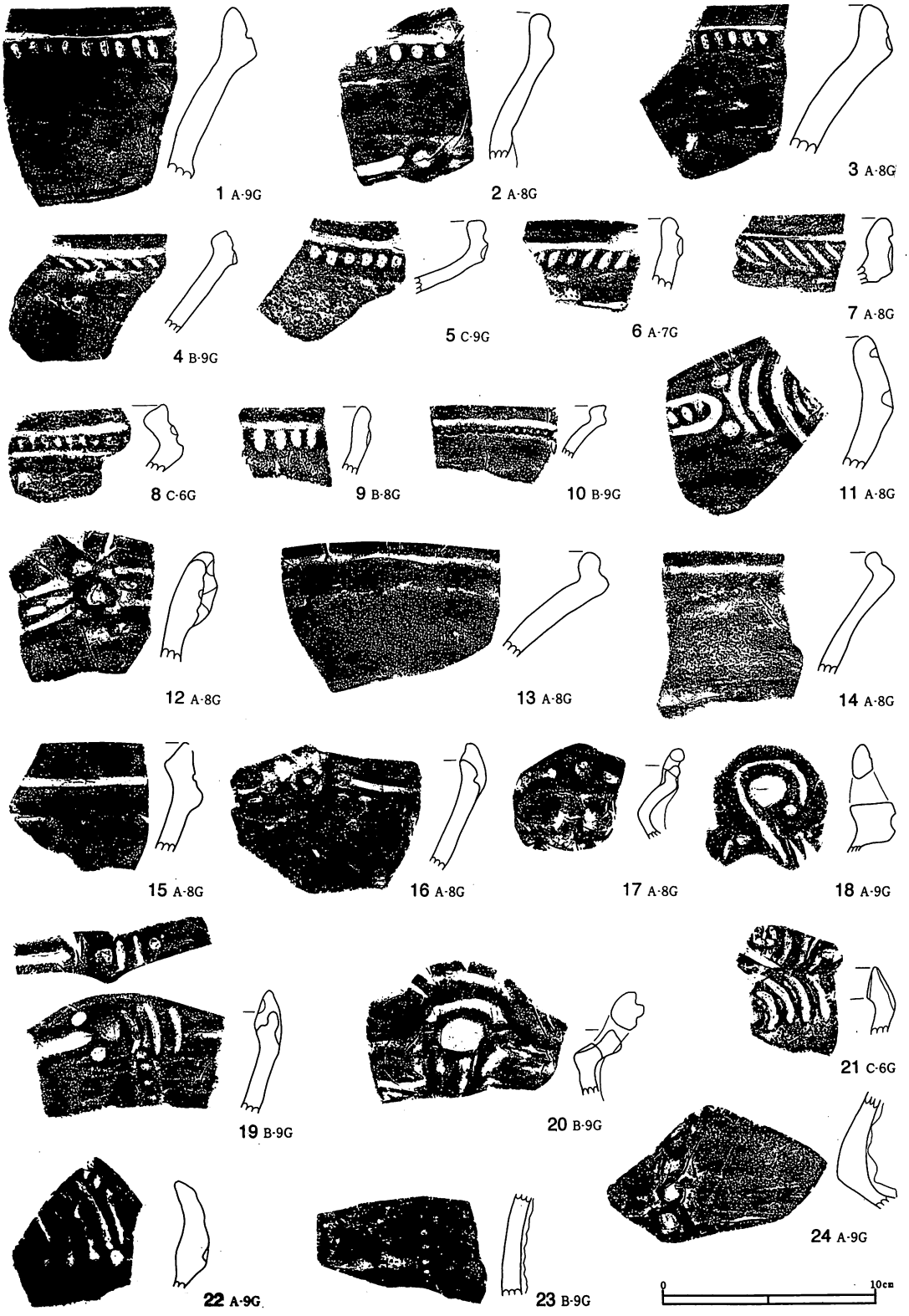
第44図　グリッド出土土器（後期初頭７）



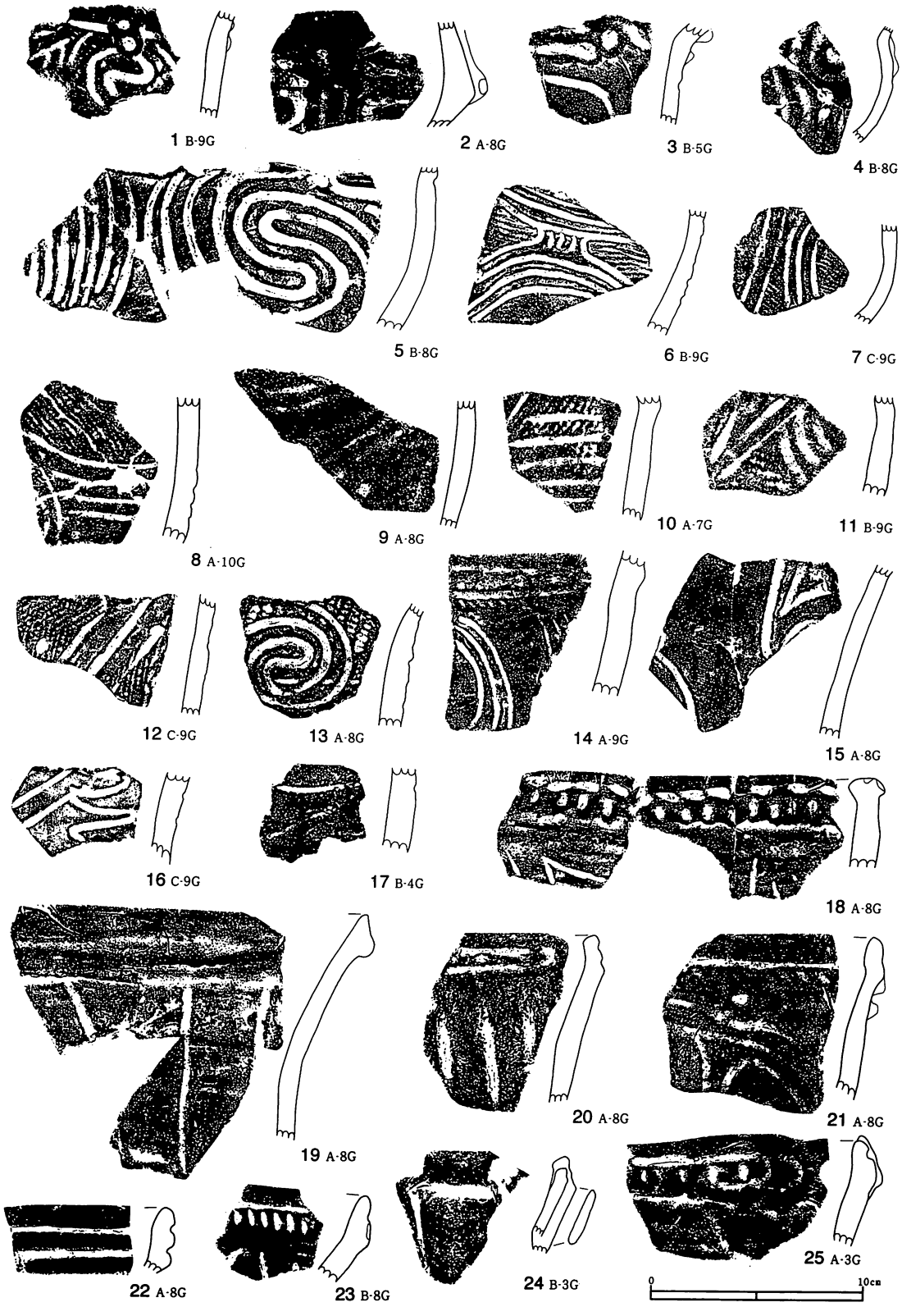
第45図　グリッド出土土器（後期初頭８）



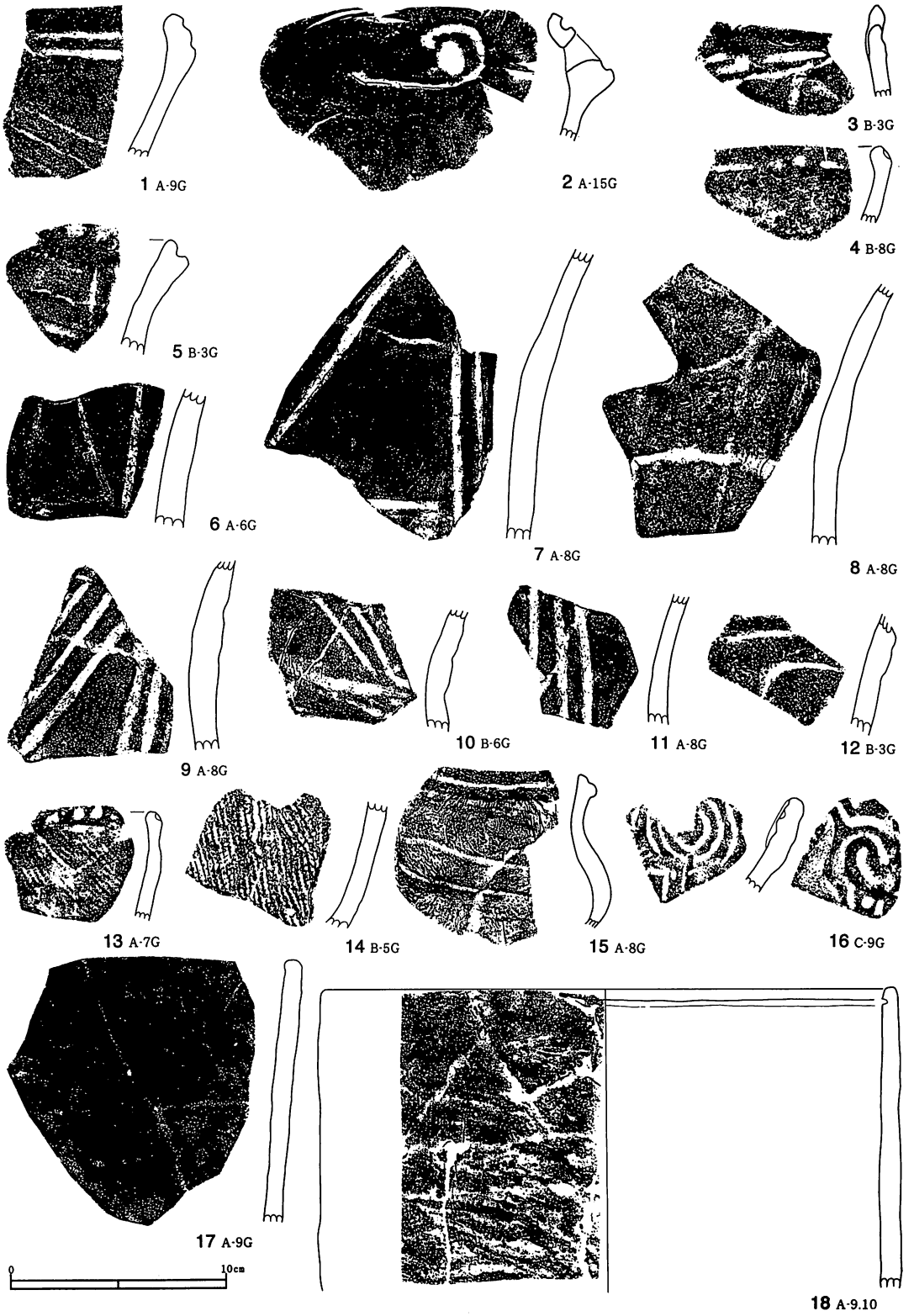
第46図　グリッド出土土器（後期初頭９）



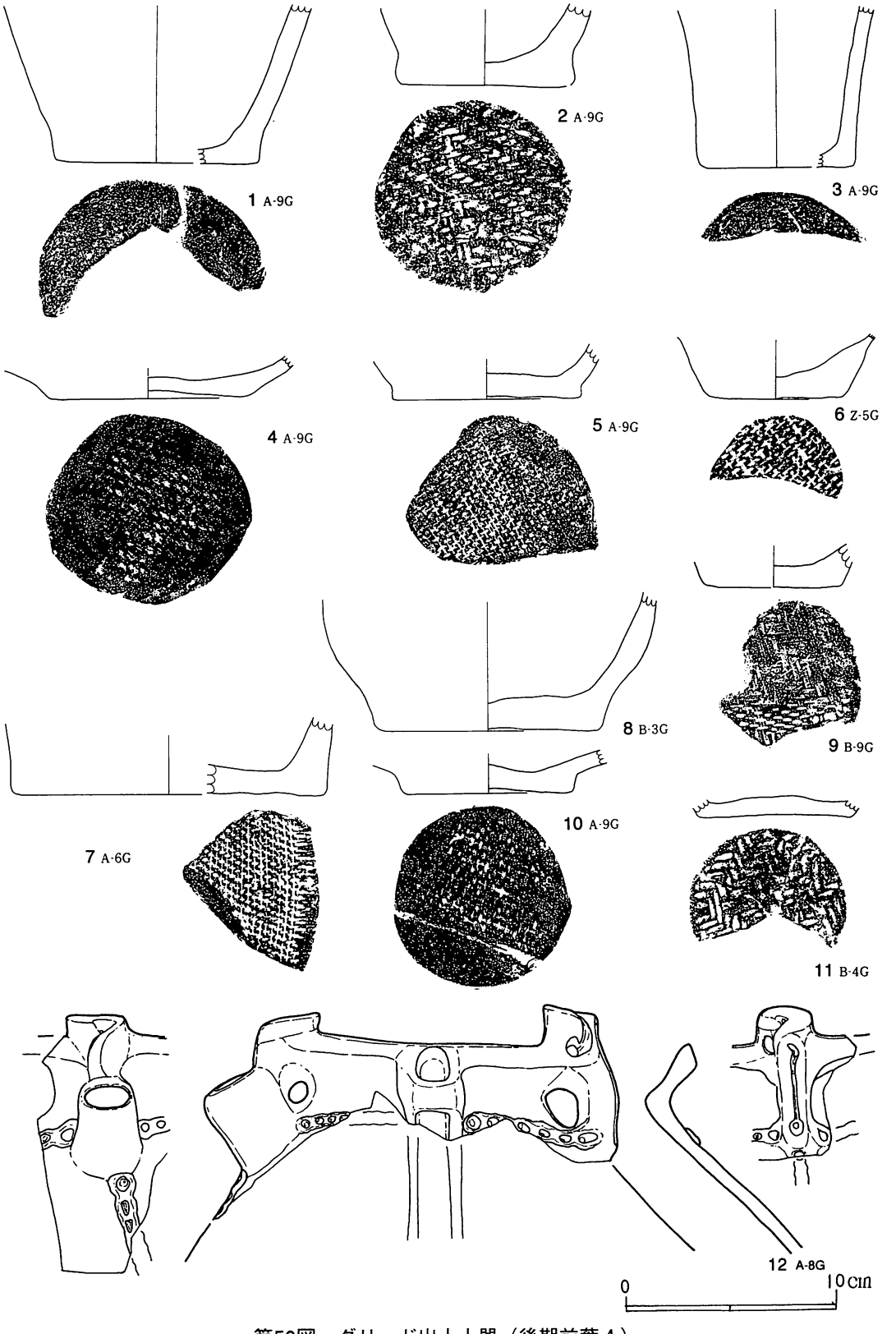
第47図　グリッド出土土器（後期前葉１）



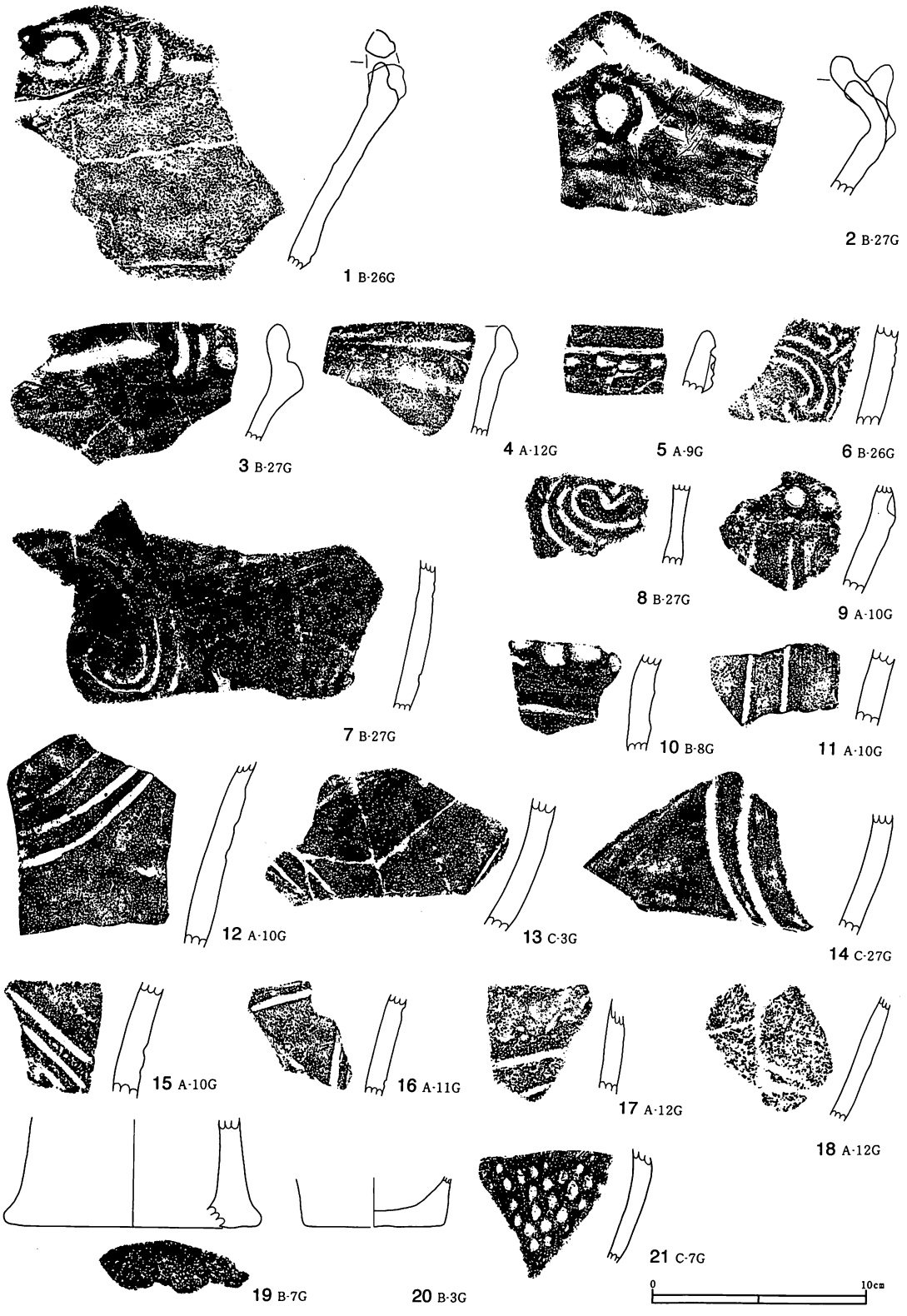
第48図　グリッド出土土器（後期前葉２）



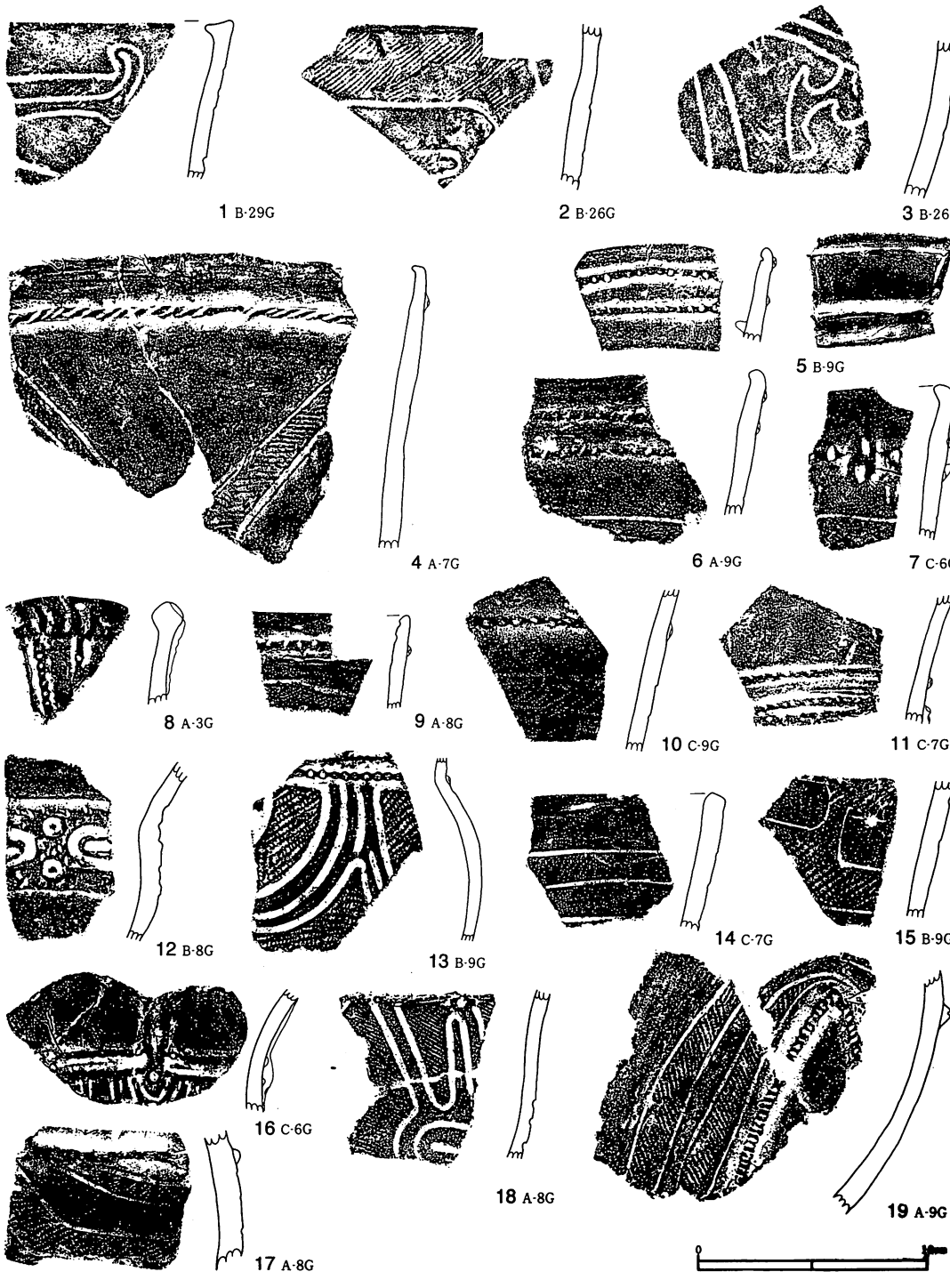
第49図　グリッド出土土器（後期前葉３）



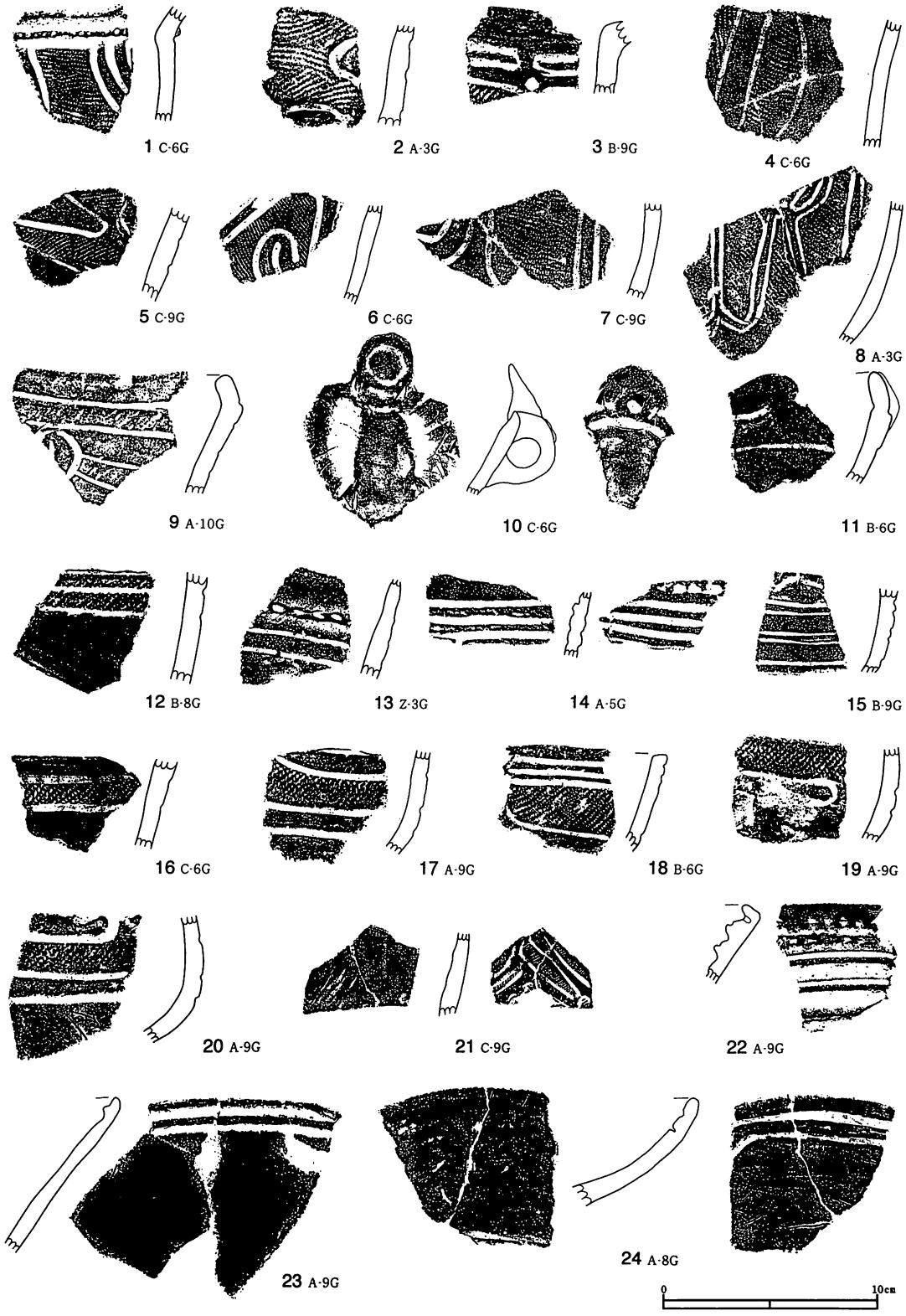
第50図　グリッド出土土器（後期前葉４）



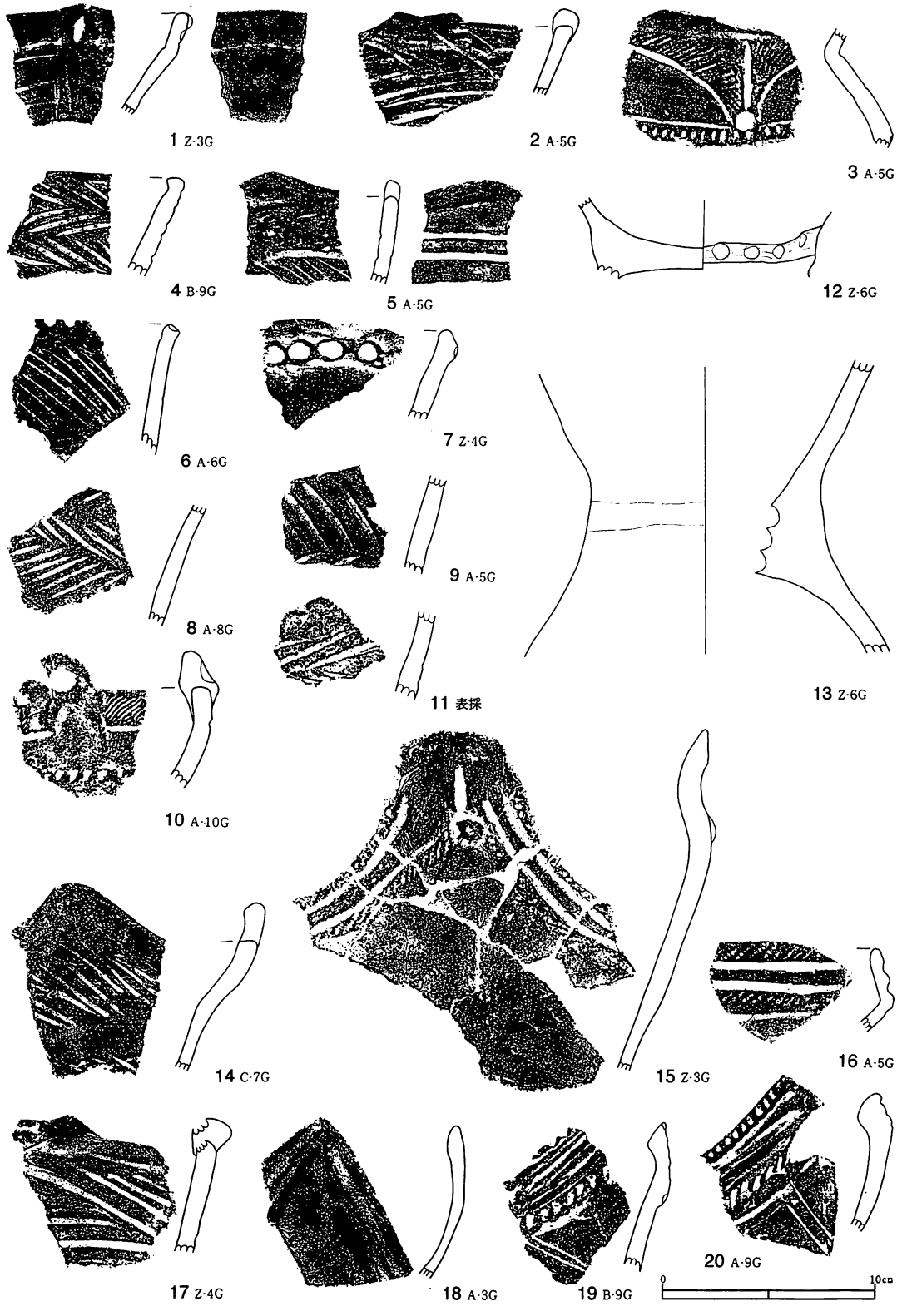
第51図　グリッド出土土器（後期前葉５）



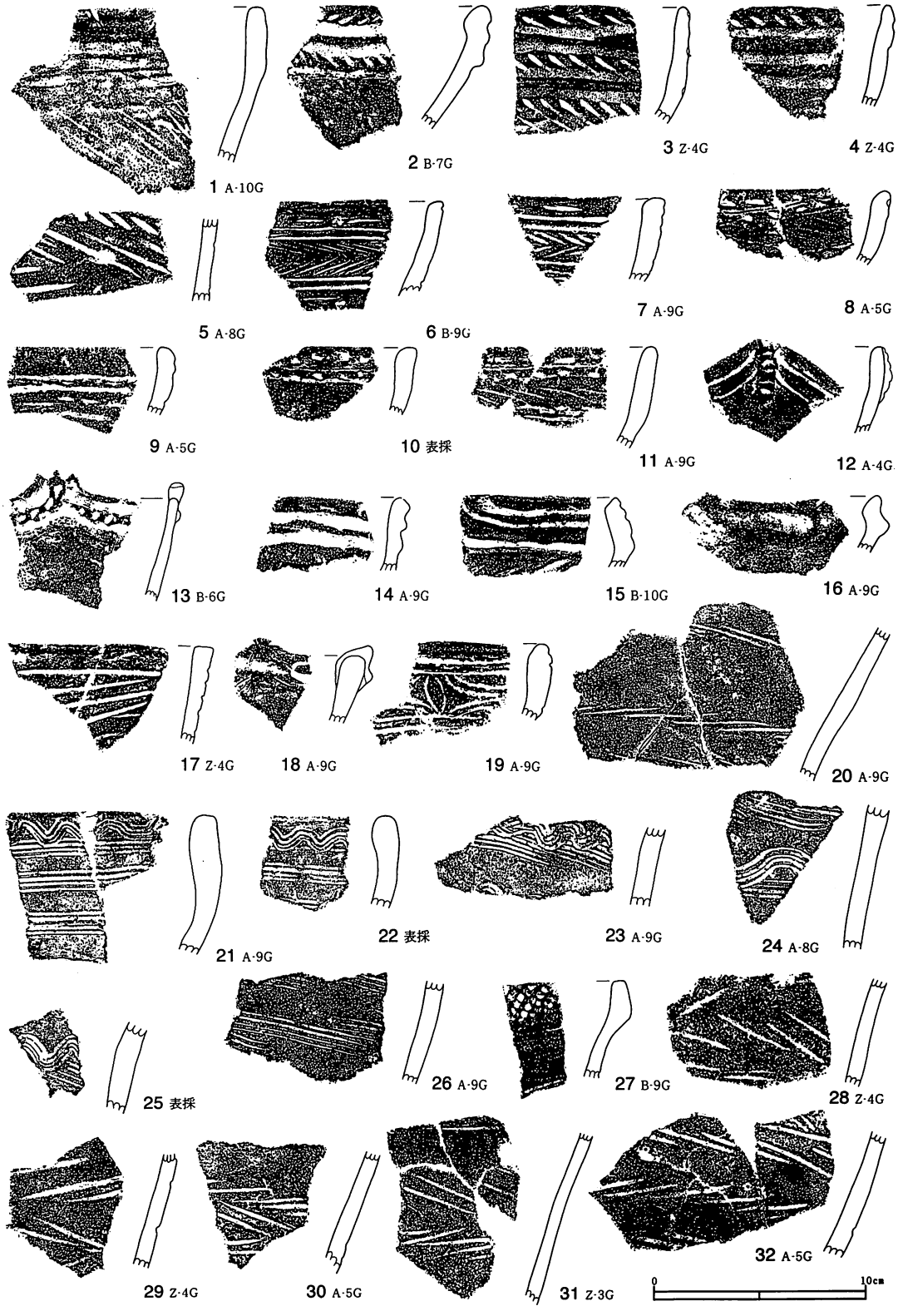
第52図　グリッド出土土器（後期前葉６）



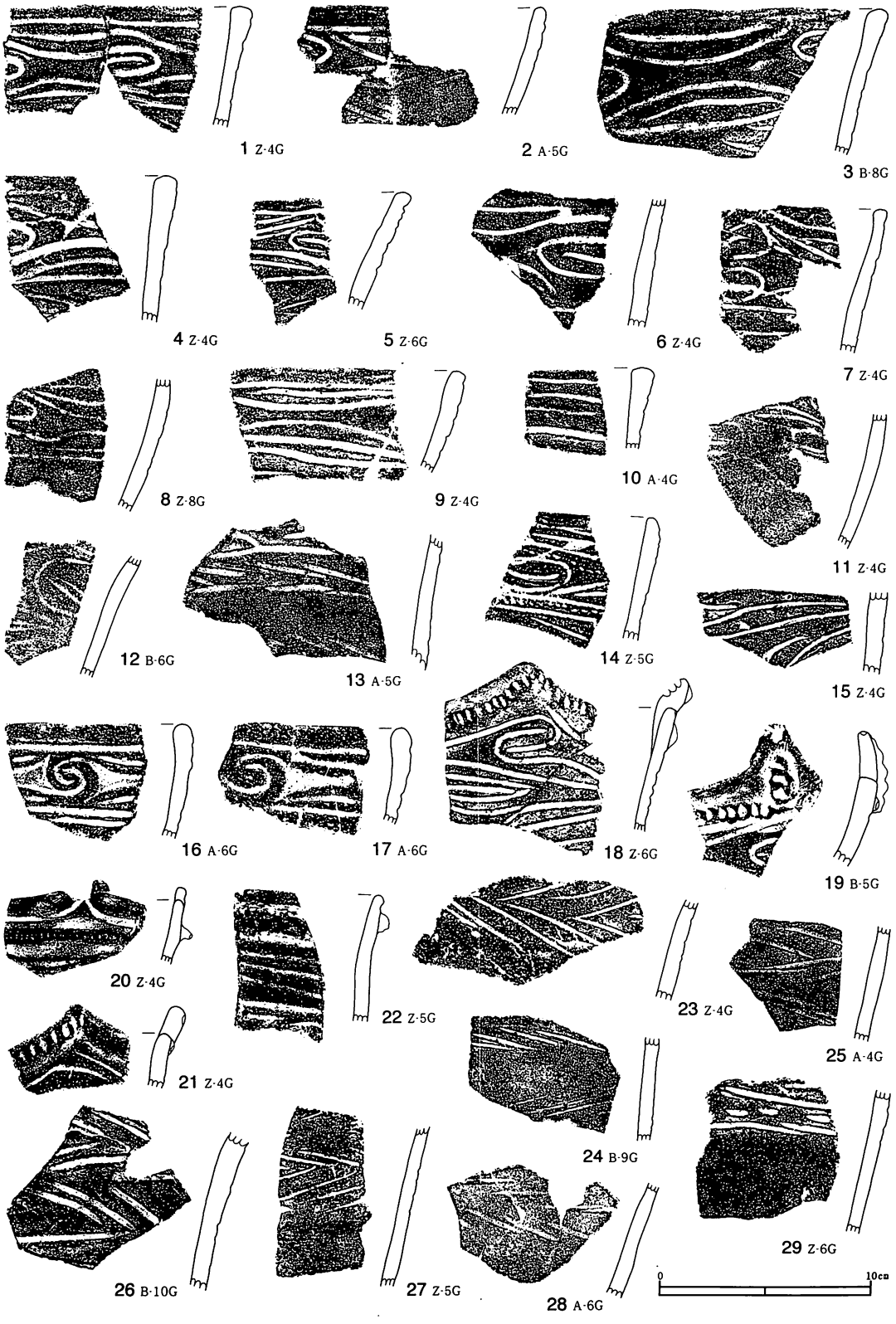
第53図　グリッド出土土器（後期前葉７）



第54図　グリッド出土土器（後期後葉１）



第55図　グリッド出土土器（後期後葉２）



第56図　グリッド出土土器（晩期前葉）

5.土製品（第57～59図）

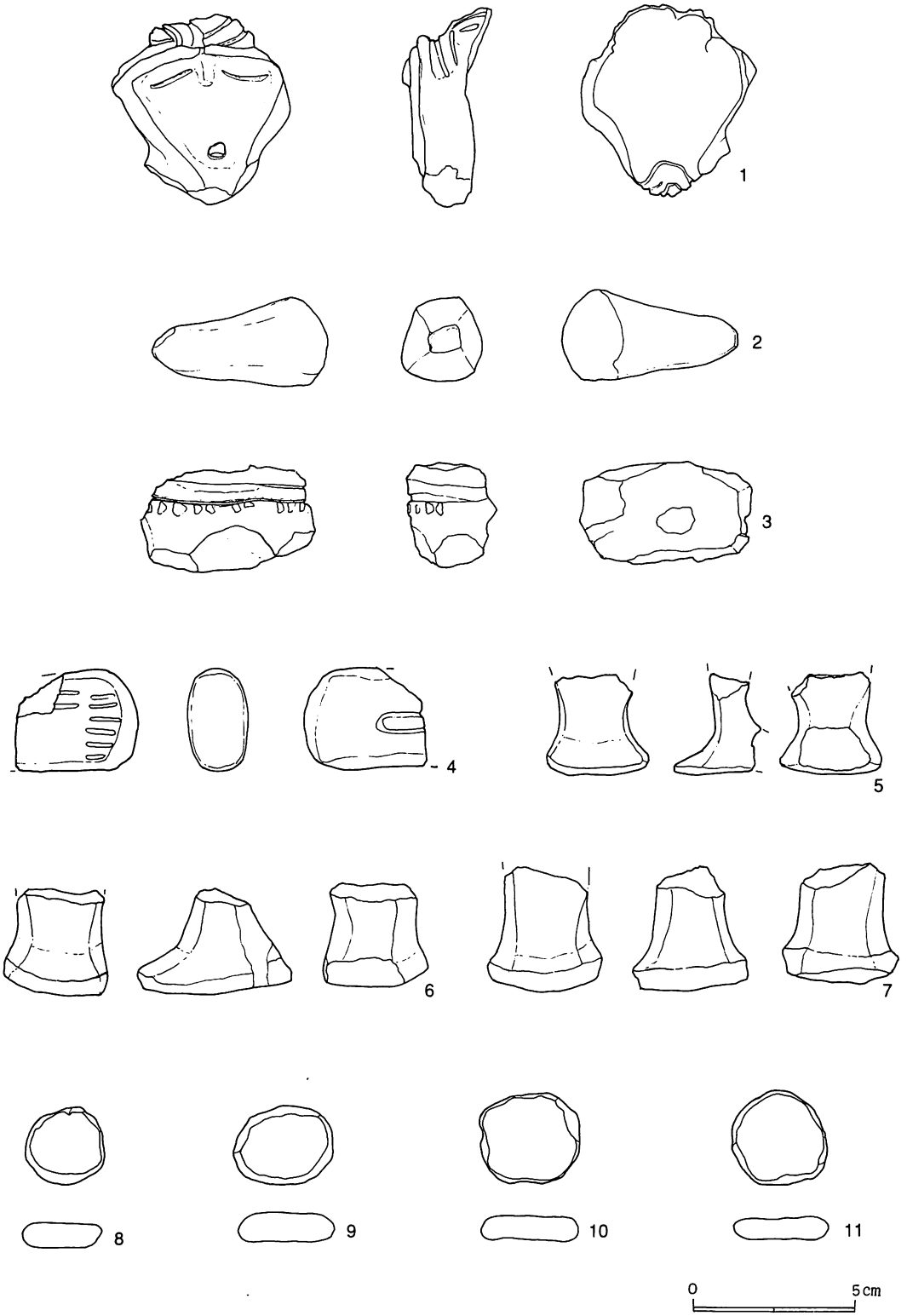
遺跡から出土した土製品は遺構に伴うものと伴わないもの全部で７種類、42点出土した。内訳は土偶７、土製円盤18、土製耳飾り９、蓋２、垂飾１、用途不明の土製品１、ミニチュア土器４である。詳細は観察表（第２表）に記す。

土偶（第57図１～７）：全て破損しており、頭部１、胴部１、手２、足３である。

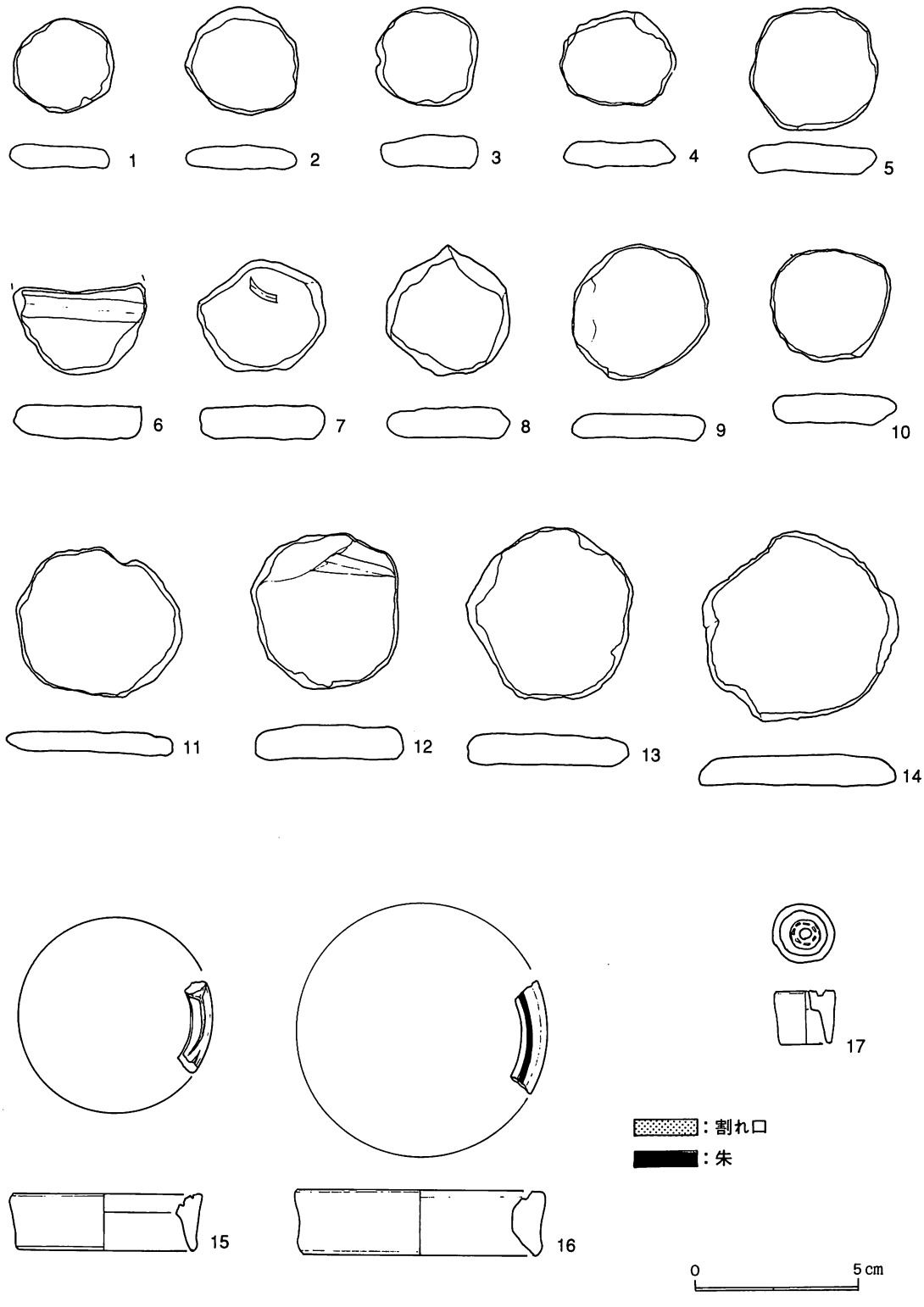
土製円盤（第57図８～11、第58図１～14）：形態は円形または隅丸方形に近い。大きさは径約2.4～6.1cmまでの間で小（径３cm前後）、中（径約４cm）、大（径５～６cm）の３段階に大きく分けられる。

第２表　土製品観察表　　（単位cm、g）

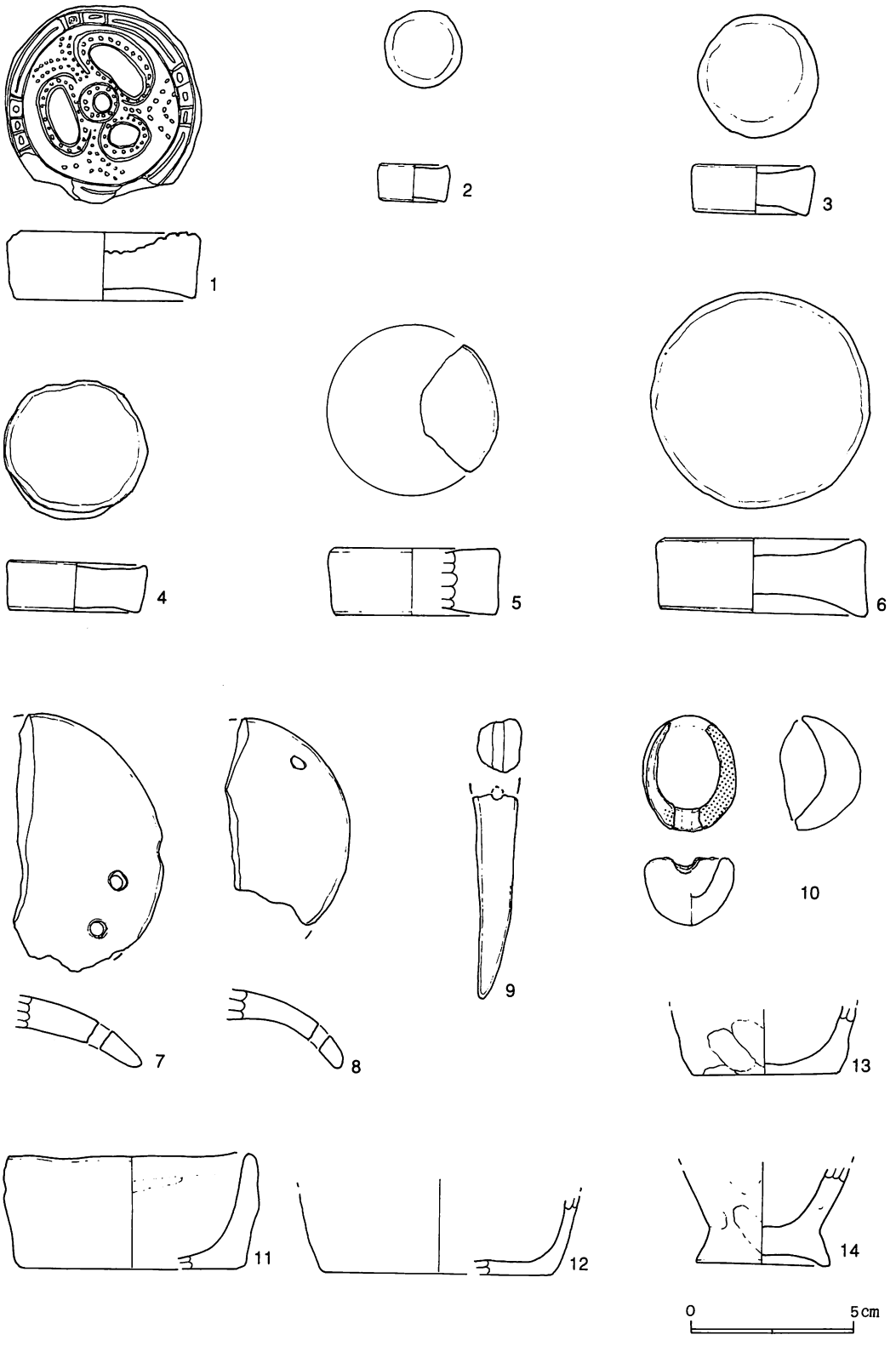
図	No.	種　類	出土地点	遺　存	最大長	最大幅	最大厚	重　量	備　考
57	1	土　偶	B－5	頭部	6.1	5.5	1.6	55.2	
57	2	土　偶	3配	手	5.4	2.7	2.4	7.8	
57	3	土　偶	15配	胴部	3.1	5.3	2.8	35.5	
57	4	土　偶	15配	手	3.8	3.0	1.8	22.6	
57	5	土　偶	C－8	足	3.1	3.2	2.4	14.4	
57	6	土　偶	A－7	足	3.3	3.2	4.8	35.2	
57	7	土　偶	15配	足	3.8	3.6	3.6	27.0	
図	No.	種　類	出土地点	遺　存	最大長	最大幅	最大厚	重　量	備　考
57	8	土製円盤	一括	完	2.4	2.4	0.8	5.5	
57	9	土製円盤	1住	完	4.1	2.5	0.9	7.3	
57	10	土製円盤	B－4	完	3.1	2.8	0.8	8.9	
57	11	土製円盤	1住	完	2.9	2.9	0.7	7.3	
58	1	土製円盤	A－8	完	3.1	2.9	0.7	9.0	
58	2	土製円盤	1住	完	3.5	3.3	0.7	9.6	
58	3	土製円盤	A－7	完	3.3	3.0	1.0	11.0	縄文
58	4	土製円盤	A－4	完	3.6	2.9	0.8	8.8	
58	5	土製円盤	A－4	完	4.0	3.7	0.9	16.5	
58	6	土製円盤	B－3	1/2	4.1	(2.6)	1.1	12.1	沈線文
58	7	土製円盤	A－4	完	4.0	3.4	1.1	16.0	
58	8	土製円盤	B－27	完	4.0	4.0	0.9	14.4	
58	9	土製円盤	3住	完	4.3	4.2	0.8	16.6	
58	10	土製円盤	A－8	完	3.7	3.5	0.9	15.2	
58	11	土製円盤	C－9	完	5.2	4.6	0.7	20.2	
58	12	土製円盤	A－8	完	4.9	4.6	1.0	28.3	沈線文
58	13	土製円盤	A－8	完	5.3	5.4	1.0	31.3	
58	14	土製円盤	B－28	完	6.1	5.9	1.0	42.1	
図	No.	種　類	出土地点	遺　存	最大長	最大幅	最大厚	重　量	備　考
58	15	土製耳飾り	A－5	1/4	(6.1)	－	1.8	(3.2)	環状　沈線文
58	16	土製耳飾り	A－6	1/4	(8.0)	－	2.0	(8.2)	環状　沈線文　朱塗り
58	17	土製耳飾り	14配	一欠	1.9	－	1.6	(4.5)	環状　沈線文・刺突文
59	1	土製耳飾り	14配	一欠	6.1	－	2.1	(72.5)	柱状　沈線文・刺突文
59	2	土製耳飾り	14配	完	2.4	－	1.1	8.5	柱状
59	3	土製耳飾り	Z－4	一欠	3.8	－	1.5	(25.1)	柱状
59	4	土製耳飾り	A－5	一欠	4.5	－	1.5	(29.8)	柱状
59	5	土製耳飾り	A－6	1/4	5.4	－	2.1	(15.7)	柱状
59	6	土製耳飾り	14配	完	6.8	－	2.3	97.4	柱状
59	7	蓋	C－26	1/3	(4.7)	－	－	(48.0)	円形孔２
59	8	蓋	B－27	1/2	(3.8)	－	－	(31.1)	円形孔１
図	No.	種　類	出土地点	遺　存	最大長	最大幅	最大厚	重　量	備　考
59	9	垂　飾	B－27	一欠	(6.4)	(1.3)	(1.7)	(7.8)	上部に円形孔
59	10	不　明	一括	完	2.9	2.3	0.8	(14.2)	下部に円形孔
図	No.	種　類	出土地点	遺　存	最大長	最大幅	最大厚	重　量	備　考
59	11	ミニチュア土器	1住	1/4	(6.6)	(6.0)	(3.1)	(32.1)	
59	12	ミニチュア土器	B－8	1/4	－	(6.0)	(2.5)	(23.0)	
59	13	ミニチュア土器	A－8	1/2	－	3.7	(1.6)	(24.4)	指頭痕
59	14	ミニチュア土器	A－9	1/2	－	3.4	(3.5)	(46.1)	指頭痕



第57図　土製品（1）



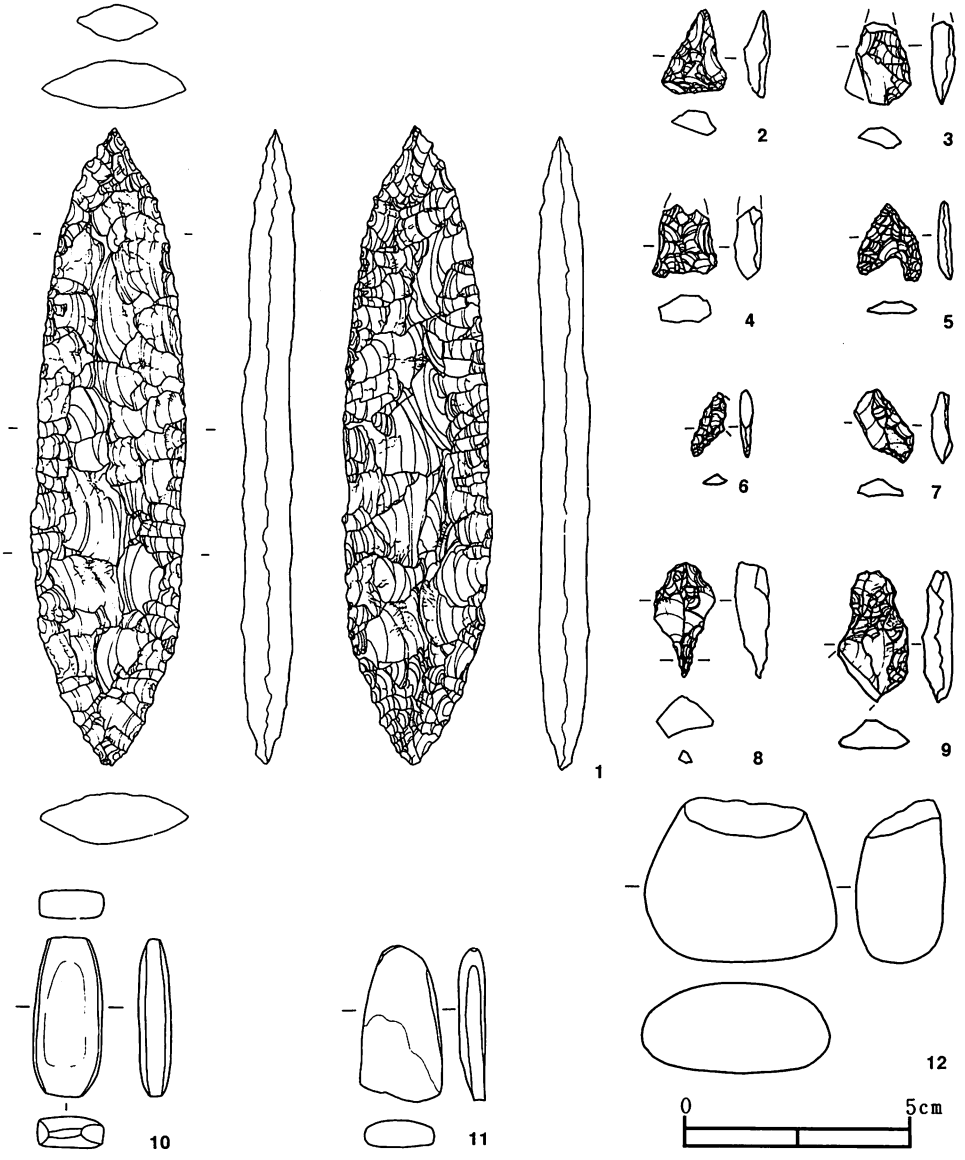
第58図　土製品（2）



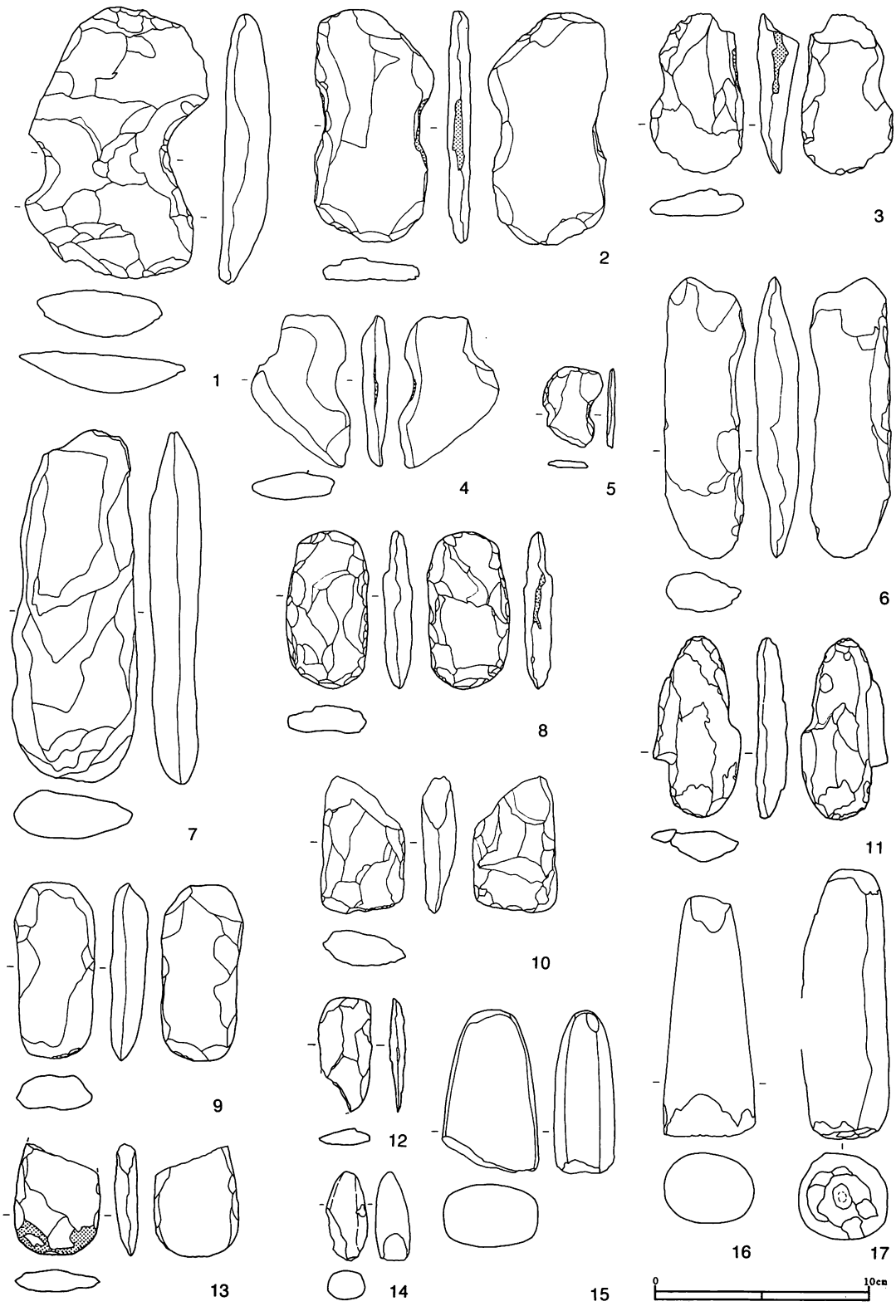
第59図　土製品（3）

6.石器(第60～66図)

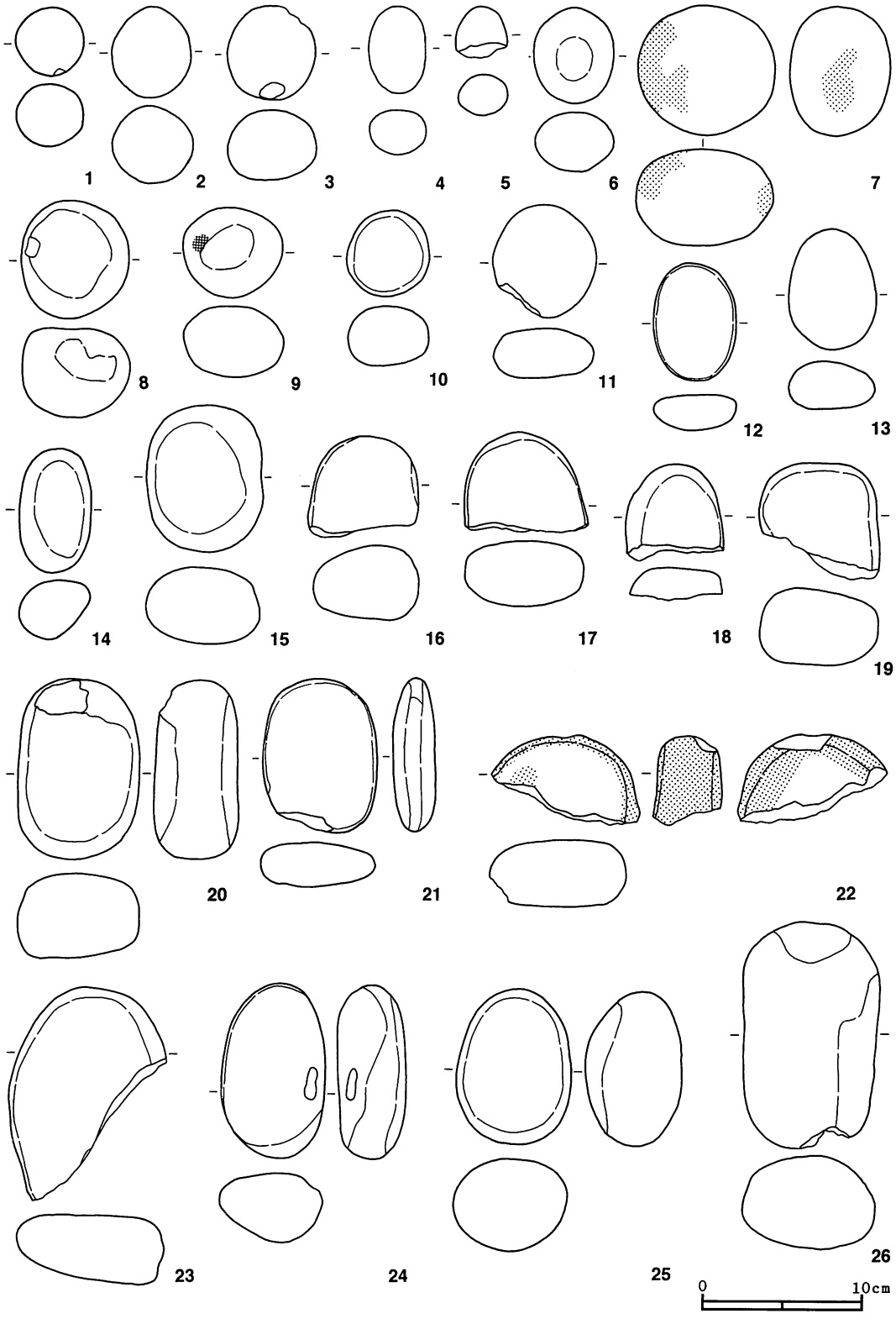
本遺跡から出土した石器は、遺構と包含層出土としてグリッド内で取り上げたもの合わせて18器種、総数156点である。小剥片に関しては、そのほとんどが黒曜石であり、他にチャート2、水晶1が出土した。遺構の掘り込みが不明瞭な為、住居跡、配石の一部となっているもの以外では、明確に遺構に伴うと言えるものは少ないので出土位置の明確なものは全て図示した。また、破片や表採、グリッド一括のものなどは観察表（第3表）のみ記した。



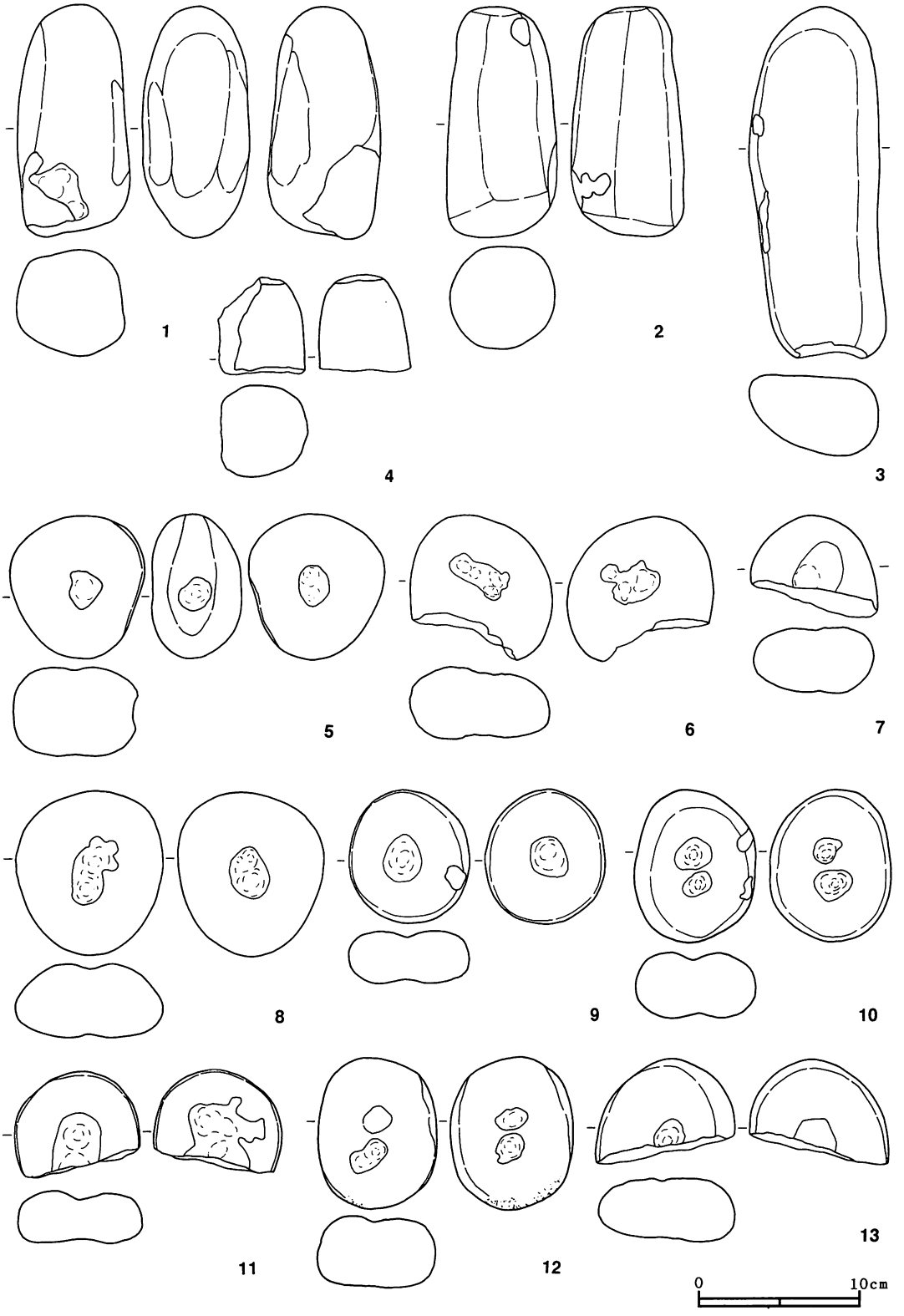
第60図　石器（1）



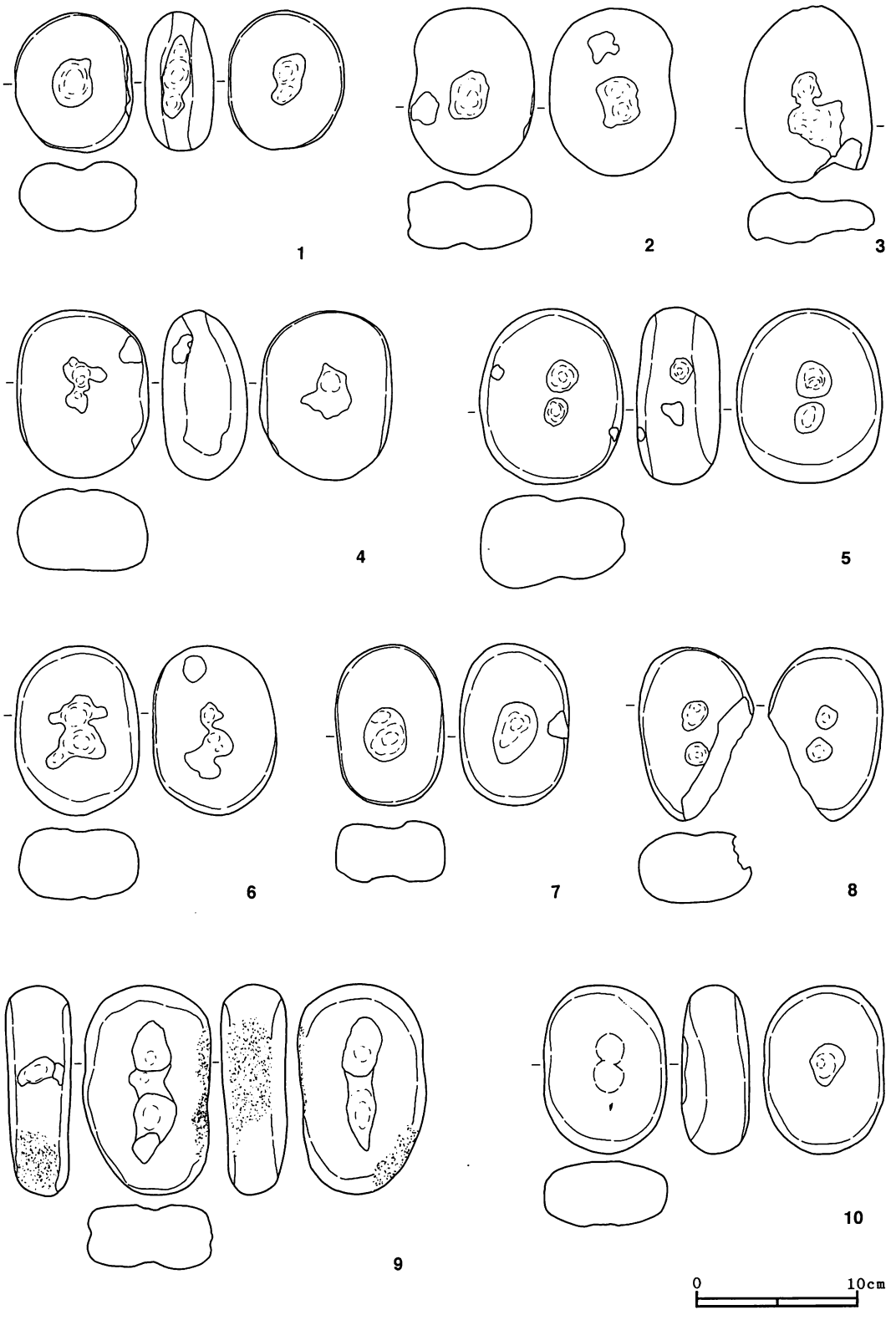
第61図　石器（2）



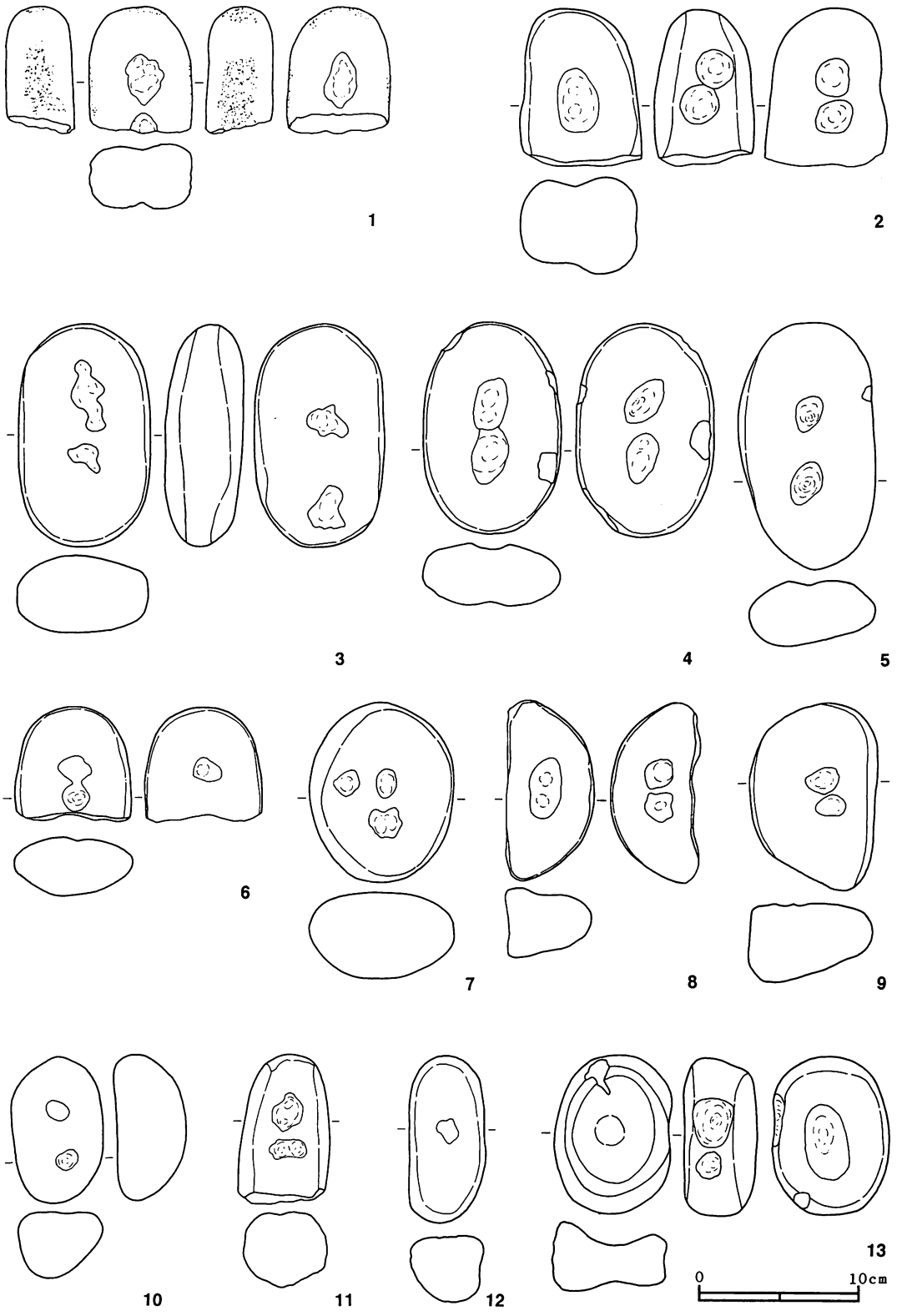
第62図　石器（3）



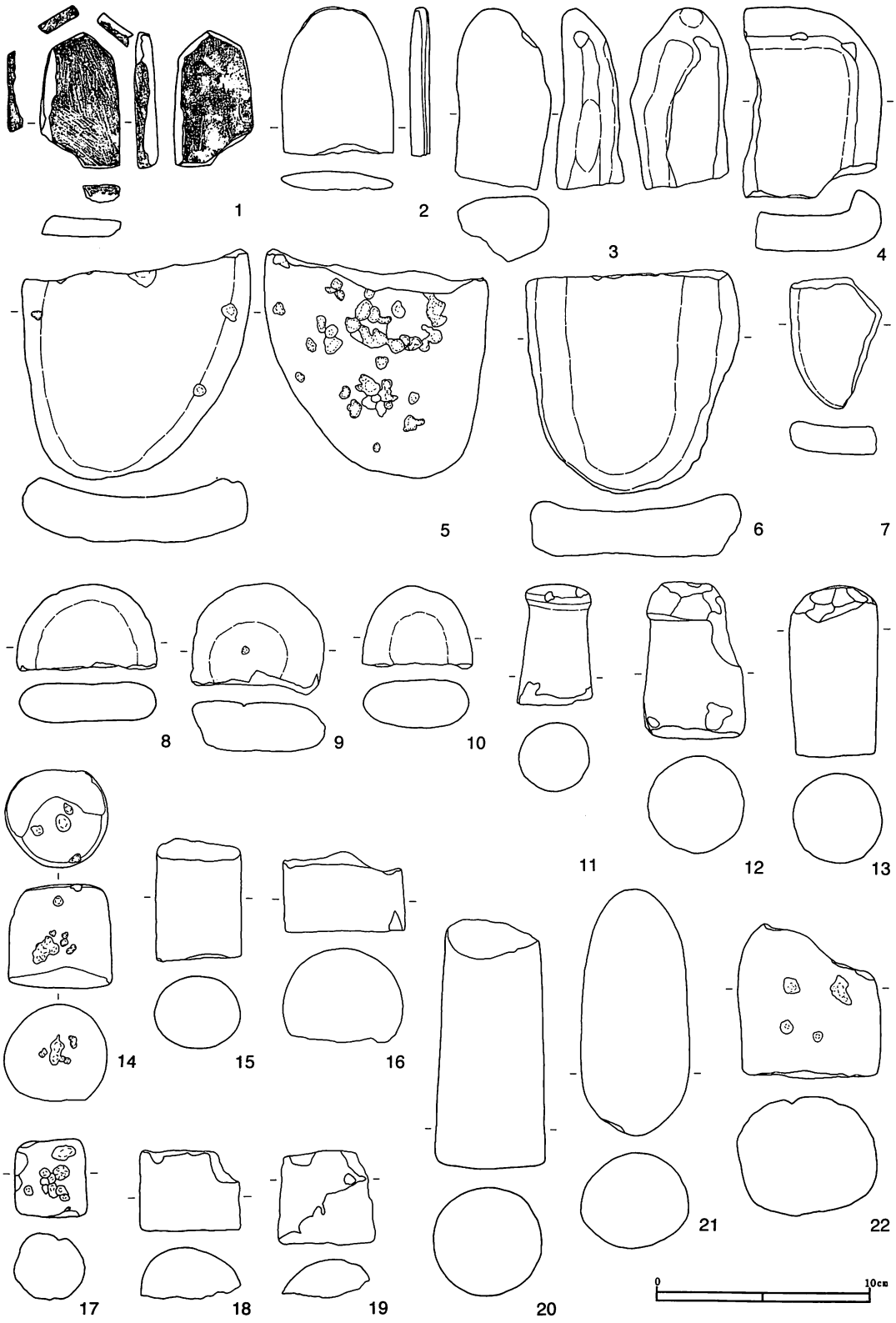
第63図　石器（4）



第64図　石器（5）



第65図　石器（6）



第66図　石器（7）

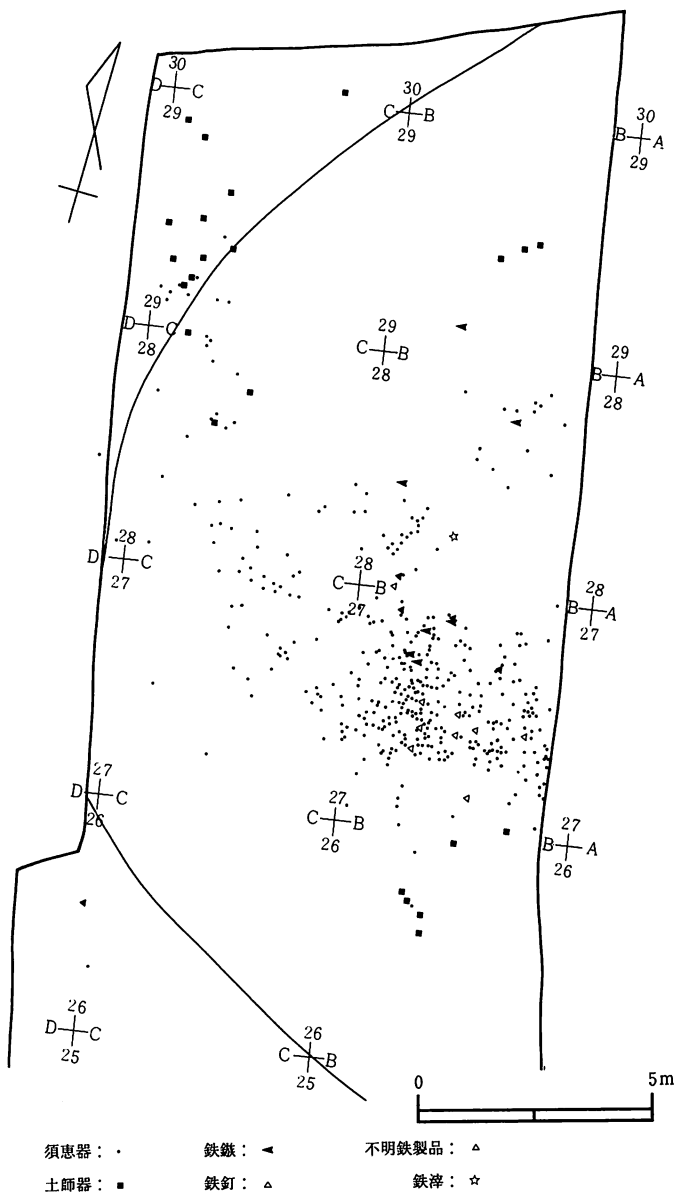
第３表　石器観察表

（単位cm、g）

図	No.	器種	位置	石材	遺存	最大長	最大幅	最大厚	重量	観　察
60	1	尖頭器	B-7	Ss	完	14.0	3.4	1.2	64.4	柳葉形 両面に連続的な押圧剥離による剥離痕が観察される器体の1/3を境に加工状況がやや粗くなり、これに伴い器幅・器厚の値も増加する
60	2	石鏃	1住	Ob	完	1.8	1.5	0.5	0.9	
60	3	石鏃	1住	Ob	欠	(1.8)	1.2	0.5	0.9	
60	4	石鏃	B-10	Ob	欠	(1.6)	1.4	0.6	1.2	
60	5	石鏃	B-27	Ob	完	1.7	1.4	0.3	0.6	
60	6	石鏃	B-4	Ob	欠	1.3	(0.9)	0.3	0.2	
60	7	石鏃	1住	Ob	欠	1.6	1.4	0.4	0.7	
		石鏃	表採	Ob	完	1.38	1.25	0.34	0.4	
		石鏃	表採	Ob	完	(1.18)	1.17	0.28	0.3	先端欠
		石鏃	表採	Ob	2/3	(1.3)	1.24	0.41	0.7	先端欠
		石鏃	表採	CH	一欠	(1.48)	1.61	0.34	(0.6)	先端欠
		石鏃	C-6	Ob	－	10.78	1.23	0.58	1.1	未製品 基部に細かい調整
		石鏃	表採	Ob	－	1.31	1.21	0.36	0.5	未製品 片側縁部・基部に細かい調整あり
60	8	石錐	B-27	Ob	完	2.5	1.4	0.7	1.4	
60	9	石匙	C-21	Ob	欠	(2.9)	1.6	0.7	3.0	
		石核	B-27	Ob	－	5.04	3.23	1.86	26	
		石核	B-27	Ob	－	5.25	2.65	2.45	34.6	
		石核	B-27	Ob	－	5.83	2.28	1.9	32.4	
60	10	小磨斧	1住	SE類	完	3.4	1.5	0.7	6.7	
60	11	小磨斧	3住	SE類	欠?	(3.5)	1.8	0.6	5.6	
60	12	不明	Z-6	Ap	一欠	3.6	4.3	2.0	40.0	全面よく研磨　装飾品か？
61	1	打斧	A-7	SA	一欠	17.0	11.2	2.6	620.0	表面に自然面を残す
61	2	打斧	B区5配	CL	一欠	14.7	7.7	(1.5)	(200.0)	両側括れ部は磨滅
61	3	打斧	3住	SA	2/3	(10.4)	5.8	2.6	(154.5)	表面に自然面を残す　両側括れ部は磨滅
61	4	打斧	A-10	HO	1/2	(9.6)	(6.1)	1.8	(115.5)	両側括れ部は磨滅
61	5	打斧	C-6	CL	2/3	(5.1)	3.7	(0.4)	(10.0)	括れ部に細かい剥離　小形か？
		打斧	一括	HO	完	12.8	7.4	1.8	200.0	両側括れ部は磨滅
61	6	打斧	B･C-4	CL	完	17.8	5.1	2.8	300.0	上半分の両側縁部は磨滅
61	7	打斧	表採	HO	一欠	22.3	8.1	2.9	(781.2)	本遺跡中最大　表面全体に自然面を残す　左側縁部は磨滅
61	8	打斧	A-5	SA	完	10.0	5.3	1.9	(110.0)	側縁部に細かい剥離
61	9	打斧	C-26	HO	完	11.1	5.2	2.2	195.0	両側縁部は磨滅　両面剥離不明瞭
61	10	打斧	A-10	SCL	1/2	(8.7)	5.3	2.1	(100.0)	上端欠　残存する両側縁部の上3/4をを敲き潰す
61	11	打斧	3住	CL	一欠	11.4	5.4	1.9	(119.3)	両面剥離不明瞭
61	12	打斧	B-26	CL	2/3	(7.2)	3.4	1.0	(25.0)	刃部欠　両面剥離不明瞭　両側縁部磨滅　小形品
61	13	打斧	Z-4	HO	1/2	(7.1)	5.4	1.5	(65.0)	頭部欠　表面剥離ほとんどなし　裏面下部磨滅　左側縁部磨滅
		打斧	表採	HO化CL	完	7.7	5.2	1.4	70.0	頭･刃部中央に深さ2～3mmの括れあり　両面剥離不明瞭
		打斧	一括	HO	一欠	(6.2)	2.4	1.0	(20.0)	11を小形化したような形を呈す　両面剥離不明瞭
		打斧	B-27	CL	1/2	(11.3)	(4.4)	(0.8)	(40.0)	刃部欠　側縁部に剥離を残すが両面剥離不明瞭 図示できず
		打斧？	一括	BA	1/4	(6.5)	(3.6)	(1.6)	(50.0)	打斧か磨斧の未製品　頭部にスス付着表面磨滅著しい
		打斧？	C-6	CL	1/4	6.8	4.8	0.6	20.0	打斧の一部と思われるが全面磨滅　図示できず
		打斧	B-26	HO	1/4	6.2	3.3	0.8	19.1	12と同じような小形品だが全面磨滅　図示できず
		打斧？	B-5	CL	1/4	(11.0)	5.2	1.0	57.8	打斧の一部と思われる　図示できず
61	14	磨斧	Z-6	An	1/3	(8.3)	(3.9)	(2.8)	(140.0)	刃部欠　断面隅丸方形　頭部に黒色付着物が幅約1cmで帯状に一巡する　全面よく研磨
	15	磨斧	1住	Gt	1/3	(10.0)	(6.1)	(3.9)	(412.7)	刃部欠　断面隅丸方形　全面よく研磨
	16	磨斧	Z-4	SA	2/3	(15.1)	(5.7)	(4.4)	(630.2)	刃部欠　断面楕円形　全面よく研磨
	17	敲石	Z-4	Sp	一欠	17.9	5.5	4.7	(781.1)	磨斧からの転用と考えられる　石材は三波川（群馬）の変成帯の石
62	1	丸石	A-9	Gt	一欠	4.3	4.3	4.0	(105.0)	全面研磨
62	2	丸石	Z-4	SA	一欠	5.8	5.1	4.9	(150.0)	全面研磨
62	3	丸石	B-9	Gr類？	一欠	5.9	5.6	4.5	(175.0)	全面研磨
62	4	丸石	Z-4	BA	完	5.4	3.6	2.9	85.0	全面研磨
62	5	丸石	1住	DA	1/2	(3.1)	(3.25)	(2.0)	(32.3)	緑色変成した（グリーンタフ地域）全面研磨
62	6	磨石	Z-4	PA	完	5.9	5.0	3.7	135.0	表面研磨顕著
62	7	磨石	Z-4	PA	完	8.6	8.1	6.0	535.0	全面研磨　赤色付着物
62	8	磨石	C-9	Gt	完	7.4	6.8	5.6	460.0	（第３系）表面及び下部の研磨顕著
62	9	磨石	B-28	PA	完	5.6	7.4	4.4	195.0	表面の研磨顕著　受熱　黒色付着物
62	10	磨石	Z-4	HPA	完	6.9	5.2	4.1	130.0	表面の研磨顕著
62	11	磨石	B-27	PA	一欠	7.2	6.5	3.1	(180.0)	表裏面研磨
62	12	磨石	C-27	PA	完	7.3	5.2	2.2	120.0	表面研磨顕著
62	13	磨石	C-6	PA	完	7.6	5.5	2.7	120.0	表裏面を研磨
62	14	磨石	B-3	SH	完	7.9	4.4	3.7	191.4	表面の研磨顕著　下部に敲打痕
62	15	磨石	B-26	PA	完	9.3	7.4	4.9	520.0	全面研磨　受熱
62	16	磨石	B-5	Gr類	1/2	(6.3)	(7.0)	(4.8)	(310.0)	表裏面研磨
62	17	磨石	C-26	PA	1/2	(6.2)	(7.8)	4.2	(275.0)	全面研磨
62	18	磨石	C-27	An	1/4	(6.1)	(6.2)	(2.1)	(95.0)	全面研磨
62	19	磨石	A-8	PA	1/2	(7.4)	(7.7)	(4.9)	(380.0)	少なくとも５面有す　全面研磨
62	20	磨石	3住	PA	一欠	11.2	5.4	5.4	(170.0)	表面の研磨顕著
62	21	磨石	B-29	BA	一欠	9.9	7.3	2.8	(280.0)	裏面ぼこぼこ
62	22	磨石	C-26	An	1/2	(5.0)	(9.7)	(4.4)	(295.0)	両面研磨　赤色付着物
62	23	磨石	A-15	Gt	1/2	(14.0)	(11.0)	(4.5)	(555.0)	表面研磨
62	24	磨石	C-27	PA	完	10.9	6.7	4.4	472.1	全面研磨
62	25	磨石	B区5配	PA	完	9.9	7.3	6.0	555.0	表面研磨

図	No.	器種	位置	石材	遺存	最大長	最大幅	最大厚	重量	観　察
62	26	磨石	1住C	PA	一欠	14.2	8.6	5.9	(1140.0)	表面の研磨顕著　受熱
63	1	磨石	C-13	PA	一欠	14.5	7.1	6.7	(1011.9)	全面研磨
63	2	磨石	1住D	PA	一欠	14.2	6.9	6.6	(1000.0)	全面研磨
63	3	磨石	3住	An	一欠	(22.4)	8.1	5.3	(1510.0)	表面の研磨顕著
63	4	磨石	B区5配	PA	1/3?	(6.0)	(5.7)	(5.7)	(275.0)	上端敲打痕
		磨石	B-5	SH	1/4	(4.8)	(8.9)	(7.0)	(335.0)	黒色付着物　図示できず
		磨石	Z-6	HD	1/3	(6.7)	(8.2)	(4.0)	(470.0)	図示できず
		磨石	B-8	DA	1/3	(4.7)	(8.8)	(6.3)	(400.0)	図示できず
		磨石	Z-6	An(古)	1/4	—	—	—	(75.9)	計測不能　図示できず
		磨石	B区5配	SA	1/4	—	—	—	(210.1)	計測不能　図示できず
63	5	凹石	B-27	PA	完	9.1	8.6	5.6	600.0	全面研磨　凹３面　受熱
		凹石	一括	PA	完	9.2	7.8	5.3	528.9	表裏面研磨　凹２面
63	6	凹石	B-7	An	2/3	(9.1)	9.1	4.5	(391.9)	全面研磨　凹２面
63	7	凹石	B-7	BA	1/2	(6.4)	(8.1)	(4.0)	(245.0)	両面研磨　凹２面　凹浅く敲打痕に近い
63	8	凹石	C-27	PA	完	10.4	9.3	4.6	590.0	全面研磨　凹２面
63	9	凹石	Z-5	PA	完	8.5	7.9	3.4	315.0	表裏面研磨　凹２面
63	10	凹石	A-8	PA	完	9.7	7.8	4.2	410.0	全面研磨　凹２面
63	11	凹石	C-27	PA	2/3	(6.1)	(8.1)	3.2	(200.0)	表裏面研磨　凹２面
63	12	凹石	3住	HPA	完	9.7	7.7	4.5	535.0	全面研磨　下端敲打痕　凹2面
63	13	凹石	B-26	An	1/2	(6.7)	(8.7)	(4.0)	(285.0)	裏面研磨顕著　凹２面　凹浅く敲打痕に近い
64	1	凹石	B-3	An	完	8.8	7.2	4.5	325.0	全面研磨　凹３面　側面の凹浅い
64	2	凹石	A-10	PA	完	10.5	8.0	4.2	515.0	表裏面研磨　凹２面
64	3	凹石	B-29	PA	1/2	(11.1)	8.1	(3.2)	(350.0)	裏面欠　全面研磨　（凹1面）
64	4	凹石	1住F	PA	完	10.6	8.4	5.3	710.0	全面研磨　凹２面　凹裏面の凹浅い
64	5	凹石	3住	PA	完	11.0	9.0	6.0	730.0	全面研磨　凹３面　受熱
64	6	凹石	1住H	PA	完	10.7	7.7	4.5	540.0	全面研磨　凹２面　裏面の凹浅い
64	7	凹石	Z-4	PA	完	10.1	7.0	4.0	420.0	全面研磨　凹２面
		凹石	表採	PA	1/2	(5.3)	7.2	4.0	(200.0)	表裏面研磨　（凹２面）
64	8	凹石	B区5配	PA	2/3	(11.2)	(7.1)	4.7	(445.0)	全面研磨　凹２面
64	9	凹石	C-8	An	一欠	13.2	8.2	4.0	(645.0)	表裏面研磨　凹３面　側面敲打痕
64	10	凹石	B区5配	PA	完	10.7	7.7	4.1	560.0	表裏面よく研磨　凹２面　裏面凹浅い
		凹石	表採	Gr類	一欠	10.7	7.0	5.0	(600.0)	表裏面研磨　凹３面　裏・側面凹浅い
65	1	凹石	B区5配	Di	1/2	(7.95)	6.5	4.1	(375.6)	全面研磨　凹２面　側面敲打痕
65	2	凹石	C-28	PA	1/2	(9.9)	(7.7)	(6.2)	(600.0)	全面研磨　凹４面　受熱
65	3	凹石	A-8	PA	完	14.0	8.3	4.9	980.0	表裏面よく研磨　凹２面　凹浅い
65	4	凹石	3住	PA	完	13.2	9.9	3.9	678.0	全面研磨　凹２面
		凹石	B区	PA	完	12.5	7.6	5.0	560.0	表裏面研磨　凹４面
65	5	凹石	3住	An	完	15.7	8.7	4.1	790.0	表裏面研磨　凹１面
		凹石	表採	An	1/2	(8.9)	7.6	3.0	(295.0)	全面研磨　凹１面
65	6	凹石	B-26	PA	1/2	(7.2)	(7.5)	3.7	(260.0)	表裏面研磨　凹２面
65	7	凹石	A-9	Gr	完	11.5	5.5	9.1	800.0	表裏面研磨　凹２面　凹浅い
65	8	凹石	A-8	An	2/3	11.3	5.1	4.2	340.0	表裏面研磨　凹２面
65	9	凹石	3住	PA	完	11.9	8.0	5.0	620.0	全面研磨　凹１面　受熱
65	10	凹石	1住	PA	完	9.3	5.8	4.3	360.0	全面研磨　凹１面　受熱
		凹石	一括	PA	完	11.7	7.6	6.9	720.7	表面よく研磨　凹１面　赤色付着物　受熱
		凹石	一括	PA	完	10.1	8.6	6.3	688.6	表面よく研磨　凹１面　赤色付着物
65	11	凹石	C-28	An	欠	9.5	5.7	4.8	390.0	表面研磨　凹１面
65	12	凹石	B-5	Di	完	10.6	4.9	4.3	340.0	表面研磨顕著　凹１面　凹浅い
65	13	凹石	B区5配	PA	完	10.0	7.4	4.5	400.0	裏面研磨　表面石皿状裏面凹
66	1	砥石	3住	Tu	一欠	8.6	(5.0)	1.5	(75.0)	平面五角形　全面研磨面に使用　裏面以外は削痕顕著
66	2	砥石	A-10	SA	1/2	(9.3)	7.1	1.2	(108.2)	両面研磨に使用　裏面に敲打痕あり
66	3	砥石	3住	PA	1/2	(23.0)	12.3	8.3	2980.0	全面研磨に使用　受熱
		砥石	一括	HO	1/2	(4.9)	5.6	(1.5)	(45.0)	平面楕円形　表面研磨に使用
66	4	石皿	14配	PA	1/4	(24.0)	(17.4)	(7.7)	(3630.0)	受熱　全面研磨　縁断面三角形　深さ約4.5cmの皿状裏面に凹孔有り
66	5	石皿	B-27	PA	1/2	(29.0)	(28.6)	(8.1)	(8200.0)	全面研磨　表面に凹孔　皿状を呈す　裏面多孔
66	6	石皿	14配	PA	1/2	(27.8)	27.9	7.7	(7900.0)	表面のみ研磨　皿状を呈す
66	7	石皿	14配	PA	1/4	(16.5)	(11.4)	(4.1)	(850.0)	受熱　全面研磨　表面は僅かに皿状を呈す
66	8	石皿	C-12	BA	1/2	(10.9)	17.4	4.8	(1310.0)	全面研磨　表裏面共に若干くぼむ
66	9	石皿	C-15	PA	2/3	(14.0)	(16.6)	(6.2)	(2000.0)	全面研磨　表面には他面より著しい平らな磨面
66	10	石皿	A-9	PA	1/2	(10.4)	(14.1)	6.1	(1150.0)	全面研磨　表面には他面より著しい平らな磨面を有す
		石皿	一括	HPA	1/2	(23.2)	(32.0)	(14.3)	(14000.0)	全面研磨　側面一部剥離　明瞭な皿状を呈す
		石皿	一括	PA	一欠	(26.8)	(20.5)	(8.5)	(6680.0)	全面研磨　表面下部に剥離痕あり　皿状を呈す
		多孔石	表採	PA	下欠	(21.6)	(19.5)	(15.6)	(8380.0)	自然石を使用　断面隅丸菱形　凹孔は２箇所に集中　受熱
66	11	石棒	1住炉	PA	一欠	(15.1)	(9.4)	(8.6)	(1580.0)	断面円形　頭に稜をもつ
66	12	石棒	B区5配①	PA	一欠	(19.6)	(12.8)	(12.1)	(3720.0)	断面円形　頭部に稜をもつ　頭部剥離が著しい
66	13	石棒	B区4配	DA	一欠	(21.4)	11.2	11.3	(3920.0)	断面円形　頭部剥離著しい　下部も若干研磨
66	14	石棒	1住B	HA	一欠	(12.9)	12.9	12.1	(2485.0)	両端・側面研磨し凹あり　石棒中央部
66	15	石棒	1住A	PA	両端欠	(15.2)	(10.75)	(9.2)	(2760.0)	断面楕円形　石棒中央部
66	16	石棒	D-27	DA	頭欠	(10.2)	(15.75)	(12.0)	(2960.0)	断面円形?　石棒中央部
66	17	石棒	B-27	PA	両端欠	(9.8)	(9.1)	(8.5)	(1000.0)	断面隅丸方形　側面に三箇所複数の凹　石棒中央部
66	18	石棒	B-3	PA	1/4	(10.0)	(12.7)	(6.5)	(1200.0)	断面円形?　石棒中央部
66	19	石棒	C-6	DA	1/4	(11.8)	(12.2)	(5.0)	(1040.0)	断面円形?　受熱　小片のため図示不能
66	20	石棒	B区	PA	頭欠	(30.8)	(14.05)	(13.6)	(7720.0)	断面楕円形　B区4配を切る撹乱より出土
66	21	石棒	16配	Gr類	完	31.0	13.2	12.0	7385.0	断面楕円形　16配の一部（両端丸）
66	22	石棒	B区5配②	PA	両端欠	(19.4)	(18.0)	(14.8)	(8060.0)	断面歪　側面に凹　受熱
		石棒	撹乱	PA	両端欠	(14.4)	(12.8)	(12.0)	(2985.0)	断面隅丸方形　側面に凹　石棒の中央部
		石棒	B-28	An	1/4	(8.7)	(5.5)	(1.4)	(85.6)	断面円形?　小片のため図示不能
		石棒	一括	HD	両端欠	(25.0)	(13.3)	(10.4)	(4310.0)	断面楕円形　側面上下に複数の凹　受熱　石棒中央部

第67図　1号古墳全体図（S=1/160）



第68図　1号古墳遺物分布図

第2節　古墳時代

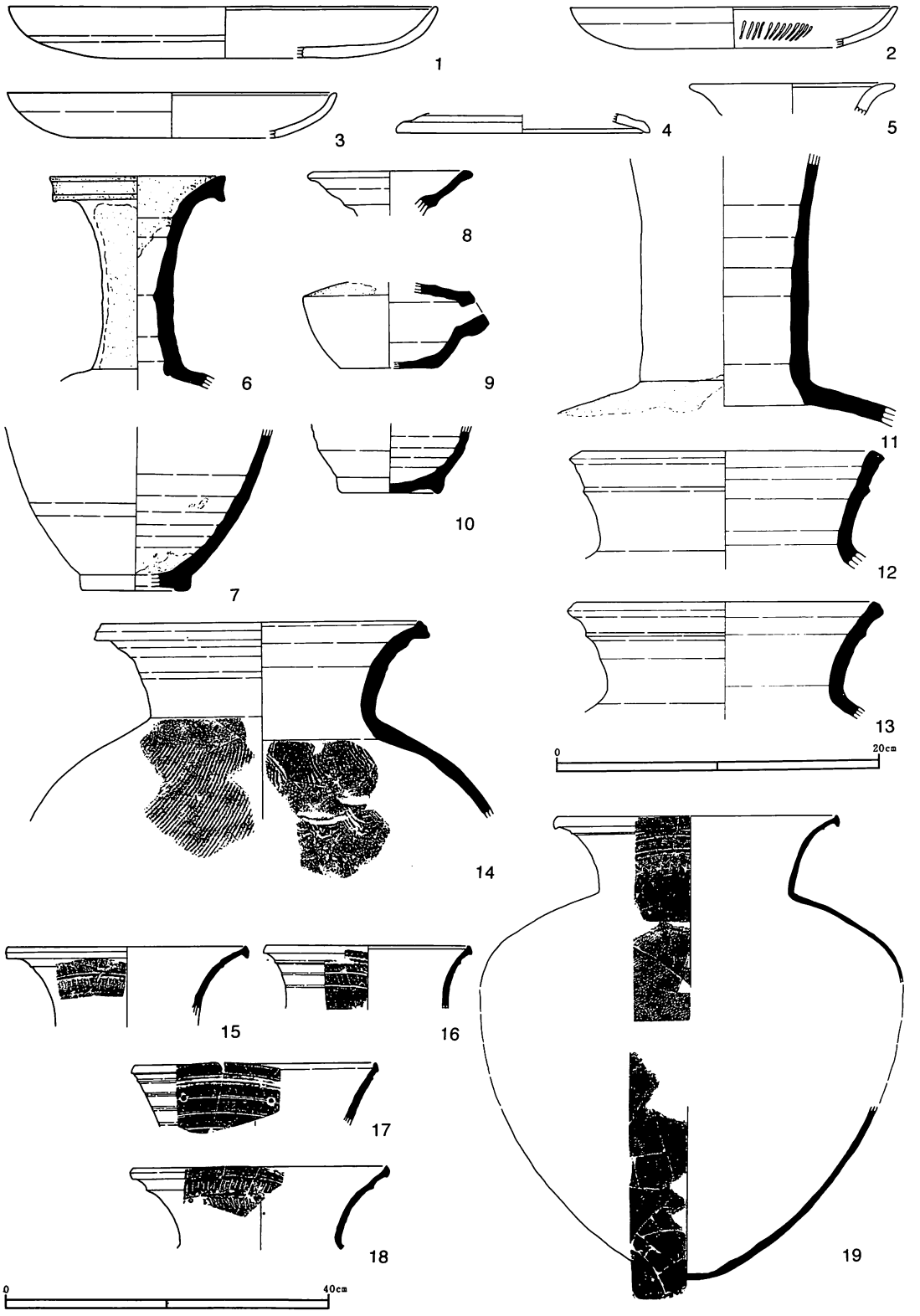
1.1号古墳（第67図）

概要：本墳は調査区の北端、B・C－26～30に位置する。調査前は梅林であり、ほぼ平坦に整地されていたため古墳の存在は周囲に知られていなかった。そこで、遺構の有無を確認するためにトレンチを設定し、掘り下げをおこなったところ多量の中～巨礫に伴って、須恵器片と鉄鏃1点が出土した。そのため、古墳の存在を想定し、ベルトを残した上で順次掘り下げをおこなった。その結果、須恵器を中心とする遺物とともに古墳を検出するに至った。なお、本墳は東側約半分が調査区外に拡がっているため、墳丘規模を明確にすることはできなかった。また、西側の一部分は、現存する畑作のための石垣に壊されており、墳丘上部は人為的な削平を受けている。

墳丘：調査の結果、墳丘規模は直径22.8mと推定される。周溝は認められない。葺石は、本墳南端、B・C－26・27で一部残存している。また、北西側の縁辺部で墳丘の範囲を示す縁石が巡っているのが確認された。

主体部：破壊が著しく、明確にすることは困難であったが、古墳のほぼ中心部と思われる位置において、側壁および奥壁の一部と思われる礫が並んでいるのを確認した。石室床面に礫床はみられない。また、前庭部にも礫は、ほとんど認められない。入り口はほぼ南を向く。

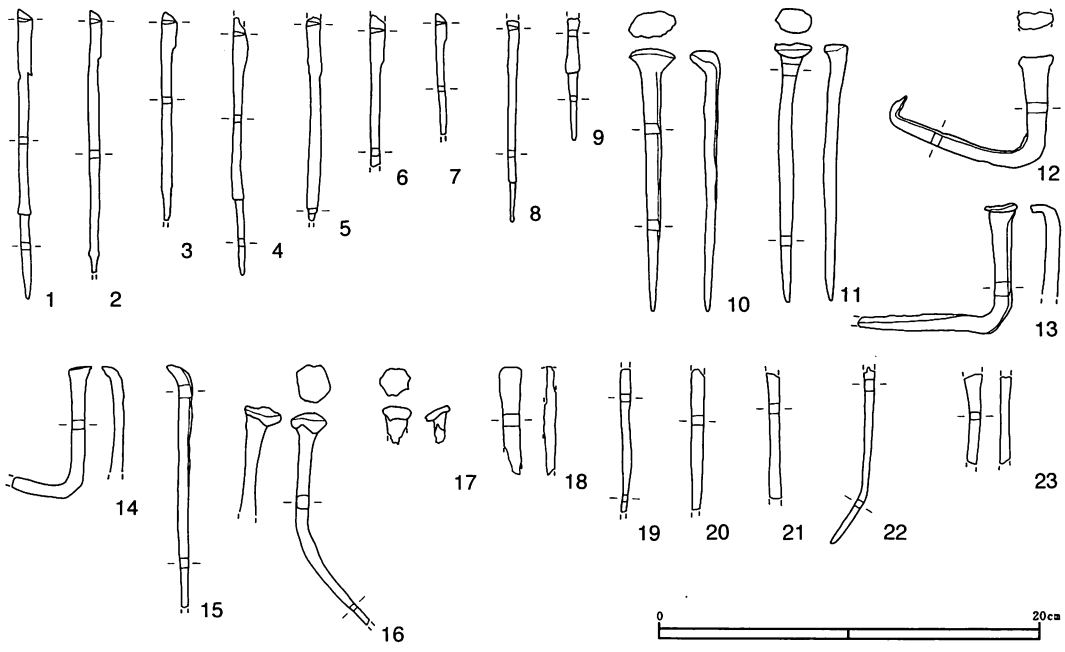
遺物とその出土状況（第68～70図）：出土遺物は須恵器が大部分を占め、他に土師器、鉄製品等がある。須恵器は石室前庭部より多く出土した。土師器は、古墳の推定範囲内からはほとんど出土せず、C－29で若干の集中が認められた。須恵器、土師器ともにほとんどが破片である。鉄製品は鉄釘が9点、鉄鏃が9点、鉄滓等が出土し、その内、鉄釘は石室入口付近よりまとまっ



第69図　1号古墳出土土師器・須恵器

第４表　１号古墳出土土師器・須恵器観察表

図	No.	器種	部位	法量(cm)	胎土	色調	焼成	形態・特徴・その他
69	1	土師器盤状坏	口縁〜体部	口径 27	やや粗い 石英、砂粒	黄橙色	良	口縁部は緩やかに立ち上がり口唇部丸い。体部から底部にかけて手持ちヘラ削り。内外面とも磨耗が激しいが、内面に暗文の痕跡がある。
69	2	土師器盤状坏	口縁〜体部	口径20.6	粗い、砂粒、雲母	暗黄橙色	良	口縁部は体部の上部で緩やかな段をもち口唇部がやや外反する。端部は面取り。体部は内外面とも磨耗が激しい。
69	3	土師器盤状坏	口縁〜体部	口径20.4	密、砂粒、雲母、長石	橙色	良	口縁部は緩やかに内湾し、口縁端部は面取り。体部の外面は手持ちヘラ削り、内面には暗文が施される。
69	4	土師器蓋	口縁	口径16	粗い、砂粒が多い、長石 赤色粒子	橙色	良	口縁部つまみ出し。内面に沈線が1 条巡る。
69	5	土師器壺	口縁	口径13	粗い、赤褐色粒子、砂粒	薄黄橙色	不良	口縁部は大きく外反し端部は丸い。磨耗が激しく調整は不明。
69	6	須恵器長頸壺	口縁〜肩部	口径　11 頸部高 12	密、黒色粒子を含む	黄灰色	良	頸部から外反する口縁を持つ。口縁端部は横撫で調整にて上下に引き延ばす。内面に巻き上げ痕が残る。内面と外面一部に自然釉が付着する。
69	7	須恵器長頸壺	体部〜底部	底径 6.5	密、黒色粒子を含む	黄灰色	やや良	付け高台。高台部の内側と体部下端は右方向の回転ヘラ削り。内外面の一部に自然釉が付着。
69	8	須恵器ﾊｿｳ	口縁	口径10.5	密、黒色粒子 砂粒を含む	灰色	良	頸端部で段をなしてラッパ状に外反する。口縁端部は平らな面をもつ。
69	9	須恵器ﾊｿｳ	体部	最大径10.5 底部 6.2	密、黒色粒子 砂粒を含む	黄灰色	良	底部は薄い平底、肩部はくの字状にはる。注口部は粘土塊貼り付け後穿孔。体部下端右方向の回転ヘラ削り。肩部から注口部にかけて自然釉付着。
69	10	須恵器長頸壺	体部〜底部	底径 6.9	密、黒色・白色粒子と砂粒を含む	青灰色	良	付け高台。体部は球形で底部の中央と高台の高さが同じ。体部下端は右方向の回転ヘラ削り。
69	11	須恵器長頸壺	頸部〜肩部	底径6.2	密、黒色粒子を多く含む	明灰色	良	頸部は粘土紐巻き上げ成形で、内面に歪みの痕が残る。肩部外面に自然釉付着。
69	12	須恵器甕	口縁〜頸部	口径19.6	密、黒色粒子	黒灰色	良	頸部から直線的に立ち上がる口縁部をもつ。途中に突帯が1 条めぐる。口唇部は面取り調整後、端部をつまみ出し。口縁から内面に自然釉付着。
69	13	須恵器甕	口縁	口径19.8	密、黒色粒子が多い	黒灰色	良	頸部からやや外反ぎみに立ち上がる口縁部をもつ。途中に突帯が1 条めぐる。口唇部は面取り調整後、端部をつまみ出し。内外面自然釉付着。
69	14	須恵器甕	口縁〜肩部	口径21	密、砂粒	青灰色	良	外反して立ち上がる口縁部をもつ。口唇部は断面三角形を呈する。体部の外面には右から左へ傾斜する叩き目、内面に同心円状叩き目がある。
69	15	須恵器大甕	口縁	口径45.4	密、黒色粒子	青灰色	良	外反して立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部上下に引き延ばしている。頸部に1条の突帯を挟んで波状文あり。
69	16	須恵器大甕	口縁	口径39.3	密、黒色粒子 砂粒	青灰色	良	やや外反する口縁の端部は上下に引き延ばしている。頸部には突帯1条、沈線2条、その間に櫛状工具による刺突文がある。
69	17	須恵器大甕	口縁	口径45.8	密、白色・黒色粒子	黄灰色	やや良	直線的に立ち上がり、口縁端部は上下に引き延ばし。頸部には突帯1条、沈線3条が巡り、その間に櫛状工具による刺突文が施される。円形貼付文。
69	18	須恵器大甕	口縁	口径48.5	密、黒色粒子	灰色	良	外反して立ち上がり、口縁端部は面取りされ方形を呈する。頸部に突帯1条が巡り、それを挟んで波状文が施される。円形貼付文あり。
69	19	須恵器大甕	口縁〜底部	口径52 器高 81 最大幅81	密	青灰色	良	外反して立ち上がり。口縁端部は上下に肥大する。頸部に突帯を1条巡らせ、上部に1 、下部に2条の波状文を施す。外面叩き目あり。

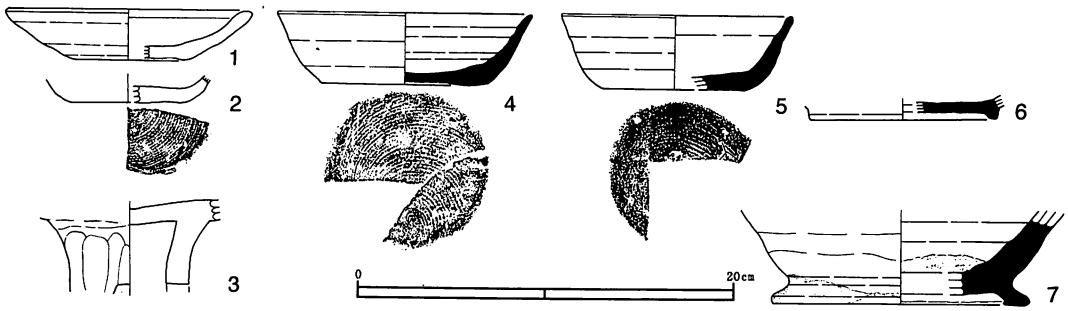


第70図　1号古墳出土鉄製品

第5表　1号古墳出土鉄製品観察表　（単位cm、g）

図	No.	種別	形態	長さ	幅	厚さ	重量	残存
70	1	鏃	腹抉片刃箭式	15.6	0.8	0.3	7.9	ほぼ完
70	2	鏃	片関片刃箭式	(13.3)	0.7	0.3	(11.4)	茎部端欠
70	3	鏃	片関片刃箭式	(10.9)	0.8	0.3	(12.0)	茎部端欠
70	4	鏃	片関片刃箭式	13.5	0.9	0.4	(10.5)	完
70	5	鏃	片関片刃箭式	(10.8)	0.8	0.4	(8.8)	両端欠
70	6	鏃	片関片刃箭式	(7.9)	0.8	0.3	(7.3)	両端欠
70	7	鏃	片関片刃箭式	(6.4)	0.7	0.4	(3.2)	下半欠
70	8	鏃	不明	10.5	—	—	(9.1)	鏃身部端欠
70	9	鏃	不明	(6.4)	—	—	(4.4)	上半欠
70	10	釘	角	13.8	1.0	0.7	30.0	完
70	11	釘	角	13.4	1.1	0.8	31.7	完
70	12	釘	角	16.3	1.5	0.8	29.6	ほぼ完
70	13	釘	角	(14.6)	1.1	0.8	(32.9)	先端欠
70	14	釘	角	(11.4)	0.8	0.5	(16.7)	先端欠
70	15	釘	角	(12.7)	0.9	0.8	(20.7)	先端欠
70	16	釘	角	(12.2)	1.0	0.7	(24.3)	先端欠
70	17	釘	角	(2.0)	1.0	0.7	(3.3)	頭部のみ
70	18	釘	角	(5.7)	1.2	0.7	(7.1)	欠
70	19	不明		(7.4)	—	—	(4.5)	両端欠
70	20	不明		(7.4)	1.0	0.8	(11.3)	両端欠
70	21	不明		(6.5)	0.8	0.8	(6.5)	欠
70	22	不明		(9.6)	1.0	0.7	(10.5)	頭部欠
70	23	不明		(4.7)	1.0	0.6	(3.9)	両端欠
		不明		(5.6)	0.7	0.7	5.3	欠
		鉄滓		—	—	—	257.2	4片

て出土した。鉄鏃は石列の途切れる南側の石室床面で4点が出土した。これらの遺物の内、図示できるものは須恵器14、土師器5、鉄鏃9、釘4である。それらには実測図と観察表（第4・5表）を付した。鉄製品観察表中、鉄鏃の幅、厚さはそれぞれ鏃身部のものである。



第71図　その他の出土遺物

第６表　その他の出土遺物観察表

図	No.	器種	部位	法量（cm）	胎土	色調	焼成	形態・特徴・その他
71	1	土師器皿	口縁 \ 底部	口径13 底径6	粗い、赤褐色粒子、雲母、砂粒	暗黄橙色	やや良	口縁部は緩やかに内湾気味に立ち上がる。口縁端部は面取り。底部は回転糸きり。内外面とも磨耗が激しい。
71	2	土師器盤状坏	底部	底径６	粗い、石英、赤褐色粒子、砂粒	暗黄橙色	やや良	底部は回転糸きり。
71	3	土師器高坏	脚部		密、砂粒、白色粒子	橙色	良	脚部と坏部の接合部。脚部には四方に方形の透かしがある。
71	4	須恵器坏	口縁 \ 底部	口径13.4 底径 8.6 器高 3.5	やや粗い、砂粒、白色粒子長石	暗灰色	良	直線的に立ち上がる口縁をもつ。底部は回転糸きり後外周をヘラ削り。ロクロ成形。内外面に火たすき痕あり。
71	5	須恵器坏	口縁 \ 底部	口縁 12.3 底径 7.2 器高 3.9	やや粗い、砂粒、白色粒子長石、石英	青灰色	良	直線的立ち上がり口縁端部でやや外反する。底部は回転糸きり後外周をヘラ削り。ロクロ成形。外面に火たすき痕あり。
71	6	須恵器坏	底部	底径9.9	密、黒色粒子砂粒	明灰色	良	付け高台。断面は方形。底部は回転ヘラ削りで高台部はナデ調整が行われている。
71	7	須恵器甕	底部	底径13.5	密、黒色粒子	灰色	良	八の字状に開く高台をもつ。付け高台。内外面に緑釉が付着。

第３節　その他の出土遺物（第71図）

奈良・平安時代、中世の時期の遺物が７点出土している。遺構に伴うものはない。１・２は中世のものであり、１はＢ区、２はＢ－８より出土した。３はB-25より出土した７世紀代の土師器高坏の脚部である。４は奈良時代、５・６は平安時代の須恵器坏である。いずれもＡ区より出土している。７はＢ区より出土した須恵器甕の底部である。（第６表）

図版１

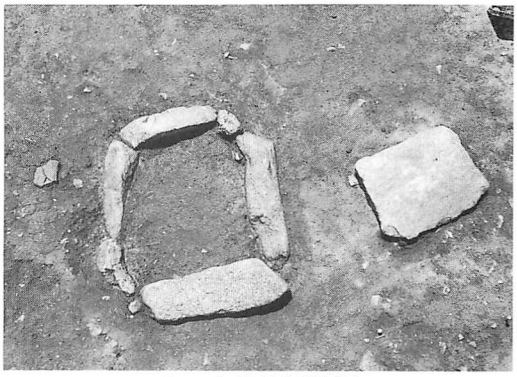
１．１号住居跡

２．１号住居跡炉

３．１号住居跡石棒Ａ

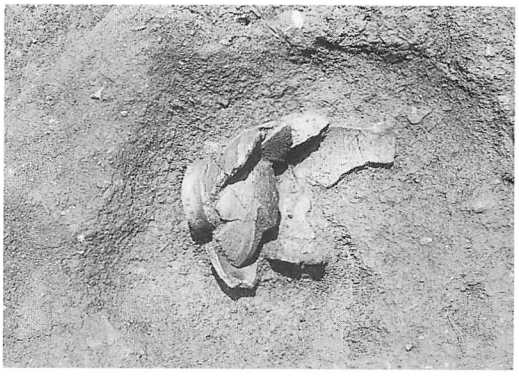
４．１号住居跡石棒Ｂ

５．２号住居跡



６．２号住居跡炉

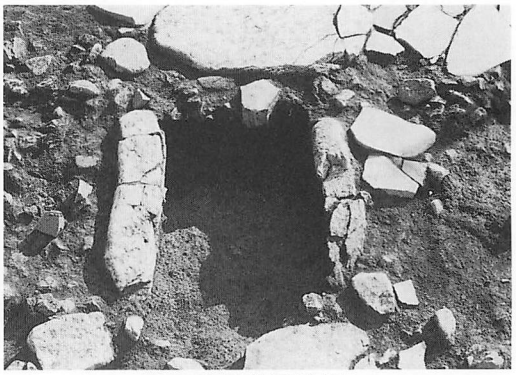
７．２号住居跡土器出土状況（1）



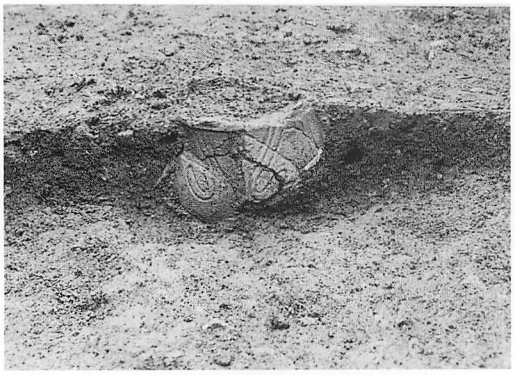
８．２号住居跡土器出土状況（2）

図版 2

1．3 号住居跡



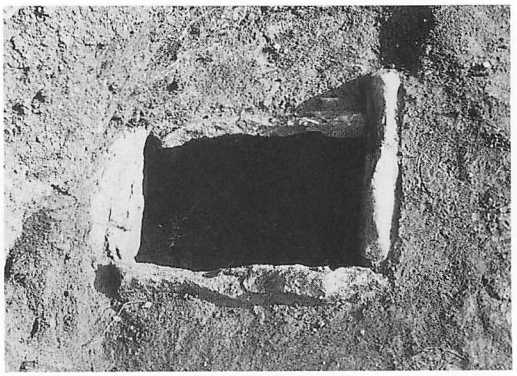
2．3 号住居跡炉 1



3．3 号住居跡炉 1 埋設土器

4．3 号住居跡炉 2

5．4 号住居跡



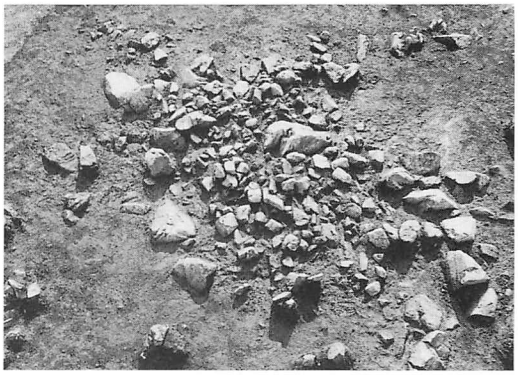
6．4 号住居跡炉

7．4 号住居跡埋甕

8．2 号配石

図版 3

1． 3 号配石



2． 4 号配石

3． 4 号配石土坑

4． 5 号配石

5． 5 号配石土坑

6． 6 号配石

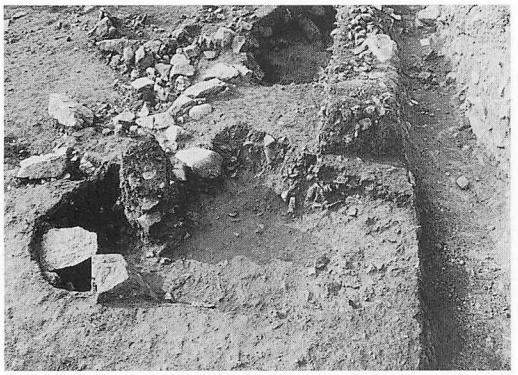
7． 6 号配石土坑

8． 8 号配石

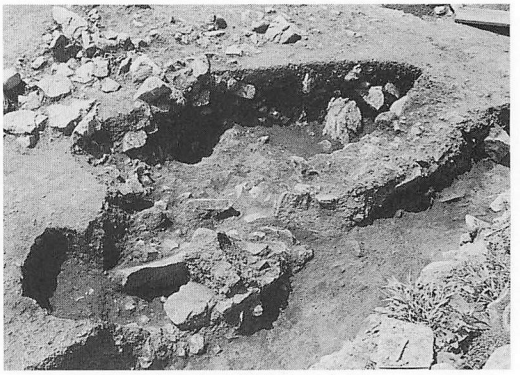
図版4

1．9号配石

2．10号配石

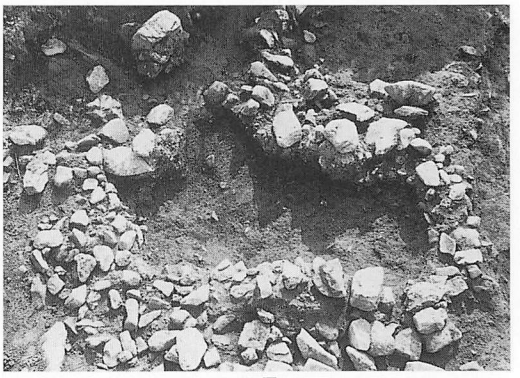


3．10号配石A土坑



4．10号配石B土坑

5．12号配石



6．13号配石

7．14号配石

8．14号配石土偶出土状況

図版５

１．15号配石

２．16号配石

３．17号配石

４．19号配石

５．Ｂ区４号配石

６．Ｂ区４号配石下部

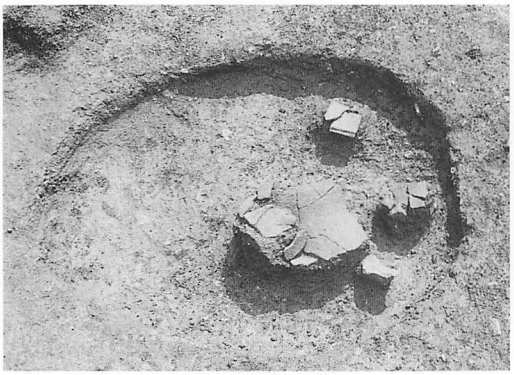
７．Ｂ区５号配石

８．Ｂ区５号配石下部

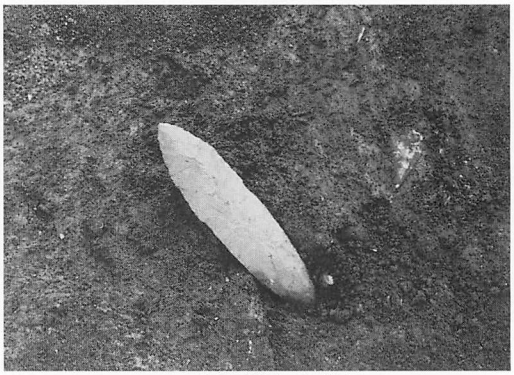
図版 6

1．B区５号配石石棒①

2．B区５号配石石棒②

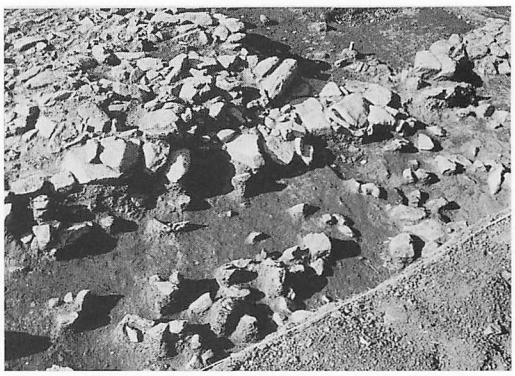


3．１号土坑



4．尖頭器出土状況

5．１号古墳

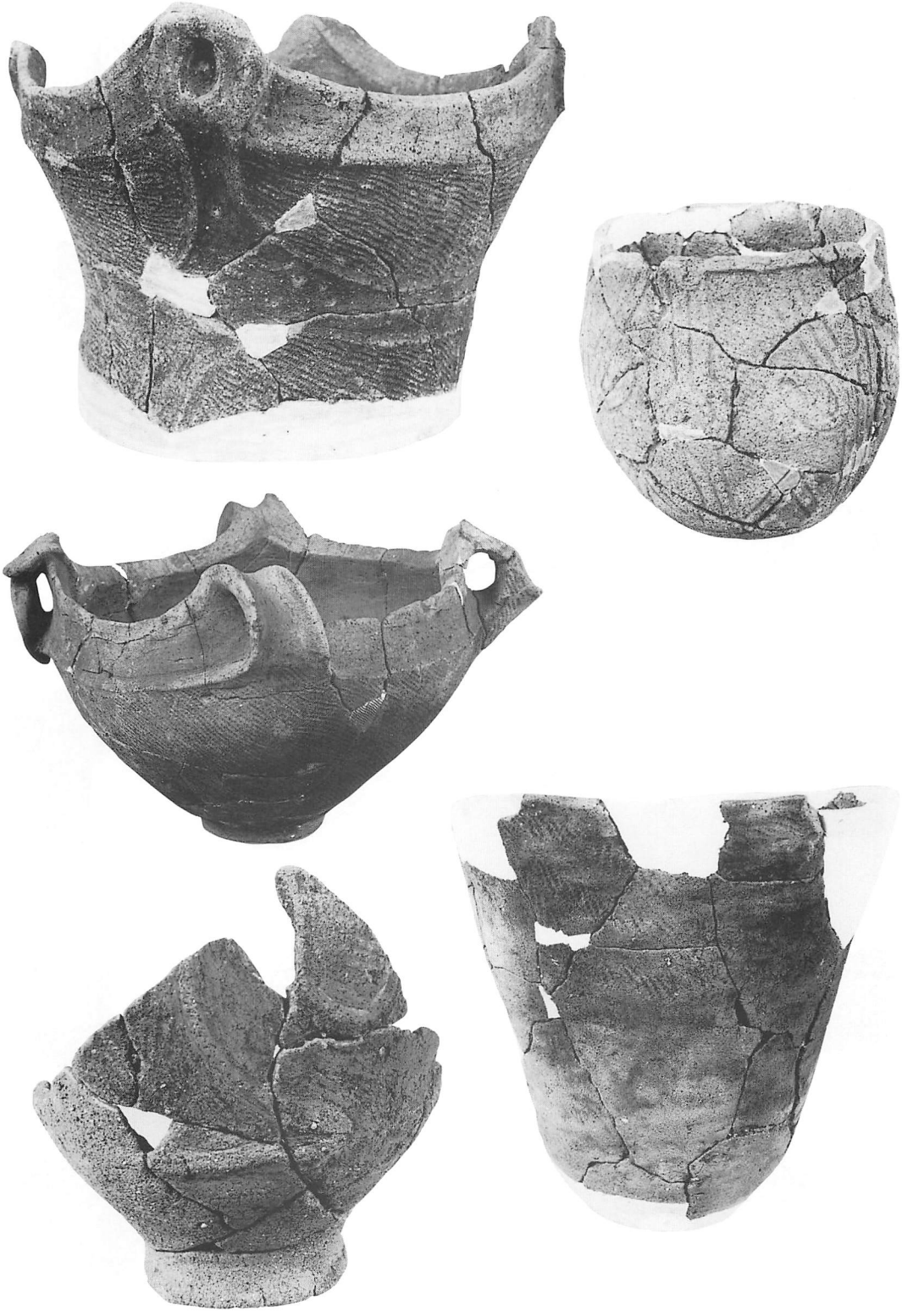


6．１号古墳主体部

7．１号古墳鉄釘出土状況

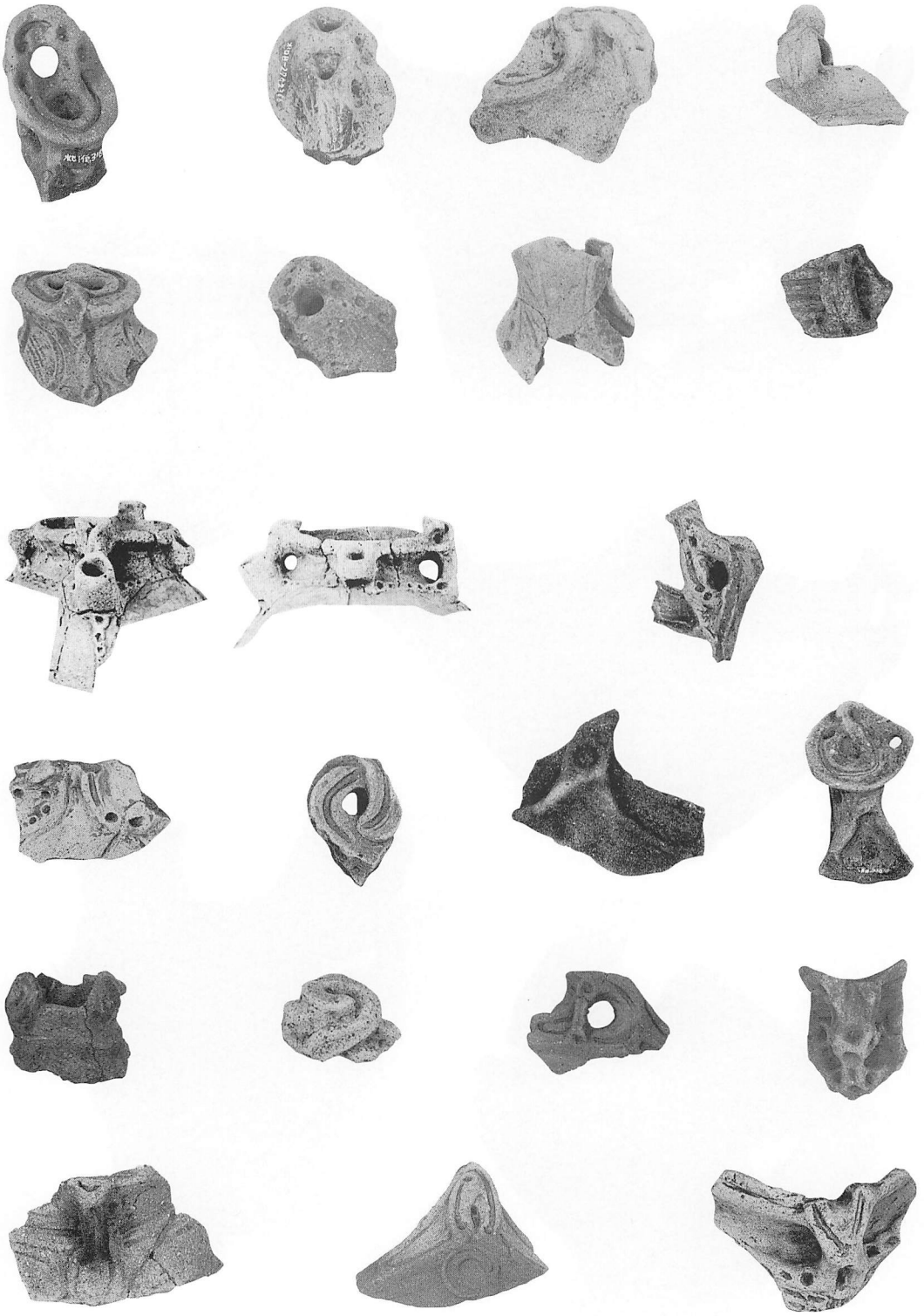
8．１号古墳鉄製品出土状況

図版 7



住居跡出土土器

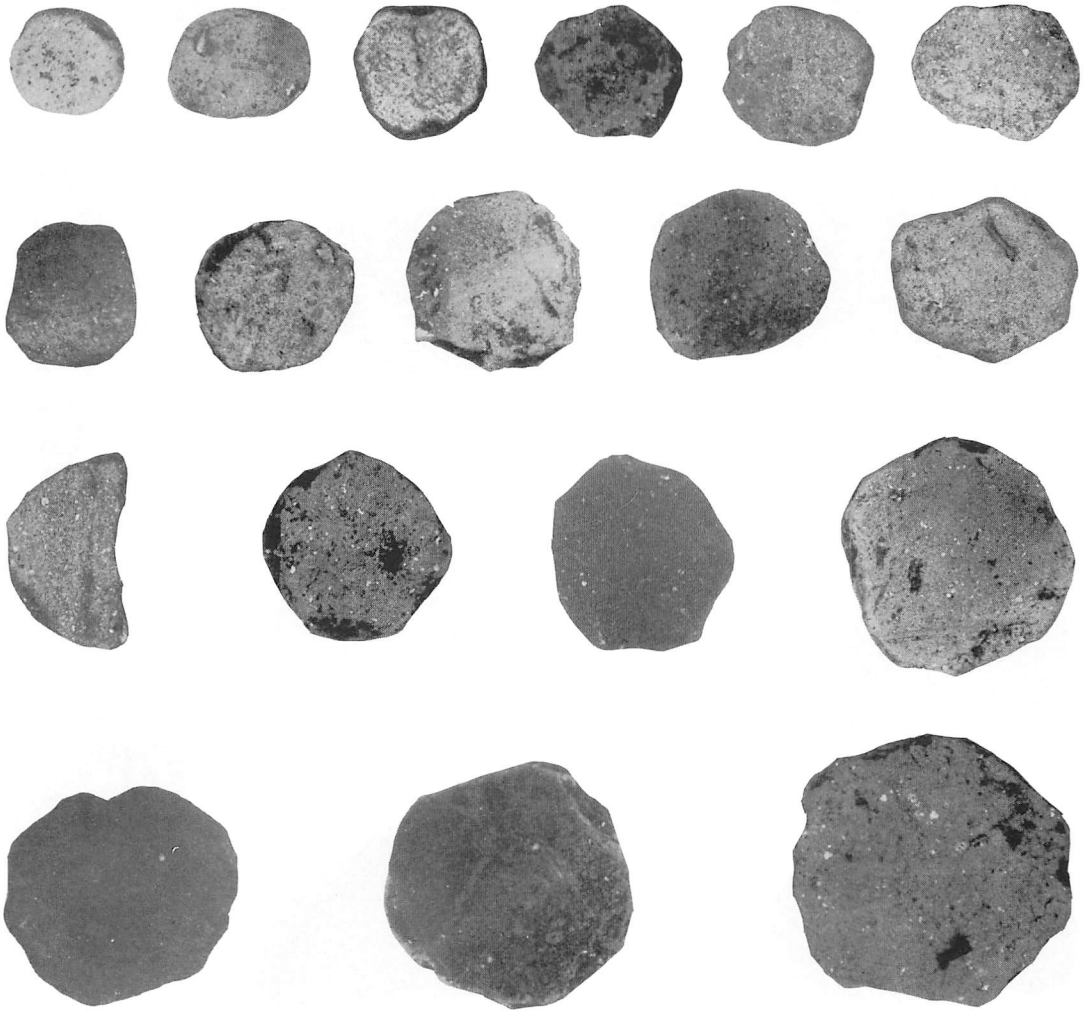
図版 8



把手

図版 9

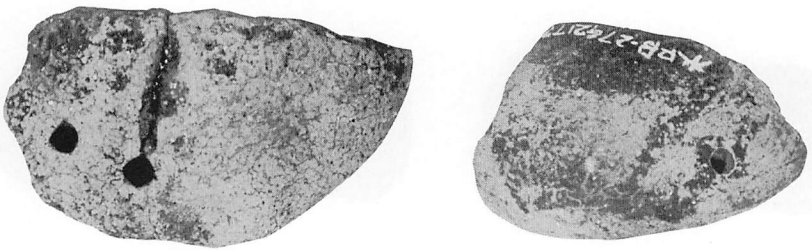
1．土偶



2．土製円盤

図版10

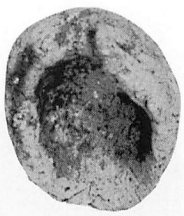
1．土製耳飾り



2．蓋

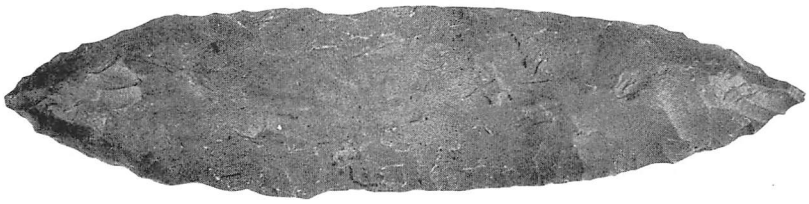
3．垂飾

5．ミニチュア土器

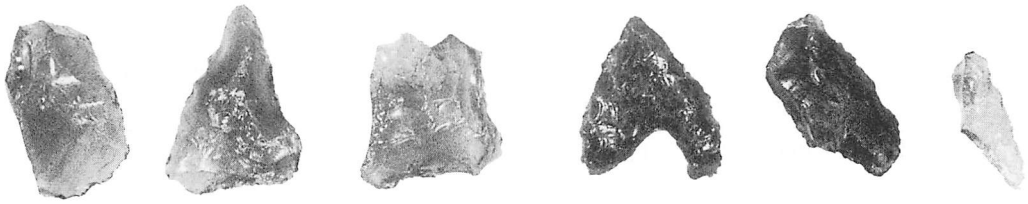


4．不明土製品

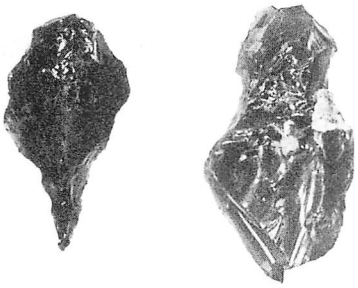
図版11



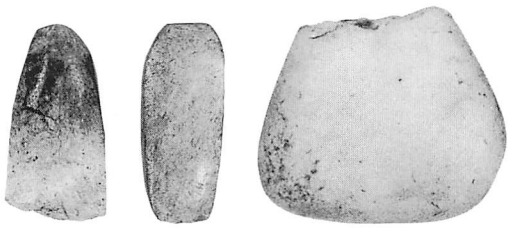
1．尖頭器



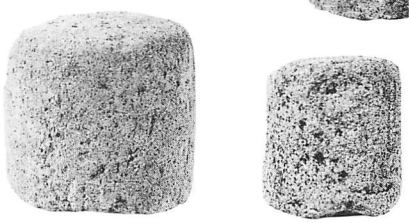
2．石鏃



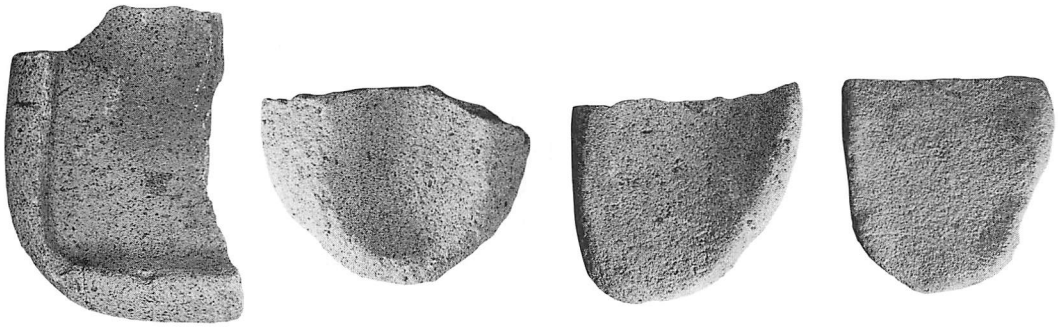
3．石錐・石匙



4．小形磨製石斧・不明石製品



5．石棒



6．石皿

水口遺跡報告書概要

フリガナ		ミズクチイセキ
書名		水口遺跡
副題		一般県道鴈宿中道線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ		山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第91集
著者名		今福利恵・田口明子
発行者		山梨県教育委員会　山梨県土木部
編集機関		山梨県埋蔵文化財センター
住所・電話		〒400-15　山梨県東八代郡中道町下曽根923　TEL　0552-66-3016
印刷所		有限会社　新星堂印刷
印刷日・発行日		1994（平成6）年3月22日・3月30日
遺跡概要	遺跡所在地	山梨県東八代郡境川村藤垈728番地外
	1/25000地図名・位置	精進・北緯35° 34′ 55″　東経138° 37′ 23″
	主要な時代	縄文時代中・後・晩期、古墳時代後期、平安時代
	主要な遺構	縄文時代中期末から後期の住居跡・配石・土坑、古墳
	主要な遺物	縄文時代中～晩期の土器・土製品・石器、古墳後期の須恵器・土師器・鉄鏃等
	特殊遺構	
	特殊遺物	
	調査期間	1992年5月11日～1993年3月15日

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第91集

水口遺跡

－一般県道鴈宿中道線建設に伴う発掘調査報告書－

印　刷　1994年3月22日
発　行　1994年3月31日
編　集　山梨県埋蔵文化財センター
発　行　山梨県教育委員会
印　刷　有限会社　新星堂印刷